

靈界物語 第六七卷 山河草木 午の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十七卷』天聲社

1971(昭和46)年05月08日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇

美山梅光 びざんばいくわう

第一章 梅の花香 うめはななか 〔一七〇三〕

第二章 思想の波 しさうなみ 〔一七〇四〕

第三章 美人の腕 びじんうで 〔一七〇五〕

第四章 笑の座 わらわひざ 〔一七〇六〕

第五章 浪の鼓なみ つづみ〔一七〇七〕

第二篇 春湖波紋しゅんこはもん

第六章 浮島の怪猫うきしま くわいべう〔一七〇八〕

第七章 武力鞘ぶりきさや〔一七〇九〕

第八章 絲の縫いと もつれ〔一七一〇〕

第九章 ダリヤの香か〔一七一〇〕

第一〇章 スガの長者ちやうじや〔一七一〇〕

第三篇 多羅煩獄たらはんごく

第一章 暗狐苦あんこく〔一七一三〕

第一二章 太子微行たいしびかう〔一七一四〕

第一三章	山中 <small>さんちゆう</small> の火光 <small>くわくわう</small> 〔一七一五〕
第一四章	獸念氣 <small>じうねんき</small> 〔一七一六〕
第一五章	貂心暴 <small>てんしんぼう</small> 〔一七一七〕
第一六章	酒艷 <small>しゆえん</small> の月 <small>つき</small> 〔一七一八〕
第一七章	晨 <small>あした</small> の驚愕 <small>きやうがく</small> 〔一七一九〕

第四篇 山色連天さんしよくれんてん

第一八章	月下 <small>げつか</small> の露 <small>つゆ</small> 〔一七二〇〕
第一九章	繪姿 <small>ゑすがた</small> 〔一七二一〕
第二〇章	曲津 <small>まづつ</small> の陋呵 <small>ろうか</small> 〔一七二二〕
第二一章	針灸思想 <small>しんきうしさう</small> 〔一七二三〕
第二二章	憧憬 <small>どうけい</small> の美 <small>び</small> 〔一七二四〕

〔 〕

序文

年の瀬も早近づいて町行く人の足許も、何となく忙しき大正十三年十二月二十九日、どんよりと曇った天の下に、和知の流れを見おろしながら、崧然として一廓をなせる祥雲閣の離れの間において、北枕の西向き、夜具の船に身を横たへながら、昔の神代の物語、緑紅こき交せて織出す機の玉の絲、手繰り手繰りて述べて行く。筆執る者は、空前絶後の放れ業、高麗國を建設せむと、蒙古の原野に三軍を叱咤し右手に兵を率ゐ、左手にコーランを讀誦しながら、英雄的大活動を演じたる調子外れの男、松村眞澄を始め、日支親善の連鎖となつて、神戸道院にその敏腕を振るふ北村隆光、蒙古人に参加せむとして、資金の募集に東奔西走し、東京に出でて乗馬の稽古をなし、遙に奉天まで出かけて種々の障害に會ひ、脾肉の歎を残して、心なくも歸國したる女豪傑加藤明子の三人である。本巻は何れも蒙古氣分の漂つてゐる口述者や筆者の物したものだから、どこともなしに英雄的氣分を含んだ物語となつてゐるのは、止むを得ない道理である。

大正十三年十二月二十九日

於祥雲閣

總説

言靈別命の化身にして、照國別の従者と變化したる梅公宣傳使が、オーラ山に立籠つて、印度七千餘國の統一を夢みてゐた山賊の張本、ヨリコ姫、シーゴー、ならびに悪僧玄眞坊を言向和し、シーゴーはサンダー、スガコを助け、兩人が親の所有地を托されて、開墾の事業に數千の部下と共に着手し、玄眞坊は再び悪化して、三百の部下と共に姿を晦まし、ヨリコ姫および其の妹なる花香は梅公司に導かれて、照國別の隊に合すべく、オーラ山の間道を涉り、ハルの湖の岸邊に着き、波切丸に身を任せ、スガの港へ渡る途中、海賊の襲來や、浮島の嶺の陥没や、船長とスガの港の富豪の娘ダリヤ姫との、數奇きはまる關係などを描寫し、つぎにタラハン國カラピン王に對する種々の奇怪な物語や、左守司たりしシャカナが、タニグク山の山麓の岩窟に立籠つて、二百人の部下を集め、大望を企ててゐ

るところへ、悪僧玄眞坊がダリヤ姫を拐かして乗り込んで来る場面、並びにカラピン王の太子が、新左守司の倅アリナと共に、山野の遊覽に出かけ、山奥に迷ひ込み、舊臣のシャカンナに、計らずも山奥にて邂逅し、絶世の美女スパール嬢に會つて、太子が戀慕の情を起し、その艶麗な姿を繪に寫して歸城したる顛末や、太子が行方不明のために、王をはじめ重臣どもの狼狽の有様等千變萬化の經緯を、きはめて簡明に口述しておきました。入蒙に際し最も因縁深き、竝松の祥雲閣において、本巻を編み了つたのも、何かの因縁が結ばれてゐるのだらうと思ひます。ああ惟神靈幸倍坐世。

大正十三年十二月二十九日

於祥靈閣

この日教主殿の床の間に安置したる紅葉寶石、盛んに水を噴き出す。早速神示により隣室床の間に遷す。

第一篇 美山梅光

第一章 梅の花香（一七〇三）

オーラ山の曲の企みも大杉の怪しき夜這星は神の伊吹に吹き消され、一たん包みし木下暗、晴れては清き三千世界の梅の花香、峰の尾上を包みし黒雲もサラリと散りて、宇宙晴れの大廣原、眞夜中の空には、寶石を鑲めたやうな一面の星光瞬き、鬼の囁き、猛獸の健び、狐狸の鳴き聲も蟲の音も、ピタリと止まつて天地静寂、あたかもふくらむだ庭の砂に、ほどほどに水を打つたるが如く、一點の風塵もなく、雲霧もなし。微風おもむるに人の面を吹き、五臟六腑に静涼の氣しみ渡る。諸行無常の鐘の聲、是生滅法の杜鵑の啼く音、生滅滅己の梟の叫び、いづれも寂滅爲樂の清淨界となり果てぬ。

丹花の唇、木蓮の苔のごとき鼻の格好、黒豆に露を帯びたやうな優しく床しく

光る二つの眼、地藏の眉、あらゆる美の極、善の極、愛嬌を満面にしたたけ、
心に豺狼の爪牙を藏し、天下を掌握せむと、晝夜肝膽を碎いて、外面如菩薩内心
如夜叉、羅刹惡鬼の權化ともたとふべき山賊の大頭目、ヨリコ姫女帝は、梅公が
口より迸る天性の神氣に打たれて、忽ち心内に天變地妖を起し、胸には革新軍の
喇叭の音響き、五臟六腑一度に更生的活動を起して、專制と強壓と尊貴を願ふ欲
念と、自己愛の兇黨連は俄かに影を潜め、惟神の本性、生れ赤兒の眞心に立ちか
へり、一身の利欲を忘れ、神に従ひ神を愛し、人を愛し萬有一切を愛するの宇宙
的大戀愛心に往生したのである。

かくヨリコ姫が心に悔悟の花開き、愛善の果實みのり、信眞の光輝と、慈味に
浴したる刹那において、その眞心は天地に感應し、天は高く清く澄みわたり、一
點の雲もなく、七寶を鏤めたるがごとき星の大空をボカして、見渡す東の原野よ
り千草を分けて昇り來たる上弦の月光、あたかも切れ味のよい庖丁をもつて、圓
満具足せる西瓜を眞中より二つに手際よく切りわけしごとき、輪廓の判然とした
白銀の半玉、たちまち天地を照り輝かし、地上に往來する蟻の姿さへも明瞭に見

えてきた。

白髪童顔の山賊の巨頭、修験者と化けすまし、三千の部下を使役し、豺狼の欲を逞しうし、ヨリコ姫を謀師と仰ぎ、大親分と崇め、大膽不敵にもハルナの都の大黒主を征伐し、印度七千餘國の霸權を握らむと、霜の晨雨の夕、夢寐にも忘れぬ胸裡の秘密深く包んで、雲に聳えたオーラ山に立籠り、霧を帯にし、靄を被衣となし、木の葉のそよぎを扇の風と見做し、青空を天井と定め、草を褥となし、鬮體を假睡の枕となし、虎狼獅子熊の肉を嗜み、阿修羅王のごとく魔王のごとく、時あつては彗星のごとく、妖邪の氣を四方に吐き散らし、一本の錫杖に四海を征服し、心に秘めた魔法の劍に、諸天諸善を惱ませ苦しめ、わがままを振舞ひ、天地を自由に攪亂せむものと、夢のごとき、虹のごとき、蜃氣樓のごとき、空中樓閣的妄念を抱いて、得々として、その無謀なる目的に心身を傾注したるかれシーゴーは、三五教の神司梅公が言靈にその心膽を奪はれ、五臟六腑の汚濁を拂拭され、彼が神氣に打たれ、心氣たちまち一轉して、夜嵐にそよぐ枯尾花の手振りにも驚きふるふ、いと弱き落武者とならむとする一刹那、力と頼みしヨリコ姫の打つ

て變つた言行に、今はなほさら反抗の勇氣もなく、今まで包みし心天の黒雲はオー
ラ山の荒風に吹き散らされて、心も清き上弦の月、たちまち大地にひれ伏して、
その慈愛と温雅と清楚なる月神の美影に渴仰憧憬し、本然の性に立ち返り、惡魔
はたちまち煙と消え、胸の奥深きところに神の囁きを聞き、その靈光に觸れ、信
眞なる愛の情味に接し、全く別人のごとなり、白き長きかれの髪は白金の色、
ますます艶やかに、その顔色は天上の女神かと疑はるるばかり純化遷善し、罪も
なく穢もなく、一點の憎惡心もなく、欲望の雲霧もなし。只この上は天地神明の
加護により、誠の道を踏み、誠の業を行ひ、戦々恟々として神を畏れ神を愛し、
日夜心力を神に捧げむことを希求するに至つた。

つぎに天來の救世主、天帝の化身、オーラ山の活神と揚言し、毒舌を揮つて天
下萬民を誑惑し、惡事の限りを盡さむとしたる、奸佞邪智の曲者、玄眞坊、天下
唯一の色餓鬼、情欲の焰に苦しめられ、煩悶苦惱の結果、恥を忘れて獸畜の行爲
に及ばむとせし、偽救世主、偽豫言者なる、かれ賣僧は、三五教の神光に打たれ、
正義心の神卒に攻め立てられ、遂に悔悟して、大頭目のヨリコ姫およびシーゴー

と行動を共にせむことを誓ふに至つた。

オーラ河の水は緩かに流れ、深く青くして底さへ見えぬ河の面にきらめく星の大空を映し、そよと吹く小波に月光如來の千々に碎くる慈愛の御影を宿して、天地燦爛光明界の現象を泛ばせたり。東の大空は紅の雲、紫の霞棚引き初め、木々の百鳥は千代千代と永遠無窮の前途を壽ぎ、せせらぎの音は何事か宇宙の神祕を語るがごとく、風の響きにさへも神の御聲の宿るかと思はる。ヨリコ姫をはじめ、その他の兇黨が心の天地忽然として蓮の花の開くがごとく、薰り初めたる一刹那、五色の雲を押し分けて、忽ち昇らせ給ふ黄金鴉、旗雲の中にまん丸き日の丸を印し、いよいよ日の出の神代の祥兆を天地萬有に示したまふ。瑞祥開く聖の御代の魁とぞ、神も人も、此の山に集まれる曲人も禽獸蟲魚も、一齊に五六七の御世を壽ぎまつる思ひあり。ああ惟神靈幸倍坐世。

現幽神の三界を淨め、天地開闢の昔の祥代に立替へ立直し、神人萬有を黄金世の恩恵に浴せしめ、宇宙最初の大意志を實行せむと天より降りて嚴の御靈と現

じ、大國常立尊と現はれて神業を開始し給ひし、宇宙唯一の生神、朝な夕なに諄々として神人萬有を導きたまふ。愛善と信眞の大神教を天下に布衍し、五六七神政出現の實行に着手せむと、ウブスナ山に聖蹟を垂れ、瑞の御靈と現じて三界の不淨を拂拭し、清淨無垢の新天地を樹立せむと、神素盞鳴の大神は、世界各山各地の靈場に御靈を止め、數多の宣傳使を教養し、これを天下四方に派遣し給ひぬ。

派遣されたる神柱の一人、照國別の宣傳使の從者となり、ハルナの都の魔神の言向け戰に従軍したる梅公司是、勇氣凜々たる壯者にして、その心鏡は惶々として照りわたり、よく神に通じ、萬民が心の奥底まで、玻璃を通して伺ふがごとく、通觀して過らず、かつ心は清淨潔白にして神律を辨へ、道理に通じ、舉措常に輕快にして且つ輕からず重からず、中庸を得たる好漢なり。かれの行く所、百花爛漫として咲き満ち、地獄はたちまち天國と化し、猛獸の猛る原野は鳥唄ひ蝶舞ふ百花爛漫の天國と化するの慨あり。精神剛直にして富貴に阿らず威武に屈せず、常にその職に甘んじ、何事も神意と解して、いかなる境遇にあるも不平を洩らさず、悲しまず、いかなる悲境に沈淪するも悲觀せず、悠悠閑々として自ら樂しみ、

自ら喜び、災の來たる時は、これ天の恩惠の鞭となし、喜びの來たる時は天の誠
と警戒し、寸毫も油斷なく、かつ樂天主義をもつて世に處す。實に神人の典型、
宣傳使の模範、言心行いづれの方面より見るも、一點の批評をさしはさむの閒隙
だになし。かれは照國別に從つて、よく師弟の情誼を守り、自分の師に優れる數
多の美點を隠して、その徳を長上に譲り、同情に富み、僚友をよく愛し、目にふ
るる者、耳に入る物、いづれも彼が感化の徳に浴せざるはなし。

元來梅公は大神より特に選ばれたる神柱にして、無限の祕密を藏し、神妙祕門
の鍵を授かり、宇宙間一の怖るる者なき大神人なり。それゆゑ彼は平然として惡
魔の巢窟に單騎出入し、豺狼の群に入つて、機に臨み變に處し、一男二女の危難
を救ひ、かつ他の宣傳使のごとく、千言萬語を費やすの要なく、さしも兇惡なる
惡神の巨頭、ヨリコ姫等の一派を翻然として悔悟せしめたる英雄なり。彼が師の
照國別宣傳使も、彼が神格の一部分を窺知することさへ出來なかつた。しかしな
がら彼は和光同塵的態度をもつて、愛善の徳と信眞の光の劣れる照國別を神の經
綸として、吾が師の君と尊敬し、照公その他の同僚に對しても、常に後輩者とし

て行動せむことを望んでゐた。はたして梅公司は魔か神か真人か、ただしは大神の化身か、今後の物語によつて讀者の自ら判知されむことを望む。

これよりヨリコ姫は梅公、花香の勧めにより、タライの村に立ち歸り、母のサンヨに面會し、今までの不孝不始末の罪を謝し、今後は悔い改めて、老後の母の心を安んじ、かつ神の御ため世のために、愛善の道に生涯を投ぜむ事を誓つた。母のサンヨは二人の姉妹が梅公司の艱難辛苦の結果と慈愛心の發露によつて、無事母子の對面が出来たことを涙片手に感謝し、梅公を眞の生神として尊敬して止まなかつた。

次にシーゴ坊や玄眞坊の兩人はサンダーの家に至り、彼が兩親に向かつて、今日までの惡業を謝し、かつ悔ひ改めて天下萬民のために神業の一部に奉仕せむことを誓つた。サンダーの兩親は夢かとはかり喜んで、梅公その他に對し、百味の飲食を調理してこれを響應し、かつシーゴには數多の所有地を與へ、開拓の事業に従事せしむることとなつた。かれシーゴはサンダー、スガコ姫に從ひ、兩人を主人と仰ぎ、スガコ姫が父のジャンクが所有せる無限の山林田畑を開墾し、

三千の部下をして之に従事せしめ、大都會を造つて………新しき村を經營し、
タライの村の眞人と謳はれて生涯を送つた。

父のジャンクは遙かにサンダー、スガコの無事に歸宅せしこと、梅会社に救は
れしこと、およびシーゴを一の番頭となし、數千の部下を役使して開墾の業に
従事せしめ、日々事業の發展しつつある事を聞知し、大いに喜んで、全く神の恩
恵となし、一生を神に捧げ、神業に参加し、屍をさらすまで、吾が郷里に歸らな
かつた。そしてジャンクは義勇軍の勇士としてバルガン城下に驍名を走せた。
一旦悔い改めたる玄眞坊は再び惡化して、シーゴと論争し、三千の部下の中、
不平組三百餘名を引率し、オーラの峰を涉つて民家を掠奪しながら、地教山方面
指して姿を隠したのである。

惟神の心は白梅の

旭に匂ふ姿なりけり

梅の花香ひ初めたる如月の

空そらに瞬またたく珍うづの星影ほしかげ

何事なにごとも神かみの教をしへにヨリコ姫ひめ

世よの神柱みはしらとなりし雄々ををしさ

現世うつしよの罪つみをば恐れおそしーゴご（死し後ご）を

思おもひて神かみに歸かへるつはもの

サンダーヤスガコは生うまれし己おのが村むらに

歸かへりて新村にひむら永久とに開ひらきぬ

光ひかり暗やみ行きかふ曲まがの玄真げんしんは

心こころ變かはりて鬼おにとなりぬる

村肝むらきもの心曇こころくもりし曲人まがひとと

山野やまのに迷まよふ玄真げんしんの果はて

（大正一三・一一・二三 新一二・一九 於教主殿 松村眞澄録）

第二章 思想の波〔一七〇四〕

梅公はヨリコ姫、花香姫を伴ひ駒に跨がり轡を並べて照國別の隊に合すべく、間道を選んでオーラ山の谷間を川に添ひ、晝夜の區別なく猛獸の聲や猿の健びに驚かされつつ、草を褥とし、立木を屋根となして幾夜を重ね、オーラ山脈の東南麓に無遠慮に展開せるハルの湖の岸邊に着いた。

この湖水は高原地帯の有名なる大湖水にして東西二百里、南北三百里と稱へられてゐる。湖中には無数の大小島が星のごとくに配置され、各島嶼いづれもパインの木が密生して世界一の風景と稱へられてゐる。

梅公は數日間オーラ山の事件や、その他について日を費やしたので、この湖水を渡り近道を選んで師の軍に追付かむがためであつた。

岸邊には七八艘の渡湖船が浮かんでゐる。一行三人は最も新しき「波切丸」といふ巨船に乗り移つた。波切丸には數百人の乗客があつた。折りから吹きくる北風に眞帆を孕ませながら、男波女波をかき別けて船足靜かに音もなく進み行く。

漸やうやくにして船ふねは岸きしの見みえぬ地ち點てんまで滑すべつて來きた。印いん象しやう深ふかきオーラの山さん脈みやくはこの湖こ水すゐを境きやう界かいとして東とう西さいに長ながく延えん長ちやうし、中ちゆう腹ふくに霞かすみの帶おびをしめ、その頂いたは雲くもの帽ぼう子しをかぶつて、梅つめ公こう一いつ行かうの勇ゆう者しやを見送みおくるの慨がいがあつた。船せん中ちゆうの無む聊れうを慰なぐさむるために、數あまた多じやうの乗きやく客きやくは大部分だいぶぶん甲かん板ばんに出いで、四よ方もの風ふう光くわうを打うち眺ながめて、歌うたを詠よんだり、詩しを吟ぎんじたり、三さん々さん五ご々ご首こかうを鳩あつめて時じ事じだん談だんに他た愛あいもなく耽ふけつてゐる。

梅つめ公こうほか二人ふたりは興きやう味みをもつて素そ知しらぬ顔かほして、乗じやう客きやく各かく自じが思おもひ思おもひの出で鱈たら目め話わや脱だつ線せんだらけの噂うわさなどをニコニコしながら聞きいてゐた。乗じやう客きやくの一人いちにんは、

甲か「もしもしお前まへさまは大たい變へんに元げん氣きさうな人ひとだが、今こん度どの戰いくさには召せう集しふされなかつたのですかい」

乙おつ「エー、私わたしは二十五にじふご才さいの男をとこ盛さかりですが、悲かなしいことにや不ふ具ぐ者しやだから徵ちやう兵へいを免めん除ぢよされ、宅うちにくすぶつてゐましたが、どうも大たい抵ていのものは皆みな從じゆう軍ぐんし、あとに残のこつてゐるものは子こ供どもや爺ぢやう嬢ぢやう、それも綺きれ麗いな女によう房ぼうや娘むすめはバラモン軍ぐんが搔かツさらへて行いつた後あとだから、後あとに残のこされた人にん間げんは婆ばか、お多た福ふくか、不か具たはの男だん子し、獨め眼かんに跛びつこ、腰こし拔ぬけ、鞆きん丸たま潰つぶし、いやもう埒らちもない屑くづ物ものばかりで糞くそ面おも白しろくもないので、バルガンの

都へ行けば、私の姉の家があつて立派な商賣して暮してゐるとのこと、一遍遊びに來い遊びに來いと言つて來たが行く暇がなかつたが、聞けば大足別の軍隊が都に攻め入つたとかいふこと、いづれ戰場となれば住民の困難狼狽、名状すべからざるものがございませう。ついては姉の身の上も案じられますし、見舞ひがてら、避難がてら、遊びがてら、行つて見やうと思つて、瘦馬に跨がり、オーラ山の間道を通つて、ヤツとのことでこの船に間にあつたのです」

「ア、さうですか、そりや大變なことですな。見舞ひがてら遊びに行くとおつしやつたが、さうすると、お前さまの考へでは、姉さまは先づ無事だといふ豫想がついてるとみえますな」

「なに、他家（豫想）も宅もありませぬが、私の姉といふ奴アなかなかすい奴で、この十年前に大戦のあつた時もチャンと一日前に嗅ぎ知り、オーラ山へ逃げ難を免れたこともございます。それはそれは抜目のない姉ですよ。私の兄弟は五人ありましたが一人は早く死に、二人の妹は今度のバラモン軍に搔ツさらはれてしまつたのです。何とかして大足別の陣中を窺ひ、妹の所在も一つは探したい

と思つて跛ながらも瘦馬に跨がり、ヤツとここまで出て来た次第です。本當に世の中は、こんな事思ふと、厭になつてしまひますよ」

「かふいふ時に天地の間に神様があつたなら救世主を世に降し、人民塗炭の苦を助けて下さるだらうに、救世主の再臨を早天の雲霓を望むごとく、待つてをつも、こんな大國難の場合に現はれ給はぬ以上は、神はないものだ」と認めるより仕方はありません」

「世は末法に近づき、惡魔はますます横行闊歩し、良民は日に月に虐げられ、まるつきり阿鼻叫喚、地獄のやうなものです。偽救ひ主、偽彌勒、偽キリストなどは所どころに現はれますが、彼等是要するに善の假面をかぶつた惡魔ですから。バラモン軍よりも山賊よりも一層恐ろしい代物だから、うつかり相手になれませぬ」

丙「しかし貴方がた、私はヒルナの都の傍に住むものですが、途々承れば、あのオーラ山には天來の救世主、天帝の御化身、玄眞坊とかいふ活神様が出現遊ばし、お星様までが、有りがたいお説教を毎晩聽聞のため、有名な大杉にお降り遊ばし、

燦爛たる光明を放つてゐるといふ事ぢやありませんか。貴方がたはオーラのお方と聞きましたが、御参詣なされたのぢやありませんか。ずゐぶんヒルナの邊まで偉い評判ですよ」

乙「なに、あいつは偽救主で、賣僧坊主が山子をやつてるに違ひないです。おほかたバラモン軍の間諜かも知れないといふ噂です。私の村の者は一時は誰も彼も信じて詣りましたが、あまり御利益がないので誰も詣らなくなりまして。かへつて遠國の方が信仰心が強く、何十里、何百里といふ所から、馬や牛に澤山の穀物を積んでゾロゾロやつて参りますが、妙なものですわ。皆遠くから詣つて来るものはお神徳を頂くといふことです」

丙「燈臺下暗し」といつて、どうも近くの人は本當の信仰に入らないものです。大體人間が神の教をする人に偽救主とか賣主だとか、廢品ものだとかいつて批評するのは、信仰そのものの生命が已にすでに失はれてゐるのですからお神徳のありさうな事はありませんよ。鰯の頭も信心からといふ譬の通り、たとへオーラ山の救ひ主が偽であらうが、泥棒の化けたものであらうが、信仰するものは、つま

り、その神柱を通じて誠の神に絶つてゐるのですから、たとへ取次は曲神であらうと、信仰そのものが生きてゐる限り、キツとその誠は天に通じ御利益のあるものと存じます。取次の善悪正邪を批評してゐる間は、まだ研究的態度、批判的、調査的態度ですから、信仰の規範に一步も入つてゐないのです。それで私は賣主が現はれて天帝の化身と名のらうとも、「天帝の化身」といふ、その名を信じさへすれば良いのです。さうでなくちや、絶対的歸依心は起らないものです。なにほど偉い神様でも、不完全な人間を使つて宇宙全體の意志を傳達遊ばし、また神徳の幾部分を仲介者を通じて下さるのです。吾々は橋なき川は渡れぬ道理、どこまでも信仰は信仰ですから信じなくては駄目です。絶対服従といふ名において初めて神の神徳を授かり、暖かき神の懐に抱かれ得るのだと考へます」

甲 成るほど、さう承れば、いかにもと合點が参りました。今の世の中は物質主義の學説や主義が盛んに流行しますので、たとへ神様だつて現に吾々凡夫の目の前に姿を現はし、あるひは奇蹟を現じ、即座に靈驗を見せて下さらねば信じないといふ極惡の世の中になつてゐるのですからな。しかしながら此頃は學者の鼻高

連も、少し眼が醒めかけたとき、太靈道とか靈學研究會だとか、あるひは神靈科學研究會だとか、いろいろの幽靈研究が起りかけましたが、これも時勢の力でせう。ここ十年前までは如何なる大新聞にも大雑誌にも單行本にも、靈とか、神とかいふ字は一字も現はれてゐなかつたのですが、齋苑の館とかの生神様が此世に現はれ、御神徳が世間に輝き亘るにつれ、靈とか神とかいふ文字がチヨコチヨコ現はれて來ました。それがダンダンと日を追うて濃厚の度を増し、さすがの物質學者もソロソロ我を折つて、神靈科學研究會といふやうになつたのでせう。しかしながら科學と神靈學とは出發點が違ひ、かつ畑が違ふのですから、茄子畑で南瓜や西瓜を得やうとしても駄目ですわ。ダンダン人間や學者の目が醒めて、靈とか神とかを云々するやうになりましたが、要するに學問の行き詰り飯の食ひ詰となつて、しやう事なしに有名の學者の一二人が、靈學とか神靈とかを唱道し出すと、譯の分らぬくせに先を争うて、自分も靈を説き神を語らねば世に遅れた古い頭と言はれるだらう、社會の嗜好に投じないだらうと曲學阿世の徒が、極力【アセ】ツた結果だらうと思ひますわ』

丙「お説の通りです。本當に現代の學者ぐらゐ、没分曉漢はありませぬな。三年前に外國で流行した學説を翻譯して、それを新しい學者のやうに思つて憶面もなく堂々と發表するのですから堪りませぬわ」

乙「そら、貴方たちのお説も尤もだが、何といつても、今は證據がなければ一切人民が承知せない世の中です。さうして、證據や物體を無視して、無聲無形の靈とか神とかに精神を集中するくらゐ、この世の中に危険の大なるものはなからうかと思ひます。現に、オーラ山の救世主といつてをつた玄眞坊といふ奴ア、私の村の御家婆アさまの娘、ヨリコ姫を拐はかし、それを女帝として、自分は生神さまと成りすまし、澤山な山賊を連れて、悪い事ばかり仕出かし、一方は神さまとなつて人の懷を睨つてゐたところ、三五教の宣傳使とかに看破され、手品をあばかれ、たうとう何處かへ逃げ散つたといふことです。こんな代物が世の中に澤山現はれて、神佛の名をかり、人民をごまかすのだから、神ならぬ身の吾々人間は、確かなる證據を掴まぬ事にや安心して信仰が出来ませぬからな。それで稍常識に富んだ人間どもが、今までの宗教では嫌らず、それだといつて新しい信憑すべき

宗教も現はれず、やむを得ずして、どこかに慰安の道を求めむとし、科學に立脚したる神靈の研究をなさむと焦慮るのも、あながち無理ではありませぬよ」

丙「今の世の中の人間は昔の人とは違つて、外面は非常に開けてゐるやうですが、肝腎要の靈界の知識といふものは、からつきし駄目ですから、眞の救世主が現はれてゐるのですけど、自分の暗愚の心や邪曲なる思ひに比べて誠の神を誠とせないですから。それ故、チヨコチヨコと偽神に欺かれ、大變な災に會ひ、終ひの果にや神の「カ」の字を聞いても恐怖戰慄するやうに、いぢけて了ふのです。」

「羹にこりて膾を吹く」の譬、眞の救世主が目の前に出現してござつても、「また偽神ではなからうか、騙すのではあるまいか、觸らぬ神に崇りなし、近寄つては大變だ」といつて誠の神様を惡魔扱ひになし、一生懸命に反抗を試みるやうになるものです。しかしながら私は眞の生神様のもはや此世に降臨されたことを認めてゐます。今度の戦ひなども十年も前から神様から覺らしてもらつてゐましたよ。「國亂れて忠臣現はれ、家貧しうして孝子出で、天下道なくして眞人現はる」と申しますが、暗黒無道の此世の中を大慈大悲の神様は決してお見捨て遊ばすは

ずはありませぬ。今日の學者どもは誠の三五の大神様に對し、邪神だとか、大國賊だとか、大色魔だとか、詐偽師だとか、いろいろの惡罵嘲笑を逞しふし、譯の分らぬ凡夫どもは學者の説や大新聞の説に誑惑され、附和雷同して誠の眞人を壓迫し恐怖し、惡魔のごとく嫌つて近寄らないのです。實に憐れむべき世態ぢやありませんか。そのくせ、大眞人の首唱された世の立替へ立直し、改造、靈主體從、體主靈從、建主造從、陽主陰從等の熟語を使ひ、得々として自分が發明したやうに言つてるのです。つまり大眞人を誹謗しながら、大眞人の説を應用してゐるのだから、ツマリ渴仰憧憬してゐるのぢやありませんか。本當に、これほどな矛盾が世の中にありませうかな」

甲 「あなたのお話を聞いて見ると、どうやら三五教の信者のやうですが、違ひますかな」

丙 「お察しの通り、私は三五教信者のチヤキチヤキです。燈火を點じて床下に隠すものはありませぬ。卑怯な三五の信者は世間の壓迫や非難や輕侮を苦にして、人に尋ねられると自分は三五教ぢやないといふものが九分九厘です。心で神を信

じ口に詐るものは所謂神を殺すものです。こんな信仰は到底實を結びませぬ。また自分の位置や名譽を毀損されるかと思つて、信者たることを隠す卑怯者が多いのです。私は、そんな曖昧な信仰は致しませぬ。天下に誤解されるほどの神の教ならばキツと好いに違ひありません。盲千人の世の中、盲が象を評する如き人々の噂や、誹や批評なんかに躊躇してやるやうな事では、いつまで経つても神様を世に現はすことは出来ませぬ。また天下を救ふ事も出来ないでせう。私は、さういふ信仰のもとに三五教の神柱瑞の御靈は、天地の大先祖たる國常立尊様の御神教を傳達遊ばす世界唯一の神柱と堅く信じてゐるのです」

乙「お前さまの信仰も、そこまで行けば徹底してるやうだが、しかしながら用心しなさいや、あの蛙といふ奴、背中に目がついてるから現在自分を呑まむとする蛇の背に、晏然として鼯をかいてゐる。さうして、終ひの果てにや、その蛇に尻尾でまかれ、ガブリと呑まれて命を捨てるのです。鮫鯨主義、海月主義の偽救ひ主が、彼方こちらに現はれる世の中ですから、信仰も結構ではありませんが、そこは十分氣をつけて、あんまり固くならぬやうに、片寄らないやう、迷信に陥らぬ

やう御注意なさるが結構でせう」

丙「御注意は有りがとうございます。迷信に陥らないやうにと仰有いました、今日の世の中に迷信に陥らないものが一人もございませうか。政治萬能主義に迷信し、黄金萬能主義に迷信し、共産主義に迷信し、社會主義に迷信し、過激主義に迷信し、醫者に迷信し、辨護士に迷信し、哲學に迷信し、一切の科學に迷信し、宇宙學に迷信してゐるものばかりです。各自に猿の尻笑ひで、自分の思つてゐるとは正信だ、他人のやつてゐることは迷信だと考へるは、ヤツパリ迷信です。私が三五教を信仰してゐるのも、ヤツパリ迷信かも知れませぬ。大神様の地位に立つてこそ、初めて眞信とか正信とか言へるでせうが、紙一枚隔てて向かふの見えない人間の智力や眼力でどうして正信者となることが出来ませう。それだから、吾々はおくまで迷信して神様といふその名に絶対服従するのみです。これが吾々にとつて唯一の慰安者となり、天國開設の基礎となり、生命の源泉となり、無事長久の基となり、天下太平の大本となり、家内和合産業發達の大根源となるものと迷信するより仕方ありませんわ、八八八八八」

梅公うめこうはヨリコ姫ひめに向かひ小聲ここゑにて、

□ 人々ひとびとの言葉ことばの端はしに知られけり
常暗とこやみの世よの枉まがの心こころを□

ヨリコ □ 光ひかり暗やみ行ゆき交かふ現世うつしよの中なかに
裏うらと表おもての規のりを聞きくかな□

花香はなか □ 花薰はなかをる人ひとの心こころに三五あななひの
神かみの恵めぐみの露つゆは宿やどれり□

(大正一三・一一・二三 新一二・一九 於教主殿 北村隆光録)

第三章 美人の腕（一七〇五）

満天の星光燦爛としてハルの湖面に金砂銀砂を沈めしごとく、月の光はなけれども名に背ふ大湖水の空は赤く、銀河はオーラ山の頂より、バルガン城の空に向かつて清く流れてゐる。東天を仰ぎ見れば、スバル星はオレオン星座を重たげに牽引して頭上高く進んで来るやうに見える。太白星は今やオーラ山の山頂の老木の木蔭を宿として、木の葉をすかしてピカリピカリと覗いてゐる。帆は瘦せて音もなく船の歩みもいと遅く、ほとんど停船せしかと思ふばかりの静けさである。湖中に散在する大小無数の島嶼は、パインの木に包まれてこんもりと静かに浮んでゐる。時々赤兒の泣くやうな海鳥の聲、アンボイナの翅の羽たたきのみ一同の耳朶を打つ。天は静寂にして聲無く、海面穩かにして呼吸せず、あたかも活力を失ひし睡れる海を往く心地。船客一同は甲板に出で夜露を浴びながら、あなたにあなたに煙管の雁首から微な火の粉を飛ばしてゐる。この時八挺艦を漕ぎながら、矢のごとく波切丸に向かつて猛犬のごとく噛みついて来た一艘の船には、十四五

人の海賊が乗つてゐた。たちまち舷に繩梯子をヒラリと投げかけ、アハヤといふ間もなく大刀を提げ上つて來たのは、この湖上にて鬼賊と恐れられてゐるコースといふ頭目であつた。彼は甲板に立ちはだかり、十四五人の部下と共に拔刀のまゝ、呶鳴つてゐる。

「此方はハルの湖水の主人公、海賊の頭目コースの君だ。もはや俺の現はれた以上は文句はいらぬ。持物一切何奴も此奴も貴賤貧富の區別なく、吾が前に献上せよ。四の五の申して拒むにおいては、汝が素首一々引きちぎり繩をとほして數珠を作り、ハルナの都の大雲山に獻納してやる。どうだ返答を聞かせ」

と傍若無人に強託を並べ出した。一同の乗客は、慄ひ戦いて船底に潛むもの、あゝるひは悲鳴を上げてデツキの上を右往左往するもの、聲さへも打ち立てず打ち慄ふもの、見るも悲惨の光景であつた。コースは部下に命じ乗客を一々赤裸體となし、用意の綱を取り出し掠奪品を一纏めとなし、吾が船に今や投げ込まむとする一刹那、船底より「ヌツ」と表はれて來た名人の畫伯が描いたやうな天成の美人、丹花の唇を慄はせながら、生蠟のごとき白き腕を薄暗の中に輝かせつつ、

女「汝はハルの湖水の主と聞こえたるコーズと覺えたり。懲しめくれむ」
といふより早く、仁王のごとき荒男の襟髪を掴んで、エイと一聲海上めがけて投げ込めば、不意を打たれて、さすがのコーズも空中を二三回上手に回轉しながら、自分の船にドスンと落ちて尻餅をついた。他の乾兒どもは驚いて前後左右に逃げ廻るを、……エエ木葉ども面倒なり……と將棋倒しに掴んでは投げ、掴んでは投げ、瞬くうちにデッキの大掃除を終つてしまつた。美人は白き齒を現はしながらさも愉快げに「オホホホ」とかすかに笑ひ、悠々として階段を下り、何喰はぬ顔をして吾が寢室に入り、腕を枕に熟睡の夢に入つた。乗客一同は怪しき女のこともなく現はれて、惡漢を海中に投げ込みし噂のみにて喧々囂々と囁き合ふのみであつた。

梅公はウツラウツラ睡りつつありしが、人々の囁く聲にフツと目を醒まし、何事ならむと耳を澄まして聞きぬれば、諸人の聲……助けの神が現はれた……とか、……海の龍神の化身が吾等を救つてくれたのだ……とか、オーラ山の天狗の娘だ……とか、……海の女だ……とか、種々雑多の憶測を逞しふしてゐる。船長はや

つと安心せしものごとく、怖る怖るデッキの上から海面を見渡せば、コースの船は見えねども、遙かに遠き島影に十數艘の賊船が波切丸の前途を要し、手具脛引いて待つものごとく思はれてならなかつた。船長のアリーは雙手を組んで思ふやう……今の船路を取らば必ずやコースの手下の奴に再び脅かされむ。迂回ではあるが、船首を東に轉じ、岸邊に近づきつつ進み行かむものと……、部下の水夫に令を下し、艀を操り、櫂を漕ぎながら一生懸命に、鏡のごとき海面に俄かの波紋を描きつつ、力かぎりに驅け出した。船はたちまち暗礁に乗り上げ、船底はガラガラガラバチバチバチと怪しき音を立て船客一同の肝を潰した。たちまち阿鼻叫喚、「助けてくれい助けてくれい」と悲鳴の聲、船の全面より聞こえる。梅公はたちまち舷頭に立ち現はれ、天の數歌を奏上し、音吐朗々として神に對して救助祈願の歌を奉つた。

浪も静かなハルの湖
天の河原を空に見て

御空は清く水清く
漕ぎゆく御船は棚機の

神を齋いつきし玉船たまふねぞ 守まもらせたまへ和田わたの原はら

所領うしほぎたまふ龍神たつかみよ 吾等われらは睡ねむりに入りながら

花咲はなさき匂におふ天國てんごくの 清きよき御園みそのに遊あそびつつ

皇大神すめおほかみの御前おんまへに 魂みたまを清きよむる神かみの御子みこ

波切丸なみきりまるに身みを任まかせ 果はてしも知らぬ雲くもの上うへ

諸人もろびとともに進すすむなり 大空おほぞら渡るこの船ふねに

暗礁あんせうの艱なやみのあるべきか 如何いかなる神かみの計はからひか

はかりかぬれど皇神すめかみの 教をしへを傳つたふる宣傳使せんでんし

天降あもりて守まもりある上うへは 如何いかなる曲まがのさやるべき

神かみの救すくひの船ふねにのり 救すくひの道みちを傳つたへ行く

天地てんちの神かみの御爲おんために 誠まことを盡つくす梅公うめこうが

今日けふの難なやみをみそなはし 吾わが言靈ことたまの勢いきほひに

天津空あまつそらより科戸邊しなどべの 神かみの伊吹いぶきを投なげたまひ

湖うみの睡ねむりを醒さまさせて 海馬かいばは鬣たてがみ打ち振ふるひ

海底深く潜みたる

龍神たちは立ち上り

激浪怒濤を呼び起し

隠れし岩に乗りあげし

これの御船を中天に

捲き上げながら暗礁の

難より救ひたまへかし

たとへ海賊幾萬の

部下を従へ攻め來とも

吾には神の守りあり

さはさりながら諸人は

不淨の人の混はりて

神の怒りを招くらむ

アア皇神よ皇神よ

吾が玉の緒の命をば

召させたまふもいとまじ

諸人たちの命をば

救はせたまへ惟神

三五教の梅公が

一生一度の御願ひ

謹み畏み願ぎまつる

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

大日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

海はあせなむ世ありとも

皇大神の御ために

珍の御靈を世に照らし

千代萬代も限りなく

現幽神の三界に

出入なして神の子の

吾は命を守るべし

召させたまへよ吾が身體

肉の命は滅ぶとも

御魂の命のある限り

神の依さしの神業を

謹み仕へまつるべし

救はせたまへ諸人を

浮ばせたまへ此の船を

と聲高々と謠ふをりしも、東北の天に一塊の黒雲起り、見る見る擴張して満天の

星光を呑み、次いでハルの湖を呑んでしまつた。轟々たる颯風の響き、波濤の音、

たちまち波切丸は、木の葉のごとく、高まる浪に中空に捲き上げられ、その刹那、

船底は暗礁を離れて浪に半ば吞まれつつ、可なり大きい島影に期せずして運ばれ

た。浪靜かなる風裏の島影に船を浮かべてホツと一息する間もなく、たちまち満

天拭ふがごとく晴れ渡り風凪ぎ浪靜まりて、餘りの變化の早さに夢かとはばかり驚

かぬはなかつた。

☞ 惟神かむなの伊吹いぶきの御恵みめぐみに

玉たまの御船みふねは救すくはれにけり

吾わが魂たまは中空ちうくうに飛とび吾わが船ふねは

浪なみの谷間たにまに浮うき沈しづみせり

眞心まごころを籠こめて祈いのりし甲斐かひありて

一息ひといきつきぬ波切なみきりの船ふね

曲神まががみはいづこを指さして逃にげにけむ

大海原おほうなばらに影かげだに見みせず

天てんを呑のみ島しまをも呑のみし暗やみの幕まく

跡あとかたもなく晴はれし嬉うれしさ

百鳥ももどりの聲こゑもやうやく聞きこえけり

浪なみの響ひびきの治をさまりてより

青あをざめし人ひとの顔かんばんせやうやくに

みかえし初そめし夜よるの湖うみかな

天はさけ地は破れむと怪しみし

荒風浪もおさめます神

くしびなる神の力を見るにつけ

人の力の小さきを恥づ

師の君はバルガン城に打ち向かひ

メラオンナにて吾待たすらむ

シャカンメラ鬣振ひ吾が船に

かみつきし時吾もふるひぬ

鬣を振つて立てるシャカンメラ

大海原の底に入りけむ

うたかたの泡と消えたるシャカンメラ

御船を守れ神の國まで

何處ともなく柔しき女の唄ふ聲。

ハルの湖往き來の人を惱ませる

曲を拂ひし時の嬉しさ

皇神の珍の力にヨリコ姫

いま初めてぞ人を助けし

今までは醜の醜業のみなして

罪を造りし事の悔やしさ

罪深き吾ある故に海の神は

いましめ給ふかと驚きてけり

梅公の珍の司の言靈に

奇の御救ひ現はれにけり

惟神いざ今日よりは大道に

進む身こそ樂しかりけり

海賊の難を避けむとして誤つて暗礁に乗り上げたる波切丸も、梅公が熱誠を籠

めたる祈願と言靈に、神も慙れみたまひしか、海浪躍動して固着せる船底を浮け放し、やうやく沈没破壊の難を免がれしめ給ひぬ。船長をはじめ乗客一同は、梅公の前に跪いてその神徳を讃め稱へ、かつ大神に感謝の誠を捧げた。漸くにして夜はホンノリと明け放れ、再び魚鱗の浪を湛へたる蒼味だつた水面を南に南に迂り行く。

(大正一三・一一・二三 新一二・一九 於教主殿 加藤明子録)

第四章 笑の座(一七〇六)

湖神白馬の鬣を揮つて、激浪怒濤を起し、ほとんど天をも呑まむとする勢ひなりし湖上の荒びも、癩癩が治まつたやうに、まるつきり嘘をついたやうにケロリと静まつて、水面はあたかも疊の目のごとく、縮緬皺をよせてゐる。島影を漕ぎ出した波切丸は、欸乃豊かに舳を南方に向けていざり出した。

この地方の風習として、人びと何れも閑散な時には無聊を慰むるために、笑ひの座といふものが催されることがある。笑ひの座に参加する者は、何れも黒い布で面部を包み、何人か分らぬやうにしておいて、上は王公より下は下女下男の噂や、國家の現状や人情の機微などを話し、面白く可笑しく、罵詈訾笑を逞しうして、笑ひこけ、互ひに修身齊家の羅針盤とするのである。さすが權力旺盛なる大黒主といへども、この笑ひの座のみには一指を染むることも出来なかつた。笑ひの座は庶民が國政に參與することのない代りに、その不平や鬱憤を洩らし、あるひは政治の善惡正邪や、國家の利害得失までも、怯めず臆せず何人の前にも喋々喃喃と吐露することを、不文律的に許されてゐたのである。

日は麗かに、風暖かく、波は靜かに、舟の歩みもはかばかしく、はるかの湖面には陽炎が日光に瞬いてゐる。その有様はあたかも湖面の縮緬皺が空中に反映したかのやうに思はれた。さも恐ろしかりし海賊の難や暴風怒濤の悩み、ほとんど難破に瀕したる波切丸の暗礁の難を免れたる嬉しさに、いづれも天地の神を禮拜し、感謝の辭を捧ぐること半時ばかり、そのあとは三々伍々デッキの上を圓

をゑが描えいて、笑わらひの座ざが開ひらかれた。

甲か「諸しよ君くん、どうおです、この穩おかな湖こ面めんを眺ながめて、旅り情じやうを慰なぐむるために、天てん下か御ご免めんの笑わらひの座ざを催せましたらどうおでせう」

乙おつ「イヤそりや面おも白しろいでせう。チツとばかり、言げん論ろん機き關くわんたる天あまの瓊ぬほ矛こを運うん用ようさせても宜よろしからうかと考かんへてゐたところなです。何なにか面おも白しろい話はなしを聞ききたいものではな

ア

「皆みなさま、黒くろ布ぬのをお被かりなさい。これこも此この國くにの神かみ世よから定きまつた不ふ文ぶん律りつですから。その代かりに目めの前まへにゐる貴あな方たがたの惡あく口こう雜ざ言ごんをいふかしも知しれませぬが……笑わら

ひの座ざの規き則そくとして御ご立り腹つぶくのなきやうに豫あめ願ねがつておおきますよ、アハハハハ」

「サアサア自じ分ぶんの顔かほの【ししみ】は見みえないものだから、俺おれは偉えらい偉えらい、世せ間けんの奴やつは馬ば鹿かだとか、間ま拔ぬだとか、腰こし拔ぬだとか思おもつてゐるものおです。自じ分ぶんが自じ分ぶんを理り解かい

するやうになれば、人にん間げんも一いち人にん前まへのじん格かく者しゃですが、燈とう臺だい下もと暗くらしとかいいつて、自じ分ぶんの事ことは解わからないものおですからな。どうおか忌き憚たんなく、お氣き付づきになつたことは批ひ評やう

して下ください。それが私わたしに取とつて處しよ世せい上じやうの唯ゆめ一いつの力ちからとなりなりますから」

「宜しい、倒徳利の詰が取れた以上は、味の悪い濁酒を吐き出して、諸君を酔生夢死せしむるやうな迷論濁説が際限もなく迸出するかも知れませぬよ」

「サアサア是非願ひませう。自分の頭や顔面が見え、また自分の首や背中が見えるやうな人間ならば、自己の缺點が判然と解るでせうが、不完全に造られた吾々人間は、到底暗黒面のあるのは、やむを得ないです。その暗黒面を親しき友から、破羅剔抉して注意を與へてもらふことは、無上の幸福でせう。しかしお前さまの暗黒面も素破抜きますが、御承知でせうな」

「それは相身互ひです。そんなら私から發火しませう。……エー、あなた此頃大黒主様から大變な偉い職名を與へられたといふ事だが一體どんな御氣分がしますか、竹寺官といへば腰辨とは違つて、役所へ通ふのにも馬とか車とか相當な準備も要るでせう。随分愉快でせうな」

「實は某役所の執事に榮進したのです。しかしながら赤門を出てから官海に遊泳すること殆んど十五年、どうやらかうやら執事まで昇つたのです。吾々の學友は大抵小名から大名、納言級に昇つた連中もあります。私は阿諛諂佞とか追従と

か低頭平身などの行爲が嫌いなので、相當の實力を持ちながら漸く某役所の執事になつたぐらゐなものです。本當に十五年間も孜孜兀々として役所の門を潛り、今に借家住居をして色々の雅號を頂いたところで一錢の金が月給の外に湧いて來るでもなし、一握りの米が生れるでもなし、まるつきり高等ルンペンのやうなものです。それでも公式の場所へは他の連中が嬉しさうに雅號のついたレツテルをぶらさげて行きよるものだから、私も心に染まないけれど、何だかひけを取るやうな気分がするので、いやいやながらレツテルをはつて行くのですよ。アハハハ

八八

「嫌なもの張つて行くとは言はれましたが、しかし貴方の本心としてはまったく嫌で叶はないのぢやありませんまい。嫌ないやな毛蟲が胸にくつついてゐたら誰しも之を拂ひ落とすでせう。そこが貴方の闇黒面で、いはゆる偽善といふものです。爵位何物ぞ、權勢何物ぞ、富貴何ものぞ、ただ吾々は天下の志士だと人に思はせたいための飾り言葉でせう。虚禮虚飾を以つて唯一の處生法と爲し、交際上の武器と信じてゐられるのでせう。さういふお方が上流に浮游してゐる間は、神

様の神政成就も到底駄目でせう。私は米搗バツタといふものを見る度に、何となく嫌忌の情が胸に湧いて來るのです。しかし過言は御免を蒙っておきませう。何といつても笑ひの座での言葉でございませうからな」

「ヤ、あなたもなかなかの批評家ですね。實は私も米搗バツタにはなりたくないのです。これを辭めれば忽ち妻子が路頭に迷ひ、生存難におびやかされるから長者に膝を屈し腰を曲げ、バツタや蓄音機の悲境に沈淪しながらも陰忍自重して、あたら月日を送つてゐるのです。今日の米搗ぐらゐ卑劣な、暗愚な狹量な、そして高慢心の強い代物はありませぬわ。何かよい商賣でもあつたら、男らしく辭職をしてみたいのです。そして辭表を長官の面前へ投げつけてやりたいと、切齒扼腕慷慨悲憤の涙にくれることは幾度だか知れませぬよ。卑劣な、暗愚な、おべつか主義の小人物はドシドシ執事にもなり、小名にもなり、大名にもなつて、時機き渡ることができませんが、私のやうな硬骨漢になると、上流の奴、彼奴ア頑迷だとか、剛腹だとか、融通が利かないとか、野心家だとか、過激主義だとか、反抗主義だとか、生意氣だとか、猪口才だとか、何とかかんとか、種々の稱號をつけ

て、頭を抑へるのみならず、グズグズしてゐると寒海から放り出されて了ふので
すから、人生、米搗蟲ぐらゐ惨めな者はありませんませぬよ。實に悲哀きはまる者は官
吏生活ですよ。ハハハハ」

「全體、月の國の人間は、國は大きうても、小人物ばかりで、到底世界の強國の
班に列するの光榮を永續することは不可能でせう。外交はカラツキシなつてゐな
いし、強國の鼻息を伺ふことばかりに汲々乎とし、内政は人民の自由意志を壓迫
し、少しく骨のある人間は、何とかカンとか言つては、牢獄へブチ込み、天人若
ばかりを登用して顯要の地位に就かしめ、己れに諛び諂らふ者のみ拔擢して、愚
者、卑劣漢のみが高いところに蠢動してゐるのだから、到底國家の存立も覺束な
いではありませんか。今の時に當つて、本當に國家を思ふ英雄豪傑、または愛善
の徳にみちた大眞人が現はれなくちや駄目でせうよ」

「さうですなア、私の考へでは、ここ二三年の間には、月の國の大國難が襲來す
るだらうと思ひます。大番頭も、その他の納言も、どうも怪しい怪しいと何時も
芝生に頭を鳩めて、青息吐息で相談をやつてゐますが、何れも策の施しやうがな

いと言つてをります。何といつても今の世情は、宗教を邪魔物扱ひし、物質本能主義を極端に發揮し、何事も世の中は黄金さへあれば解決がつくやうに誤解してゐたものですから、従つて國民教育も全部物質主義に傾き、國民信仰の基礎がぐらついて、ほとんど精神的破産に瀕してゐるのですから、到底この頽勢を挽回する望みはありますまい。今に世界は七大強國となり、十數年の後には、世界は大強國に分れるといふ趨勢ですが、どうかして印度の國も、二大強國の一に入りたいものですが、今日の頭株の施政方針では、亡國より道はありませぬ。物價は高く、官吏は多く、比較的人民も多くして、生存難は日に日に至り、強盜殺人騒擾なども、無道的行爲は到る處に瀕發し、仁義道德地に墮ち、人心は虎狼のごとく相荒び、親子兄弟の間も利害のためには仇敵もただならざる人情、教育の力も宗教の力も、サツパリ零です。否宗教はますます悪人を養成し、經濟學は國家民人を貧窮に陥れ、法律は善人を疎外し、智者を採用し、醫學は人の生命を縮め、道德は悪人が虚偽的生活の要具となり、商業は公然の詐偽師となり、一として國家を維持し國力を進展せしむるものは見當りませぬ。それだから私も一つ奮發し

て、國家の滅亡を未然に防ぎたいと焦慮してをりますが、何分衣食住に迫はれて
あるものですから手の出しゃうがありません。米搗蟲の地位を利用して賄賂でも
どしどし取れば、また寒海を辭した時、社會に活動するの餘祐も出来るでせうが、
それは私には到底出来ない藝當です。とやせむかくやせむと國家の前途を思ひ、
日夜肺肝を碎いてをりますが、心ばかり焦つて、その實行の緒につくことが出来
ないのは遺憾千萬でございます

「今あなたは、官を辭したら、衣食住に忽ち困るから、國家の大事を前途に控へ
ながら、活動することが出来ないといはれましたが、それは貴方の薄志弱行とい
ふものです。徒に切齒扼腕慷慨悲憤の涙にくれてみたところで、社會に對して寸
效も上らないでせう。納言になるだけの腕を持った貴方なれば、民間に下つて何
事業をせられても屹度相當の収益もあり、また成功もするでせう。人は斷の一字
が肝腎ですよ。空中を翔る鳥でさへも、何の貯へもしてをりませぬが、天地の神
は、彼らを安全に養つてゐるだけありませんか。窮屈な不快な寒吏生活を罷めて、
正々堂々と自由自在に、何か事業をおやりなさつたら何うです。活動はきつと衣

食住を生み出すものです。何を苦しんで官費に可憐貴重な生命を固持する必要がありませんか」

「お説は一應ご尤もですが、吾々は悲しいことには父母の膝をかぢつて、小學、中學、大學と一通りの學問の經路を越え、學窓生活のみに日を送り社會一般の事情に通ぜず、また苦勞をしたこともなし、今となつては乘馬おろしの様なもので、寒海を離れたならば、何一つ社會に立つて働く仕事がありません。新聞記者にでもなるか、或は三百代言の毛の生えたやうな者になるより行き場がない厄介者ですからな」

「すべて人民の風上に立つ役人たる者は、何から何まで、之が一つ出来ないといふことのないところまで、經驗を積み重ねばならず、また人情にも通じてみなくてはならないはずなのに、今日の官吏なる者は、すべて社會と沒交渉で、何一つの藝能もなく、無味乾燥な法律學のみに頭を固めてゐるのだから、風流とか温雅とか、思いやりとかの美德が備はつてゐない。そんな連中が世話の衝に當つてゐるのだから、民衆が號泣の聲も塗炭の苦しみも目に入らず耳に聞こえず、世はます

まず悪化するばかり、これでは一つ天地の神の大活動を待たねば、到底暗黒社會の黎明を期待することは難しいでせう。アア困つた世態になつたものだなア

「假に私が官を辭し、民間に降るとすれば、どうでせう、何職業を選むべきでせうか。どうか一つ知恵を貸していただきたいものですな」

「あなた到底駄目でせう。人に智恵を借つてやるよなことでは、何事業だつて、成功するものだありませぬよ。自分が自分を了解してゐられないのだから、……先づ……かういふと失禮だが……あなたの適業と言へば山賊でせう」

「これは怪しからぬ。私がそれほど悪人に見えますか。私も印度男子です。腐つても鯛、苟も納言の地位に登つた紳士の身でありながら、山賊が適任とは、あまりご過言ではありませんまいか」

「ハハハ、納言となれば何れ數百人の小泥棒を監督してゐられたでせう。さうすれば貴方は今日まで、立派な役人と表面上見えてを つても寒賊の親分だ、寒賊が山賊になるのは、適材を適所に用ふるといふものです。あのオーラ山のヨリコ姫、シーゴ、玄眞坊などを御覽なさい。堂々と山寨に立籠り、三千の部下を指揮し、

王者然と控へてゐたではありませぬか。表面納言などと、こけ威しの看板を掲げ、
レツテルを吊らくつて人民の膏血をしぼり、賄賂をとり、弱者を苦しめ、強者の
鼻息を窺ひ、旦つ上長の機嫌を取り、女性的卑劣きはまる偽善的泥棒を行つてゐ
るよりも、シーゴのやうに堂々と泥棒の看板を掲げてやつてる方が、よほど男
らしいだありませぬか。今日の世の中は上から下まで泥棒ばかりです。まして泥
棒をせない官吏は一人もありません。人權蹂躪の張本、壓迫の權化、鬼の再來、
幽霊の再生、骸骨の躍動、女房の機嫌とり、寒商の番頭などをやつてゐるよりも、
幾數倍か山賊の方が男性的でせう、ハハハハ。イヤ失禮、天性の皮肉屋、惡口
屋ですから、どうぞ大目にみて下さい……イヤ大耳に聞いて下さい」
シーゴは二人の話を、背をそむけながら、耳をすまして聞いてゐた。そして
時々微笑したり、溜息をついたり、ある時は肩をそびやかしたり、平手で額口を
打つたり、兩方の手で顔を拭うたり、頭を搔いたりしてゐた。そして彼シーゴ
は自分が今まで、オーラ山でヨリコ姫を謀師とし、山賊の大頭目として豺狼のご
とき惡人輩を使役してゐたのは、あまり良心に恥づる行動でもなかつた、印度男

子の典型は俺だ、如何にも寒狸といふ奴、卑怯未練な小泥棒だ、到底俺の敵ではない。ヤツパリ俺は偉いワイ、三五教の梅公さまの威徳に打たれて、神の道に改悛歸順を表したものの、今となつて考へてみれば實に措しいことをした。もはや六日の菖蒲十日の菊だ。しかしながら俺が偉いのではない、ヨリコ姫女帝の縦横の智略、權謀術數的妙案奇策が與つて力あつたのだ。ヨリコさま女帝もこの話は耳に入つただろ、どうか自分と同様に心を翻へしてくれないか知らん。大黒主だつて大泥棒だ、勝てば善神、負くれば悪神だ。善惡正邪は要するに優勝劣敗の稱號だ。なまじひ、菩提心を起し、宗教なんかに溺没したのは一生の不覺だつた。今の話で聞くと、宗教家だつてヤツパリ一種の泥棒だ。世の中に顔だとか、恥だとかいつて氣にかけてるよな小人物では、生存競争の激烈なる現代に立つて、生存するこた出来ない。アアどうしたら可からうかな。一旦男の口から神佛に誓つて悔い改めますと言つた以上、この宣誓を撤回する譯にもいかない。それでは男子たるの資格はゼロになつてしまふ……と吐息をついてゐる。

ヨリコ姫は微笑を泛かべながら、シーゴの前に進み來たり、

村肝むらきもの心こころの空そらに雲くも立ちて

月日つきひは暗やみに包つつまれにける

右みぎやせむ左ひだりやせむとシーゴーが

動うごく心こころの淺あさましきかな

男子をのこてふもの心の弱よわきをば

今目いまのあたり見みるぞうたてき

惟かむながら神かみのまにまに進すすみゆけ

救すくひの舟ふねに乘のりし身みなれば

シーゴー 煩惱ぼんなうの犬いぬに追おはれて吾われは今いま

あはや地獄ぢじくに墮おちなむとせり

うるはしき汝なれが言こと靈たま聞きくにつけ

胸むねの雲霧くもぎり晴はれわたりける

ヨリコすくみ救ひの神船みふねに乗りし吾々われわれは

神かみのまにまに世よを渡りわたりなむ〆

ヨリコ姫ひめはシーゴシーゴの手てを執りと、船舷ふなばたに立ち、東方とうほうに向かむつて折をりから昇のぼる旭あさひを拜はいし、梅公うめこうに導みちびかれて宣傳せんでんの旅たびに着つきたることを感謝かんしゃし、かつ天地てんちに向かむつて次つぎのごとき誓ちかひを立たてた。

一いち、愛善あいぜんの徳とくと信眞しんしんの光ひかりに充みち智慧證覺ちゑしよつかくの源泉げんせんに坐ます、天地てんちの太祖たいそ大國常立おほくにとこたちのおほ大神かみの御神格ごしんかくに歸依きえし奉りまつ、天下てんかの蒼生さうせいと共に無上むじやう惟神かむながらの大道だいだうを歩あゆまむことを祈願きぐわんし奉たてまつる。

二に、大祖神だいそしんの宣示せんじし給たまひし惟神かむながらの大道だいだうを遵奉じゆんほうし、愛善あいぜん信眞しんしんの諸光徳しよくわうとくに住ぢうし、大海だいかいの如ごとき智慧證覺ちゑしよつかくの内流ないりうを拜はいし、天下てんかの蒼生さうせいと共にこの大道だいだうを遵奉じゆんほうし、三界さんかいを通つうじて神子しんしたるの本分ほんぶんを完全くわんぜんに保持ほぢし、神かみの任よさしの神業かむわざに奉仕ほうしせむ事を祈願きぐわんし奉たてまつる。

三さん、天下てんかの蒼生さうせいを愛撫あいぶし、神業しんげふを完成くわんせいし、嚴瑞げんずゐ二靈にれいの大神格だいしんかくを一身いつしんに蒐あつめ、神世しんせい

復古萬有愛の實行に就かせ給ふ伊都能賣神柱の神格に歸依し、絶對的服從の至誠をもつて神業に参加し、大神の聖慮に叶ひ奉り、一切無碍の神教を普く四海に宣傳し、斯道の大本をもつて暗黒無明の現代を照暉し、神の御子たるの本分を盡し奉らむことを誓ひ奉り、罪惡の身を清め免し給ひて、神業の一端に使役されむことを祈願し奉る」

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 松村眞澄録)

第五章 浪の鼓「一七〇七」

波切丸の甲板の上にて笑ひの座が開かれ、甲乙二人の問答を聞いて、今までの惡業を改め三五の道に翻然として歸順したるシーゴは、又もや御靈の土臺がグラつき出し、再びもとの山賊に立ち歸り、あくまで大膽不敵に山賊萬能主義を發揮せむかと決心の臍をきはめ、良心たちまち邪鬼となり、惡魔となり大蛇となら

むとせし危機一髪の刹那、ヨリコ姫が誡めの歌に悔悟し、地獄陥落の危険を免れた。ヨリコ姫はタライの村に開墾事業に従事してゐると思つてゐたシーゴーが、いつの間にか波切丸に乗り込み吾が傍に在りしを見て怪訝の念に打たれながら、言葉しづかに丹花の唇を開いてやや微笑を泛かべながら、

「其方はシーゴーさまぢやないか。タライの村に堅氣となつて、開墾事業に従事してゐらるるだらうと思つてゐたのに、いつの間に其方は吾が船に乗り込んでゐたのだい」

シーゴー「ハイ、宣傳使一行が、ハルの湖を渡つてバルガン城へお出でになると聞き、どうかしてスガの港までお送りしたいと存じ、先へ廻つて波切丸の船底に身を潜め、蔭ながら御保護の任に當つてゐたのです。この湖は澤山の海賊がゐますので、もし途中で御難があつてはと存じ、改心と報恩のために竊かに御同船を願つたのでございます」

ヨリコ「これシーゴーさま、御親切は有りがたいが、何といつても猪喰つた犬のヨリコが乗り込んでゐる以上大丈夫です。そのお心遣ひは御無用に、一日も

早く民衆幸福のために開墾事業にかかつて下さい。さうして其方は今二人の船客の話聞いて、折角黎明に向かった靈を暗黒界へ投げ入れやうとしてゐたではな
いか。萬一妾が傍にゐなかつたなら、そなたは再び天地容れざる大悪魔となつて
身を滅ぼし、來世の地獄を作るところだつたよ。男子は一旦決心した事を翻すも
のではありませぬよ。ちつと考へて下さい。私は其方のために大變に氣を揉んで
ゐるのだから」

「ハイ有難うございます。動もすれば押へつけておいた心の鬼が頭をもたげ出し、
此世の中に神も佛もあるものか。善だとか愛だとか、信仰だとか、誠だとかい
ふものは、偽善者どもが世の中を誑かる道具に過ぎないのだ。女々しいことを思
ふな。今の世の中は弱肉強食、優勝劣敗だ。勝てば官軍負ければ賊、強者はいつ
も善人と呼ばれ、弱者は悪人視せらるるのが現代の趨勢だ。何を苦しんで男らし
くもない改心などをするのだ。なぜ徹底的に悪を遂行しないか。畢竟、善といひ
悪といふのも世の中の一種の標語だ。善も悪もあつたものか」と囁きますので、
開墾事業などは「まどろ」しくなつて、「やはり遊んで大親分となつて暮す山賊

事業が壯快でもあり、男性的でもあり英雄的でもある」と、時々良心の奴がグラついて来るのです。しかしながら女帝の御訓戒によつて漸く危険区域を脱出したやうです。何分惡に慣れた私のことですから、スガの港までどうぞお伴をさして下さい。さうしてその間に宣傳使や貴女の御薰陶を受け、快闊に善のために活動したいものでございます」

「アアそれは善いところへ氣がついた。妾も一安心をしましたよ。宣傳使の梅公様がこんなことをお聞になつたならばキツと笑はれるでせう。妾も、さう心のグラつくお前さまを今まで使つてみたかと思はれては赤面のいたりですからなア」

シーゴは嬉し涙を腮邊に垂らしながら、黙々としてヨリコ姫に向かひ合掌してゐる。海の静寂を破つて、梅公の口より音吐朗々と獨唱する「神佛無量壽經」が甲板上に響き渡つた。

神佛無量壽經

第一神王伊都能賣の大神の大威徳と大光明は最尊最貴にして諸神の光明の及ぶと

ころにあらず。あるひは神光の百神の世界、あるひは萬神の世界を照明するあり。要するに東方日出の神域を照らし、南西北、四維上下も亦復かくの如し。アア盛んなるかな、伊都能賣と顯現したまふ嚴瑞二靈の大靈光、この故に天之御中主大神、大國常立大神、天照皇大御神、伊都能賣の大神、彌勒大聖御稜威の神、大本大御神、阿彌陀佛、無礙光如來、超日月光佛と尊稱し奉る。

それ蒼生にしてこの神光に遭ふものは、三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して、愛善の至心を生ず。三途勤苦の處にありて、この神の大光明を拜し奉らば、いづれも安息を得て、また一つの苦惱無く、生前死後を超越し、坐しながら安樂境に身を置き、天國の生涯を送ることを得べし。

この神の大光明は顯赫にして、宇内諸神諸佛の國土を照明したまひて聞こえざることなし。ただ吾が今その神光靈明を稱へ奉るのみならず、一切の諸神諸佛、清徒聲聞求道者縁覺諸々の宣傳使、諸々の菩薩衆、咸く共に歎稱悅服歸順し玉ふこと亦復かくの如し。もし蒼生ありてその光明の稜威と洪徳を聞きて日夜稱説し信奉して、至心にして斷えざれば、心意の願ふところに隨ひて、天國の樂土に復活

することを得べし。諸々の宣傳使、菩薩、清徒聲聞の大眾のために、共に歎譽せられてその洪徳を稱へられ、そのしかる後に成道内覺を得る時にいたり、普く三界十方の諸神諸佛、宣傳使、菩薩のために、その光明を歎稱せられむこと亦今の如くなるべし。アア我が伊都能賣の大神の神光靈明の巍巍として殊妙なることを説かむに、晝夜一劫すとも尚未だ盡すこと能はず。爾今の諸天人および後世のひとびと、神明佛陀の神教經語を得て當につらつら之を思惟し、よく其の中において心魂を端し、行爲を正しうせよ。瑞主聖王、愛善の徳を修して、その下萬民を率ひ、うたた相神令して、おのおの自ら正しく守り、聖者を尊び、善徳者を敬ひ、仁慈博愛にして、聖語神教を遵奉し、敢て虧負することなく、まさに度世を求めて、生死衆惡の根源を拔斷すべし。まさに天の八衢、三途無限の憂畏苦痛の逆道を離脱すべし。

爾等、是において廣く愛善の徳本を植ゑ、慈恩を布き、仁恵を施こして、神禁道制を犯すこと無く、忍辱精進にして心魂を歸一し、智慧證覺をもつて衆生を教化し、徳を治め、善を行ひ、心魂を淨め、意志を正しうして、齋戒清淨なること一

日一夜なれば、則ち無量壽の天國に在りて、愛善の徳を治むること百年なるに勝
れり。いかんとなれば彼の神佛の國土には、無爲自然に、皆衆善大徳を積みて毫
末の不善不徳だも無ければなり。此において善徳を修め信眞に住すること十日十
夜なれば、天國淨土において愛善の徳に住し、信眞の光明に浴すること、千年の
日月に勝れり。それ故如何となれば、天國淨土には善者多く、不善者少なく、智
慧證覺に充たされ、造惡の餘地存せざればなり。ただ自然界、即ち現界のみ惡業
多くして、惟神の大道に背反し、勤苦して求欲し、轉た相欺き心魂疲れ、形體困
しみ、苦水を呑み、毒泉を汲み、害食を喰ひ、かくの如く忽務して、未だ嘗て寧
息すること無し。

我爾等蒼生の悲境苦涯を哀れみ、苦心慘澹誨諭して教へて善道を修めしめ、器に
應じて開導し、神教經語を授與するに承用せざることなく、意志の願ふところに
在りて悉皆得道せしむ。聖神佛陀の遊履するところ、國邑丘聚化を蒙らざること
なし。天下和順し、日月清明、五風十雨、時に順ひ、十愁八歎なく、國土豊かに
して、民衆安穩なり。兵戈用なく、善徳を崇び、仁惠を興し、努めて禮讓を修む。

我爾等諸天、および地上蒼生を哀愍すること父母のごとく、愛念旺盛にして無限なり。今我この世間において、伊都能賣の神となり、佛陀と現じ基督と化り、メシヤと成りて、五惡を降下し、五痛を消除し、五燒を絶滅し、善徳を以て、惡逆を改めしめ、生死の苦患を拔除し、五徳を獲せしめ、無爲の安息に昇らしめむとす。瑞靈世を去りて後、聖道漸く滅せば、蒼生諂偽にして、復衆惡を爲し、五痛五燒還りて前の法のごとく久しきを経て、後轉た劇烈なるべし。悉く説くべからず。吾は唯衆生一切のために略して之を言ふのみ。

爾等各善く之を思ひ、轉た相教誨し聖神教語を遵奉して敢て犯すことなかれ。あ
あ惟神靈幸倍坐せ。

伊都能賣の大神

謹請再拜

ヨリコ姫もシーゴも花香も船客一同も、襟を正し甲板上に坐り直して、合掌しながら感涙にむせびつつ、梅公宣傳使の讀經を恭しく聽聞した。梅公は一同に

目禮しながら階段を下り、吾が居間に入り、吾が居間に入つて休息した。ヨリコ姫、花香、シーゴ
もおのおの自分の船室に入り、ドアを固く鎖して瞑想に耽つてゐる。ヨリコ姫
は吾が居間にあつて神恩の高きを思ひ、暗黒の淵より黎明の天地に救はれたる歡
喜の思ひに満ちながら、聲も静かに神徳を讚美してゐる。その歌、

子ね

伊都の御靈の大御神 出現ませし其の日より
早三十年を経たまへり 法身光明きはもなく
暗黒世界を照らし給ふ

丑

愛と信との光明は

無明の暗を照らしつつ

一念いちねん歡喜くわんぎし 信賴しんらいし
眞樂園しんらくえんに 生しやうぜしめ 給たまふ
まつらふ人ひとを 天國てんごくの

寅とら

皇大神すめおほかみの 靈暉れいきより
無碍むげ光威くわうゐ徳とく洪大こうだいの
信しんと 愛あいとを 攝受せつじゆして
瑞みづの 御靈みたまと 向上かうじやうし
菩提ぼだいの 清水しみづを 汲くませ 給たまふ

卯う

愛あいと 善ぜんとの 神徳しんとくと
虚偽きよぎと 惡あくとの 逆業ぎやくごうは
水みづと 氷こほりの 如ごとくに て
氷こほり多おほきに 水みづ多おほし
障多さほりきに 徳多とくおほし

辰たつ

五濁ごじよくあくせ惡世あくせの萬衆ばんしうの

選擇せんじやくかみ神かみに在ましますと

信しんじまつれば不可ふか稱辭しようじ

不可ふか説せつ不可ふか思議しぎもろもろの

御德みとくは爾なんぢの身みに充みたむ

巳み

愛あいと善ぜんとの大德だいとくと

信しんと眞しんとの大慈だいじくわう光わう

蒙かかぶる神かみの道みちの子こは

法悦ほふえつ道だうに進すすみ入いり

安養あんやう世界せかいに歸命きみやうせむ

午うま

生死しやうじの苦海くかいは極きはみなし
伊都いづ能賣のめす主神しんの御船みふねのみ
天津あまつ御苑みそのへ渡わたすなり
久永とほに沈しづめる蒼生さうせいは
吾われらを乗のせて永遠とことはの

未ひつじ

五六七みろく如來にの大作願だいそくわん
萬有ばんいう愛護あいごの御誓おんちかひ
愛善心あいぜんしんをば成就じやつじゆせり
苦惱くなうの有情うじやうを捨すてずして
信眞光しんしんくわうをば主しゆとなして

申まをす

五六七みろく如來にの神號しんがうと
無明むみやう長夜ちやうやの暗あんを破はし
それの光徳智證くわうとくちしやうとは
所在あらず一切いっさい萬衆ばんしゆの

志願しぐわんを充みたせ給たまふなり

酉とり

吾わが罪業ざいごふを信しん知ちして
すなはち汚穢をゑの身みは清きよく
法性常樂證ほふしちじょうじょうじょうせしめ給たまふ
瑞靈ずゐれいの教をしへに乗じやうずれば
全天界ぜんてんかいに昇往しやうわうし

戌いぬ

嚴瑞げんづゐ慈悲じひの大海だいかいは
神かみの誓ちかひの御船おんふねに
その身みは愛風あいふうに任まかせたり
智愚正邪ちぐせいじやの波なみもなし
乘のりて苦界くかいを涉わたり行ゆく

亥あ

多生曠劫斯の世まで
愛護を受けし此の身なり
嚴瑞二靈に眞心を
捧げ奉りて神徳の
高きを稱へ奉るべし。

花香姫は梅公宣傳使の廣大無邊なる神格や艶麗にして犯すべからざる神格の備
はれる其の容貌の尊さを胸に浮かべながら、神の化身ならずやと憧憬のあまり大
神の神徳を讚美した。その歌、

子ね

暗黒無明の現界を
憐れみ玉ひて伊都能賣の
神の慈光の極みなく
無碍光如來と現はれて

安養世界を建て玉ふ

丑

伊都能賣靈魂の光には
充滿なしてその智證
天人地人を息ましむ

歡喜清淨愛と信
顯神幽に貫徹し

寅

顯神幽の三界の
嚴瑞二靈伊都能賣の
大光明に喜悅せむ

天人および蒼生は
御名に依りて信眞の

卯う

金剛こんがう不壞ふゑ的てき信仰しんかうの

定さだまる時ときを待まち得えてぞ

伊都いづ能のめ賣み御魂たまの聖靈せいれい光くわう

普あまねく照せう護ごし永とこ遠とはに

生しやう死じを超てう越ゑつさせたまふ

辰たつ

惡あくと虚偽きよぎとの逆德ぎやくとくに

遮斷しゃだんせられて攝取せつしゆの

大光だいくわう明みやうは見みえねども

愛あいの全德ぜんとく幸さちはひて

常つねに吾わが身みを照てらすなり

巳み

東西兩洋の聖師たち
愛と信とを世に擴め
信樂境に入らしめよ

哀愍攝受を怠らず
天下の蒼生隔てなく

午

救世の聖主に遇ひ難く
神使の勝法聞くことも
聽くは嬉しき伊都能法

瑞靈の教聞きがたし
稀なりといふ暗の世に

未

三千世界一同に
神の御名とおん教

輝く光明かしこみて
聽く得る人は常永に

不退轉位に進むなり

申

聖名不思議の海水は
屍體も止めず衆惡の
功德の潮水に道味あり

惡逆無道法謗の
萬河一つに歸しぬれば

酉

伊都能賣御魂の御神徳
愛と信との海水に
遂に無限の道味あり

盡十方無礙なれば
煩惱不脱の衆流も

戌いぬ

悪あくと虚偽きよぎとに充みたされし 吾われらは神かみにまつるひて

愛あいと善ぜんとの徳とくにをり 信しんと眞しんとの光明くわうみやうに

浴よくして御國みくにに昇のぼり得えむ

亥ゐ

聖教しやうけう權假こんげの方便ほうべんに 萬衆ばんしう久ひさしく止とどまりて

三界さんがい流轉りゅうてんの身みとぞなる 神かみに信しん従じうする身魂たまは

一乘いちじやう歸命きみやうす天津國あまつくに。

にはかに湖こ面めんは北風きたかぜおもむるに起おこつて白帆しらほを膨ふくらませ、波上はじやうをほどほどに迂すべり

だした。舷ふなばたを打うつ浪なみの音おとは、御世みやよ太平たいへいを謠うたふ鼓つづみの如ごとく、穩おだやかに聞きこえて來くる。あ
たかも救世ぐぜいの御船みふねに乗のつて天國てんごく淨土じやうどの樂園らくえんに進すすむの思おもひがあつた。ああ惟かむながら神靈たま幸ちは
倍坐へませ世せ。

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 加藤明子録)

第二篇 春湖波紋しゆんこはもん

第六章 浮島の怪猫うきしま ぐわいべう (一七〇八)

波切丸なみきりまるは萬波洋々ばんばやうやうたる湖面こめんを、西南せいなんを指さして、船舷ふなばたに鼓つづみを打うちながら、いとも
ゆるやかに進すすんでゐる。天氣てんき清朗せいらうにして春はるの陽氣やうき漂ただよひ、あるひは白しろくあるひは黒くろ

くあるひは赤き翼を擴げた海鳥が、あるひは百羽、千羽と群をなし、怪しげな聲を絞つて中空を翔けめぐり、あるひは波間に悠然として、浮きつ沈みつ、魚を漁つてゐる。アンボイナは七八尺の大翼を擴げて一文字に空中滑走をやつてゐる。その長閑さは天國の樂園に遊ぶの思ひがあつた。

前方につき當つたハルの湖水第一の、岩のみを以て築かれた高山がある。國人はこの島山を稱して浮島の峰と稱へてゐる。一名夜光の岩山ともいふ。船は容赦もなくこの岩山の一湮ばかり手前まで進んで來た。船客は何れもこの岩山に向かつて、一齊に視線を投げ、この島に關する古來の傳説や由緒について、口々に批評を試みてゐる。

甲「皆さま、御覽なさい。前方に雲を凌いで屹立してゐる、あの岩島は、ハルの湖第一の高山で、いろいろの神秘を藏してゐる靈山ですよ。昔は夜光の岩山といつて、岩の頂邊に日月のごとき光が輝き、月のない夜の航海には燈明臺として尊重されたものです。あのスツクと雲を抜き出した山容の具合といひ、全山岩をもつて固められた金剛不壞の容姿といひ、萬古不動の靈山です。この湖水を渡る者は

この山を見なくつちや、湖水を渡つたといふことは出来ないのです」

乙「成るほど、見れば見るほど立派な山ですな。しかしながら、今でも夜になると、昔と同じやうに光明を放つてゐるのですか」

「この湖水をハルの湖といふくらゐですもの、暗がなかつたのです。しかしながらだんだん世の中が曇つた所爲か、年と共に光がうすらぎ、今ではほとんど光らなくなつたのです。そして湖水の中心に聳え立つてゐたのですが、いつの間やら、その中心から東へ移つてしまつたといふことです。萬古不動の岩山も根がないと見えて浮島らしく、あまり西風が烈しかつたと見えて、チクチクと中心から東へ寄つたといふことです」

「なるほど文化は東漸するとかいひますから、文化風が吹いたのでせう。しかし日月星辰何れもみな西へ西へと移つて行くのに、あの岩山に限つて、東へ移るとは少し天地の道理に反してゐるぢやありませんか。浮草のやうに風に従つて浮動するやうな島ならば、何ほど岩で固めてあつても、何時沈没するか知れませぬから、うつつかり近寄るこた出来ませぬ」

「あの山の頂を御覽なさい。ほとんど枯死せむとするやうなひねくれた、ちつばけな樹木が岩の空隙に僅かに命脈を保つてゐるでせう。山高きが故に尊からず、樹木あるを以て尊しとす……とかいつて、なにほど高い山でも役に立たぬガラク夕岩で固められ、肝心の樹木がなくては、山の山たる資格はありません。せめて燈明臺にでもなりや、山としての價値も保てるでせうが、大きな面積を占領して、何一つ藝能のない岩山ではサツパリ話になりますまい。それも昔のやうに暗夜を照らし往來の船を守つて、安全に彼岸に達せしむる働きがあるのなら岩山も結構ですが、今日となつては最早無用の長物ですな。昔はあの山の頂に特に目立つて、仁王のごとく直立してゐる大岩石を、アケハルの岩と稱へ、國の守り神様として、國民が尊敬してゐたのです。それが今日となつては、少しも光がなく、おまけに其の岩に、縦に大きなヒビが入つて、何時破壊するか分らないやうになり、今は大黒岩と人が呼んでをります。世の中は之を見ても、此のままでは續くものではありません。天の神様は地に不思議を現はして世の推移をお示しになるといひますから、これから推考すれば、大黒主の天下も餘り長くはありますま

いな」

「あの岩山には何か猛獣でも棲んでゐるでせうか」

「妙な怪物が澤山棲息してゐるといふ事です。そしてその動物は足に水かきがあり、水上を自由自在に游泳したり、山を駆け登ることの速さといつたら、まるで、風船を飛翔したやうなものだ……とのことです。昔は日の神、月の神二柱が、天上より御降臨になり、八百萬神を集ひて日月の如き光明を放ち、この湖水は素より、印度の國一體を照臨し、妖邪の氣を拂ひ、天下萬民を安息せしめ、神様の御神體として、國人があつたの岩山を尊敬してゐたのですが、おひおひと世は澆季末法となり、何時しかその光明も光を失ひ、今や全く虎とも狼とも金毛九尾とも大蛇とも形容し難い怪物が棲息所となつてゐるさうです。それだから吾々人間が、その島に一步でも踏み入れやうものなら、忽ち狂惡なる怪物の爪牙にかかつて、血は吸はれ、肉は喰はれ骨は焼かれて亡びるといつて恐がり、誰も寄りつかないのです。風波が悪くつて、もしも船があつた岩島にブツかからうものなら、それこそ寂滅爲樂、再び生きて還る事は出来ないのです、このごろでは、ひそびそとあの

島を悪魔島と言つてゐます。しかし大きな聲でそんなこと言はうものなら、怪物がその聲を聞き付けて、どんな「わざ」をするか分らぬといふことです。誰も彼も憚つて、大黒岩に關する話は口を閉じて安全無事を祈つてゐるのです。あの島があるために、少し暴風の時は大變な大波を起し、小さい舟は何時でも覆没の難に會ふのですからなア。何とかして、天の大きな工匠がやつて來て大鐵槌を振ひ、打ち砕いて、吾々の安全を守つてくれる、大神將が現はれさうなものですな」

何と、權威のある岩山ぢやありませんか。つまりこの湖面に傲然と突つ立つて、あらゆる島々を睥睨し、強持てに持ててゐるのですな」

あの岩山は時々大鳴動を起し、噴煙を吐き散らし、湖面を暗に包んでしまふ事があるのですよ。その噴煙には一種の毒瓦斯が含有してゐますから、その煙に襲はれた者はたちまち禿頭病になり、あるひは眼病を煩ひ、耳は聞こえなくなり、舌は動かなくなるといふ事です。そして肚のすくこと、咽喉の渴くこと、一通りぢやないさうです。そんな魔風に、をりあしく出會した者はいい災難ですよ」

丸つ切り虫蜒か、蛇蝎のやうな恐ろしい厭らしい岩山ですな。なぜ天地の神さ

まは人民を愛する心より、湖上の大害物を取り除けて下さらぬのでせうか。あつて益なく、なければ大變、自由自在の航海が出来て便利だのに、世の中は、神様といへど、ある程度までは自由にならないとみえますな」

「何事も時節の力ですよ。金輪奈落の地底からつき出てをつたといふ、あの大高の岩山が、僅かの風ぐらゐに動揺して、東へ東へと流れ移るやうになつたのですから、もはやその根底はグラついてゐるのでせう。一つレコード破りの大地震でも勃發したら、手もなく、湖底に沈むでしまふでせう。オ、アレアレ御覽なさい。頂上の夫婦岩が、何だか怪しく動き出したぢやありませんか」

「風も吹かないのに、千引の岩が自動するといふ道理もありますまい。舟が動くので岩が動くように見えるのでせう」

「ナニ、さうではありますまい。舟が動いて岩が動くやうに見えるのなら、浮島全部が動かねばなりませんまい。他に散在してゐる大小無数の島々も、同じやうに動かねばなりませんまい。岩山の頂上に限つて動き出すのは、ヤツパリ船の動揺の作用でもなければ、變視幻視の作用でもありませんまい。キツとこれは何かの前

兆てうでせうよ」

「そう承うけたまはれば、いかにも動うごいてをります。あれあれ、そろそろ夫婦岩めうといはが頂いただきの方ほうから下したの方ほうへ向むかつて歩あるき始はじめたぢやありませんか」

「なるほど妙めうだ。段々だんだん下くだつて來くるぢやありませんか。岩いはかと思おもへば虎とらが這はうてるやうに見みえ出だしてきたぢやありませんか」

「いかにも大虎おほとらですワイ。アレアレ全山ぜんざんが動搖どうえうし出だしました。こいつア沈没ちんぼつでもせうものなら、それだけ水量みづかさがまさり、大波おほなみが起おこつて、吾々われわれの船ふねも大變たいへんな影響えいきやうを

うけるでせう。危あぶない事ことになつて來たきものですワイ」

かく話はなす内うち、波切丸なみきりまるは浮島うきしまの岩山いはやまの間近まぢかに進すすんだ。島しまの周圍しうゐは何なんとなく波なみが高たかい。虎とらと見みえた岩いはの變化へんげは磯端いそばたに下くだつて來たき。よくよく見みれば牛うしのやうな虎猫とらねこで

ある。虎猫とらねこは波切丸なみきりまるを目めをいからして睨にらみながら、逃にげるが如ごとく湖面こめんを渡わたつて夫婦連めうとづれ、西方せいほう指さして浮うきつ沈しづみつ逃にげて行く。にはかに浮島うきしまは鳴動めいどうをはじめ、前ぜん

後ご左右さいうに全山ぜんざんは揺ゆれて來たき。チクリチクリと山やまの量かさは小ちひさくなり低ひくくなり、半時はんときばかりの内うちに水面すめんにその影かげを没ぼつしてしまつた。あまり沈没ちんぼつの仕方しかたが漸進ぜんしん的てきであつ

たので、恐ろしき荒波も立たず、波切丸を前後左右に動揺するくらゐですむだ。

一同の船客はこの光景を眺めて、何れも顔色青ざめ、「不思議不思議」と連呼するのみであつた。この時船底に横臥してゐた梅公宣傳使は、船の少しく動揺せしに目を醒まし、ヒヨロリヒヨロリと甲板に上つて來た。さしもに有名な大高の岩山は跡形もなく水泡と消えてゐた。そして船客が口々に陥没の記念所を話してゐる。梅公は船客の一人に向かつて、

「風もないのに、大變な波ですな。どつかの島が沈没したのぢやありませんか」

甲「ハイ、あなた、あの大變事を御覽にならなかつたのですか。ずゐぶん見物でしたよ。昔から日月の如く光つてゐた頂上の夫婦岩は俄かに揺るぎ出し、終ひの果には大きな虎となり、磯端へ下つて來た時分には猫となり、波の間を浮きつ沈みつ、西の方へ逃げて行つたと思へば、チクリチクリと島が沈み出し、たうとう無くなつてしまひました。こんな事は昔から見た事はありません。コリヤ何かの天のお知らせでせうかな」

梅「どうも不思議ですな。しかしながら人間から見れば大變な事のやうですが、

宇宙萬有を創造し玉うた神様の御目から見れば、吾々が頬に吸ひついた蚊を一匹叩き殺すやうなものでせう。しかしながら吾々はこれを見て、自ら戒め、悟らねばなりません。

乙「あなたは何教かの宣傳使様のやうですが、一體全體此世の中は何うなるでせうか。吾々は不安で堪らないのです。つい一時間前まで泰然として湖中に聳えて

ゐた、あの岩山が脆くも湖底に沈没するといふよな不祥な世の中ですからなア」

梅「今日は妖邪の氣、國の上下に充ちあふれ、仁義だの、道徳だのといふ美風は

地を拂ひ、悪と虚偽との惡風吹き荒び、世はますます暗黒の淵に沈淪し、聖者は

野に隠れ、愚者は高きの上つて國政を私し、善は虐げられ悪は榮えるといふ無道

の社會ですから、天地も之に感應して、色々の不思議が勃發するのでせう。今日

の人間は何れも墮落の淵に沈み、卑劣心のみ頭を擡げ、有爲の人材は生れ來らず、

末法常暗の世となり果てゐるのでから、吾々は齋苑の館の神柱、主の神の救世

的御神業に奉仕し、天下の暗雲を拂ひ、悲哀の淵に沈める蒼生を平安無事なる樂

郷に救はむがために、あらゆる艱難辛苦をなめ、天下を遍歴して、神教を傳達し

てゐるのです。まだまだ世の中は、これくらゐな不思議では治まりませぬよ。こ
こ十年以内には、世界的、又々大戦争が勃發するでせう。今日ウラル教とバラモ
ン教との戦争が始まらむとしてをりますが、こんなことはホンの兒戯に等しきも
ので、世界の將來は、實に戦慄すべき大禍が横たはつてをります。それゆゑ、吾々
は愛善の徳と信眞の光に満ち玉ふ大神様の御神諭を拜し、普く天下の萬民を救は
むがために、草のしとね、星の夜具、木の根を枕として、天下公共のために塵身
を捧げてゐるのです」

甲 「なるほど承れば承るほど、今日の世の中は不安の空氣が漂うてゐるやうです。
今の人間は神佛の洪大無邊なる御威徳を無視し、暴力と壓制とをもつて唯一の武
器とする大黒主の前に拜跪渴仰し、世の中に尊き者はハルナの都の大黒主より外
にないものだ」と誤解してゐるのだから、天地の怒に觸れて、世の中は一旦破壊さ
るるのは當然でせう。私はウラル教の信者でございしますが、第一、教主様からし
て、……神を信ずるのは科學的でなくては可かない。神祕だとか奇蹟だとかを以
て信仰を維持してゐたのは、太古未開の時代の事だ。日進月歩、開明の今日は、

そんなゴマカシは世人が受入れない……と言つてゐらつしやるのですもの、まるきり神様を科學扱ひにし、御神體を分析解剖して色々の批評を下すといふ極惡世界ですもの、こんな世の中が出て来るのは寧ろ當然でせう。あなたは何教の宣傳使でございませうか。神様に對する御感想を承りたいものでございませうな」

梅「最前も申し上げた通り、齋苑の館の大神様は三五教をお開きになつたのです。そして私は同教の宣傳使照國別様といふお方の從者となつて、宣傳の旅に立つたものでございませう。それゆゑ貴方等のお尋ねに對し、立派な答へは到底できません。しかしながら神様は昔の人のいつたやうに、超然として人間を離れたものであります。神人合一の境に入つて始めて、神の神たり、人の人たる働きが出来得るのです。ゆゑに三五教にては、人は神の子神の宮と稱へ、舍身的大活動を、天下萬民の爲にやつてゐるのです」

「何か御教示について、極簡單明瞭に、神と人との關係を解らしていただく事は出来ませうまいか」

「ハイ、私にもまだ修業が未熟なので、判然した事は申し上げ兼ねますが、吾が

宣傳使の君から教はつた一つの格言がございますから、これを貴方にお聞かせいたしませう。

神力と人力

- 一、宇宙の本源は活動力にして即ち神なり。
- 一、萬物は活動力の發現にして神の斷片なり。
- 一、人は活動力の主體、天地經綸の司宰者なり。活動力は洪大無邊にして宗教、政治、哲學、倫理、教育、科學、法律等の源泉なり。
- 一、人は神の子神の生宮なり。而して又神と成り得るものなり。
- 一、人は神にしあれば神に習ひて能く活動し、自己を信じ、他人を信じ、依頼心を起すべからず。

一、世界人類の平和と幸福のために苦難を意とせず、眞理のために活躍し實行するものは神なり。

一、神は萬物普遍の活靈にして、人は神業經綸の主體なり。靈體一致して茲に無

限無極の權威を發揮し、萬世の基本を樹立す」

「イヤ有難う。御教示を聞いて地獄から極樂浄土へ轉住したやうな法悦に咽びました。なるほど人間は神様の分派で、いはば小なる神でございますなア。今までウラル教で稱へてをりました教理に比ぶれば、その内容において、その尊さにおいて、眞理の徹底したる點において、天地霄壤の差がございます。私はスガの港の小さい商人でございますが、宅にはウラル彦の神様を奉齋してをります。しかしながら之は祖先以來傳統的に祀つてゐるので、言はば葬式などの便利上、ウラル教徒となつてゐるのに過ぎませぬ。既成宗教は已に命脈を失ひ、ただその殘骸を止むるのみ。吾々人民は信仰に飢ゑ渴き、精神の道に放浪し、一日として、この世を安心に送ることが出来なかつたのです。舊道德は既に已に世にすたれて、新道德も起らず、また偉大なる新宗教も勃起せないといつて、日夜悔んでをりましたが、かやうな崇高な偉大な眞宗教が起つてゐるとは、夢にも知らなかつたのです。計らずも波切丸の船中において、かかる尊き神様のお使に巡り會ひ、起死

回生の御神教を聞かしていただくとは、何たる、私は幸福でございます。私の宅は、誠に手狭でございますが、スガの港のイルクといつて、多少遠近に名を知られた小商人でございます。どうか、私の宅へも蓮歩を枉げ下さしまして、家族一同に、尊き教をお授け下さいますやうにお願いいたします。そして私はこの結構な御神徳を独占せず、力のあらむ限り、萬民に神徳を宣傳さしていただく考へでございますから、何卒よろしくお願い申し上げます」

「實に結構なる貴方のお心掛け、これも大慈大悲の大神様のお引合せでございます。せう。これを御縁に、私もスガの港へ船がつかましたら、あなたのお宅へ立ちよらしていただきませう。」

思ひきや神の仕組の眞人は

御船の中にもくばりあるとは

此の船は神の救ひの船ぞかし

世の荒波を分けつつ進めり

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 松村眞澄録)

第七章 武力鞞(ぶりきざや) (一七〇九)

ヨリコ姫(ひめ)は甲板(かんばん)に立つて、
平和(へいわ)な湖面(こめん)をうち眺(なが)め、
聲(こゑ)も涼(すず)しく歌(うた)ふ。

久方(ひさかた)の大空(おほぞら)高く聳(そび)えたる
オーラの山(やま)は霞(かす)みけり

常夜(とこよ)の暗(やみ)もハルの湖(うみ)
うつ小波(さざなみ)の音(ね)も清(きよ)く

吾(わ)が船舷(ふなばた)に鼓(つづみ)うつ
千波(せんば)萬波(ばんば)の皺(しわ)の湖(うみ)

伸(の)べ行く波切丸(なみきりまる)の上(うへ)
天(てん)より高(たか)く咲(さ)く花(はな)の

聖(きよ)き御教(みのり)を聞(き)きながら
彼方(あなた)の岸(きし)に進(すす)み行く

心曇(こころくも)りしヨリコ姫(ひめ)も
村雲(むらくも)はらす時津風(ときつかぜ)に

心(こころ)の暗(やみ)を拂(はら)はれて
澄(す)みわたりたる湖(うみ)の上(うへ)

小鳥は千代を唄ひつつ

翼擴げてアンボイナ

神に輝く頭上をば

前後左右に飛びかへて

わが行手をば守ること

見ゆるも床し波の上

大き小さき島々は

パインの木蔭を宿しつつ

彼方此方に漂ひて

眺めも清き今日の旅

たちまち來たる夜嵐の

猛びに船は中天に

捲き上げられて暗礁の

苦難を逃れ玉の緒の

命を無事に保ちしも

三五教に仕へたる

梅公の君の御恵み

神の稜威の目のあたり

顯はれませし尊さよ

船は行く波は静かに立ち竝ぶ

魚鱗は静かにまたたきて

天津日影を宿しつつ

世の太平を謳ふなり

類稀なる師の君の

優しき言葉に導かれ

根底の國を後にして

常磐の花咲く天津神

鎮まりゐます御國へ

すす 進みて行かむ心地こそ わが身この世に生れてゆ

ためし まだ例なき喜びの 涙に袖はうるほひぬ

かむながらかむながら ああ惟神々々 神の守らすこの船は

みなと スガの港に渡るてふ げにスガスガし吾が心

なに 何に譬む物もなし 二八の春の花盛り

こころ 心の嵐吹きすさび よからぬ人と手を引いて

まが 枉の醜業企らみつ オーラの山の砦をば

ちよ 千代の住家と定めつつ 罪を重ねし悔しさよ

かみ 神の恵みの浅からず 吾が身の運の盡きずして

かみ かくも目出たき神教に 進み入りしは天地の

かみ 神の恵みと畏みて 朝な夕なに怠らず

おんとく その御徳を感謝しつ 晴れ渡りたる胸の空

おほひ 大日は清く照り渡り 月影清く澄みきりて

ほし 星の瞬きいと妙に 風は不斷の音楽を

奏^{かな}でまつりて神^{かみ}々の
 深^{ふか}き稜^{みいづ}威^あを現^{あら}はせり
 時^{とき}しもあれや大^{おほ}高^{たか}島^{しま}
 如何^{いか}なる神^{かみ}の計^{はか}らひか
 下^{した}津^つ岩^{いは}根^ねの底^{そこ}深^{ふか}く
 つき立^たちたりと聞^きこえしが
 何^{なん}の苦^くもなく見^みるうちに
 水^{みな}泡^わと消^きえて跡^{あと}もなく
 その頂^{いた}だき^たき^へに永^{とこ}久^しに
 立^たち竝^{なら}びたる夫^{めう}婦^{とい}岩^は
 にはかに獸^{けもの}と身^みを變^{へん}じ
 高^{たか}き岩^{いは}座^{くら}相^{あひ}放^{はな}れ
 屠^{とし}所に曳^ひかるる羊^{ひつじ}なす
 憐^{あは}れな姿^{すがた}トボトボと
 岩^{いは}の虚^き隙^{よげ}を傳^{つた}ひつつ
 猿^{さる}捕^{とり}荊^{いばら}に身^みを破^{やぶ}り
 或^{ある}は轉^{ころ}げまた倒^{たふ}れ
 頭^{かしら}を下^{した}に尾^をを上^{うへ}に
 やうやく磯^{いそ}邊^べに降^{くだ}りつき
 波^{なみ}を渡^{わた}つて逃^にげ失^うせぬ
 ああ惟^{かむ}ながら^{かむ}ながら
 オーラの山^{やま}に永^{とこ}久^しに
 神^{かみ}を詐^{いつは}り世^よの人^{ひと}を
 欺^{あざむ}き惱^{なや}め吾^わが威^{あせ}勢^{せい}
 四^よ方に張^はらむと思^{おも}ひしを
 思^{おも}ひ返^{かへ}せば愚^{おろ}かなる
 企^{たく}みとこそは知^しられけり
 遠^{とほ}き神^{かみ}代^よの昔^{むかし}より

常磐堅磐にこの湖の
光ともなり花となり

湖中の王と敬はれ
萬民憧憬の的となり

時めき渡りし岩島も
忽ち天の時たらば

かくも無残に失せにける
これを思へば人の身は

尚さら果敢なきものならむ
大黒主の勢ひは

天地に貫く威ありとも
神の戒め下りなば

旭に霜の消ゆるごと
夏の氷の解くるごと

はかなく消えむ惟神
神の力の恐ろしや

シーゴの司は幸ひに
神の大道に進み入り

曲の關所を乗り越えて
今は高天の花苑に

通ふ旅路となりけり
吾が妹の花香姫

教の君に伴はれ
千里の波濤を打ち渡り

萬里の廣野を跋涉して
神の御ため世のために

盡さむ身とはなりにけり
われも妹も惟神

尊たふとき神かみに救すくはれて 旭あさひのただ刺さす神國かみくにへ

勇いさみ行ゆくこそ嬉うれしけれ ああ惟かむながらかむながら神々々

神かみの御前みまへに愼つつしみて 吾等われらが前途ぜんとに幸さちあれと

天地てんちに向むかつて願ねぎ奉まつる 畏かしこみ敬あやまひ願ねぎ奉まつる

花香はなかひめ姫うみ 湖うみの面おもを飛とび交かふ鳥とりの翼つばさこそ

花はなか蝶てふかと見みまがひにける

大高島おほたかしま音おとさへ立たてず湖底うなそこに

沈しづみしを見みて世よの移うつるをさとる

うつり行ゆく御代みよに扇あふぎの末すゑ廣ひろく

榮さかゆる春はるの花香はなかをぞ待まつ

シーゴー 島々は泰然自若波に浮くを

大高島の憐れはかなさ

行きかひの船を惱めし岩島も

あへなく失せて水泡となりぬ

吾が胸に巣ぐひし曲も岩島の

あはれを見ては水泡ときえぬ

天地の中はら渡るこの船は

神の救ひの御梯とぞ思ふ

常世行く暗を照らせし島山も

今は根底に沈みけるかな

高きより低きにおつる世のならひ

吾もオーラの山を下りつ

水平の波漕ぎ渡るこの船は

皇大神の御姿なるらむ

惟かむながらすあへいせん神水平線をすべ迂り行く

波切丸なみきりまるの姿すがた勇ましいさし

梅公うめこう「見みわたせば波は間にかんきらめく御光みひかりは

千々ちぢに碎くだくる神影みかげなるらむ

四海しがい波なみいと静しづかにをさまりて

大高山おほたかやまの影かげだにもなし

大高山おほたかやま雲くも間にま高くたか波なみの上へに

うかびて人ひとを惱なやませにける

日ひも月つきも大高山おほたかやまの頂いただきに

蔽おほはる惱なやみなきぞ嬉うれしき

梅公うめこう、ヨリコ姫ひめ、花香はなか姫ひめ、シーゴ―は階段かいだんを下くだり、各自かくじの船室せんしつに入いつて肱ひぢを枕まくら

に横たはつた。

デッキの上には色々の雑談が始まつてゐる。見るからに目のくるりとした色の黒い、一癖有りさうな大男、十數人の船客の中に胡坐をかき、傍若無人的に武術の自慢話をやつてゐる。

バラック「もし、お前さまは一見したところ、なかなかの豪勇と見えるが、お角力さまでですか、ただしは武術家ですか」

ドラック「俺かい、俺は若い時や、角力も随分取つたものだ。そして日下開山綱を、一度は張つたものだよ。ハルナの都の大相撲の時にやずるぶん面白かつたね。十日の角力に十日まで地つかずで、大變な人氣だつたよ。數萬の見物人の血を躍らせた事といつたら、前古未曾有といふ評判だつた。お前も聞いてゐるだろうが、日下開山ドラック山といふのは俺の事だ。これ見玉へ、俺の腕は丸で鐵のやうだ。なにほど強い男でも、グツと一つ握るが最後、息がつまり胸がつかへ、青くなつてしまふのだ。そして物が言へなくなるのだ。あまり力が強いので、どの力士もこの力士もドラック山にかかつちや勝目がないといふので、終ひの果に

や相手がなくなつたのだ。相手なしに一人角力とる譯にもゆかず、やむを得ず力士を廢業して、今は劍道の師範兼柔術の師範になつたのだよ」

「成るほど、いかにも強さうな腕つ節ですなア。しかしながらそれほど強いお前さまが、海賊の親分コースが襲來した時に、なぜ彼奴をとつつめて下さらなかつたのですか。いはゆる寶の持ちぐさりぢやありませんか」

「その時にや、自分の船室で安樂な夢を見てゐたものだから、チツとも知らなかつたよ。腕がなつて、血が湧いて、相手がほしくつて、脾肉の歎にたえない俺だもの、海賊の親玉が襲うて來たと聞きや、どうして俺が見逃すものか。あとから、本當に人の噂を聞いて、取返しつかない末代の損をしたものだと、心ひそかに悔んでゐたのだよ」

「あなたのやうな豪勇と同船してをれば、私も、この航海は安心いたしますワ。これも全く神様のお恵みだと感謝せざるを得ませぬ」

「ウン、何も心配はいらぬ。劍術は世界中俺に勝つ者は、マア、現代では一人もなからうよ。角力では、雷電爲右衛門、小野川、谷風、梅ヶ谷、常陸山ぐらゐは

東にゆふて來ても、てんで、角力にならぬのだからな。また劍道や柔術にかけたら、ゴライヤスに宮本武藏、塚原卜傳、野見の宿彌に塙團右衛門、岩見重太郎、荒木又右衛門などが東に結ぶて來ても足許へもよりつけぬのだから大したものだよ。しかしながらあまり強すぎて相手のないのも淋しいものだ。何とかして強い相手にブツつかりたいものだが、タカが海賊の親分ぐらゐでは、實際の事いふと、齒ごたへがしないのだからな」

バラックは呆氣にとられ、怪訝な顔して舌をまいてゐる。大勢の船客はドラックの大法螺を眞にうけ、肩をいからしながら豪勇談に興味をもち、チクリチクリと膝をにじりよせ、何時の間にか、ドラックを取り巻いて貝細工で作った洋菊の花のやうにしてしまった。

チエックといふ一人の商人風の男は恐る恐る、ドラックに向かつて、
「モシ、先生それほど強いお方なら、世の中に恐るべきものは一つもないでせうな」

ドラック「そらさうだ。弓でも鐵砲でも、大砲でも何でも彼でも、俺にかかつち

や駄目だ。この拳骨で、一つグワンと、この帆柱でもなぐらうものなら、根元からポクリと折れてしまふよ。それだから、天下に敵なしといふのだ。マア君達も安心したまへ。俺がこの船に乗つてゐる以上は、たとへ千人萬人の海賊が來たつて、屁一つひつたらしまひだ。ドラツクの名を聞いてさへも縮み上つてしまふからな」

チエツク「何とマア、私達は仕合せなものでせう。それほど力の強い、武術の達者なお客さまと同船するとは、全く先祖様のお手引きでせう。安心して國許へ歸らしていただきます。本當に貴方は活神さまのようなお方ですな。しかし夜前コーズの頭目がこの船に上つて來た時、うす暗がりの中から、纖弱い女が現はれて、恐ろしい海賊を、皆湖中へ投込んでしまひ、吾々の着物を取り返して下さつたのは、本當に有難い事でした。あの方は貴方のお弟子ぢやございませぬか」

ドラ「ウン、總て少し手の利いた奴ア、皆俺の教育をうけてるのだ。あまり澤山な弟子だから、スツカリ、顔も名も覚えてゐないが、月の國七千餘國の武術家は皆俺の部下といつても差支へなからうよ。各取締所の捕手連は全部俺に劍術や柔

術を學んだのだからな。そしてその女といふのは何者だか、お前たちは知つてゐるだらうな。名は聞いておいたか」

バラック「何でも天から俄かに下つて來た女神さまが、吾々の危難を救つて下さつたのだらうと、一般の噂だ。なにほど武術が達者だといつても、人間なれば、女の分際として、あんな離れ業は出來ないからな」

チエ「それでも、バラックさま、暫くすると暗の中に現はれた美人と同じやうなスタイルの女が、甲板の上へあがつて來て、ヨリコ姫だとか何とかいつて、自分が助けたやうな事を唄つてゐましたよ」

バラ「ナア二、人の手柄を横取せうと思ふ奴の多い時節だから、あんな事いつて、吾の信用をつながうとしよつた奸策だよ。今の世の中の奴ア、口では立派な強さうな事を吐す奴ばかりで、サア鎌倉となつたら、手足はガタガタ胸はドキドキ唇ビルビル、ヘコタレ腰になつて、逃げまはすといふ代物ばかりだからな。ともかく大言壯語のはやる時節だ。そして今日は昔と違ひ、……桃季物いはざれども、自ら小徑をなす……といふやうな、まどろしい事は誰も考へてゐない。自家廣告

を盛んにやる時節だから、お手際を拜見しなくちや、誰だつて信用すること出来
やしないワ、アツハハハハ

ドラ「コレコレ、バラツクさま、俺の前で、そんな悪口をつくといふ事があるも
のか。お前は俺の最前いつた事を大言壯語だと思つてゐるのだなア。俺達は、言
心行一致だから、決して嘘は言はないよ。嘘と思ふなら、一寸その腕を貸し玉へ、
一つ握つて見せてやらう」

バラ「イヤもう、恐れ入りました。決して決して、お前さまを信用せないのぢや
ありません。言心行一致のお前さまとは實に見上げたものだ。今日の世の中は口
と心がスツカリ反対になつてゐる者ばかりだから、せめて言心一致ならまだしも
だが、詐と高慢との流行する悪社会ですからな」

ドラ「俺の豪勇たる事がお前達に合點がいつたとあらば許してやる。毛筋の横巾
ほどでも、疑惑をさし挟むのなら、論より證據言心行一致と出かけて、腕なり肩
なり、一握り握つてみせてやるつもりだつたが、まづ骨の碎けるのが助かつて、
お前も仕合せだつたよ、アツハハハハ」

と傍若無人に笑ふ。

かく話すをりしも数隻の海賊船、島影より現はれ來たり、波切丸を前後左右より取圍み繩梯子を投げかけ、兇器を携へながら、コースが指揮の下に、數十人、バラバラと甲板に上つて來た。

チエ「ヤ、先生、海賊がやつて來ました。どうか天下無雙の豪力を出して、海賊を懲らしめて下さい」

バラ「サア、先生、今が先生のお力の現はれ時です。私もお手傳ひしますから、やつて下さいな」

ドラ「アイタタタタ。あ、にはかに腹痛がいたし、腰が立たなくなつたワイ。運の悪い時や悪いものだ。エ、残念だな。肚さへ痛くなくば、海賊の百疋や千疋ひねりつぶしてやるのだけどなア」

とガタガタと唇を紫色に染めて慄ひ戦いてゐる。

コースは數十人の手下を指揮しながら、まづ甲板より逃げ惑ふ船客を引つつかまへて赤裸となし、ドラツクもまた同様に、持物一切を掠奪され、赤裸にむかれ

てしまつた。コースは勢ひに乗じ、階段を降つて、船室に進み入つた。デッキの上は老若男女が右往左往に駆けまわり、阿鼻叫喚の地獄道を現出してゐた。

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 松村眞澄録)

第八章 絲の纏れ(一七〇)

海賊の頭目コースは數十人の手下と共に、甲板上に雑談に耽つてゐた船客を一々赤裸となし、勢ひに乗じて階段を下り、船室にバラバラと侵入して來た。さうして數多の船客に向かひ大刀を引き抜いたまま、例の脅し文句を並べ、
「持物一切を提供せよ。否應申すにおいては、何奴も此奴も刃の錆だ」
と脅迫してをる。老若男女は悲鳴をあげて泣き叫びながら、右往左往に逃げ廻る。船室内は俄かの大暴風に見舞はれて、秋の木の葉の散り亂るるがごとき光景となつて來た。特別室に睡つてゐたシーゴは怪しの物音に目を覺し、よくよく見れ

ば海賊の張本コースが數十人の部下と共に、今や哀れな船客に掠奪の手を恣にしてゐる眞最中であつた。シーゴーは大喝一聲、

「オイ、コラツ、貴様はコースぢやないか。この船に俺が居る限り掠奪は許さないぞ。サア掠奪品をスツカリとお客人に返戻してお断わりを申せ」

この聲にコースは怪しみながらよくよくその面體を見れば、日頃大親分と頼むシーゴーであつた。このコースはシーゴーの部下で別働隊となり、軍用品調達のために大活動をつづけてゐたのである。さうして海賊が最も安全で、かつ收獲の多いことを知つたので、澤山の海賊を部下に従へ、羽振りを利用してゐたのである。オーラ山に立て籠つて三千の部下を支配してゐると思つたシーゴーが、今この船に乗つてゐたのに驚き、大刀をその場に投げ捨て恭しく両手をついて、

「これはこれは大親分シーゴー様でございましたか。思はぬ所でお目にかかりました。私は親分のために斯くの如く危険を冒して大活動をやつてゐるのに、なぜお止めなさいますか」

シー「貴様の不審を持つのは尤もだが、俺は最早堅氣になつたのだ。今日のシー

ゴーは先日せんじつのシーゴーではない。正真正銘しょうしんしょうめいの眞人間まにんげんだ。神様かみさまの御子みこだ。神かみの精靈せいれいの宿やどり給たまふ生宮いきみやだ。貴様きさまもよい加減かげんに足あしを洗あらつて俺おれと同様どうやうに善心ぜんしんに立たち歸かへり、今いままでの罪業ざいごふを謝しやするため、粉骨碎心ふんこつさいしん天下救済てんかきうさいの大神業だいしんげふに歸順きじゆんしてはどうだ。人間にん間げんと生うまれて山賊さんぞくまたは海賊かいぞくをやるくらゐ不利益ふりえきな、そして引ひき合あはない危険きけんな商しやう賣ばいはないぢやないか□

コーズは大口おほぐちを開あけて高笑たかわらい、

「アハハハハ。てもさても異いな事ことを承うけたまはるものかな。一旦いつたん男子だんしが決心けつしんした事業じげふに對たいし中途ちゆうとに屁古へこたれるとは、てもさても親分おやぶんに似合にあはぬお言葉ことば、もはや今日けふとなつてはシーゴー殿どのは足あしを洗あらひ眞人間まにんげんになられたとのこと、このコーズは斷だんじて道みちは變かへませぬ。かうなる上うへは貴方あなたと私わたしは親分おやぶん乾兒こぶんの關係くわんけいも自然しぜんと消きえた道理だうりだ。お前まへさまの言葉ことばに服従ふくじうする義務ぎむは毛頭まうとうないはずだ。コーズはコーズとしての商賣しやうばいを勉べんき強やうせなくてはならない。どうか邪魔じゃまをして下くださるな。オイ部下てしたども、何なにを躊躇ちうちよしゆんと巡じゆんしてゐるか。片かたつ端ぱしから何奴どいつも此奴こいつも剥むいてしまへ□

と下知げちすれば、部下ぶか一同いちどうは先さきを争あらしうて又またもや掠奪りやくだつを擅ほしいまにせむとする。老弱男女らうじやくなんによは

またもや悲鳴をあげて泣き叫ぶ。その惨状目も當てられぬばかりなりける。

シー「これやコース、どうしても俺の言ふ事をきかぬのか。いや改心せぬのか。天道は恐ろしくないのか」

コー「エエかまうてくれない。今までは三千の部下を有する大親分だと思つて、尊敬もし服従もしてゐたのだが、何に感じてか男らしくもない、俄かに屁古たれよつて菩提心を起すやうな奴は、吾々盜賊社會の恥辱だ。貴様もついでに剥いてやるから覺悟をせい」

シー「アツハハハハ、猪口才千萬な。それほど剥きたければ剥かしてやらう。サアどつからなと剥け。その代りに一つより無い命を要心せよ」

コー「なに減らず口を叩きやがる。貴様の部下になつてゐた最初には僅かに四五人の部下しか無かつたが、今日はハルの湖に出没する五百人の海賊の大親分だぞ。サア神妙に裸になつて持物一切をコースさまに引きつけ。腰拔野郎奴」

かかる折りしも、特等室の一隅より天地も割るるばかりの生言靈が聞こえ來たる。

「一二三四五六七八九十百千萬ウーウーウーウー」

この言靈に不意を打たれたコースは眞青となつて、數十の味方と共にこの場を逃げ出し、甲板に架け渡した繩梯子を傳つて吾が船に飛び乗り、命からがら湖面に俄かに波を打たせながら、八挺艦を漕いで雲を霞みと逃げて行く。シーゴは一般の船客に、「怪我はなかつたか、持物は安全か」と一々尋ね廻り、幸ひ一物をも紛失してゐないのに安心し、拍手再拜して神恩を感謝せり。ここに梅公、ヨリコ姫、花香姫はニコニコしながら現はれ來たり、船客一同の遭難を慰問したるが、船客一同はシーゴその他を生神のごとくに尊敬し、大難を救はれし事を涙と共に感謝する。

シー「ハルの湖往來の人を脅かす

曲のコースは脆くも逃げける

吾が靈に神の御光幸はいて

人の艱みを救はせたまひぬ

アア神かみよ守まもらせ給たまへこの船ふねを

スガの港みなとの埠頭はとにつくまで

梅公うめこうの神かみの司つかさの言靈ことたまに

脆もろく失うせけり百ももの醜神しこがみに

梅公うめこう「ありがたし吾わが言靈ことたまの幸さちはひは

瑞みづの御靈みたまの助たすけなりけり

天地あめつちの神かみの心こころに叶かなひなば

何なにをか恐おそれむ醜しこの荒浪あらなみに

ヨリコ姫ひめ「君きみこそは神かみにますらむ曲神まががみも

ただ一言ひとことに逃にげ失うせにけり

吾は今かかる尊き師の君に

従ひて往く事の嬉しさ

目の當り生言靈の神力を

拜みまつりて心も勇む

花香姫 勇ましき吾が背の君の言靈に

滅び失せけり醜の曲靈も

かくばかり神の御稜威の高きをば

悟り得ざりし吾の愚かさ

今はただ尊き神の御教に

身も靈魂も任さむとぞ思ふ

かかる所へ甲板に縛られてゐたバラックは、赤裸のまま階段を下り來たつて、

「もし誰か甲板に来て下さいませぬか。誰も彼も赤裸に繋がれてみます。私はやうやく綱を切つて此所に参りましたが、何か刃物がなければ、丸結びにしてごさいますから解くことが出来ませぬ」

シーゴー「なに、デッキの上にも船客が縛られてゐるといふのか。それや可哀さうだ。ヨシヨシ今俺が助けてやる」

といふより早くバラツクと共に甲板に立ち出でて見れば、數十人の船客は手足を厳しく縛められ、所どころにカスリ傷を負い、呻吟してゐた。シーゴーは手早く懐劍の鞘を拂つて一人も残らず、縛の繩を切り放ち、衣服持物などを念入りに取調べて各自に渡してやつた。一同の船客はシーゴーを神のごとく尊敬し、感極まりて嗚咽するものさへあつた。

船長室には船長のアリーと一人の美人が何事かひそびそと掛け合つてゐる。

アリー「其方はどうしても吾輩の妻になつてくれないのか。生殺與奪の權を握つたこの俺に背けば、お前の爲にはならないぞ。性念を据ゑてキツパリと返答をしる」

ダリヤ「ハイ、何と仰せられましても私は親の許しのない以上は御意に應ずる事は出来ませぬ。まして私は母に早く別れ今は父一人。私の歸るのを今か今かと待つてゐるでございませうから、何卒こればかりはお許しを願ひたいものです」

「お前は俺を普通の船長と思つてをるか。俺は表面波切丸の船長となつてゐるものの、實は海賊だ。お前を部下のコークスに搔つ攫はしたのは大いに目的があつてのことだ。お前の父はアリスといつたであらう。スガの港の藥種問屋であらうがな」

「どうして又、貴方はそんな詳しい事を御存じでございますか」

「知るも知らぬもあるものか。お前の父は吾が父母の仇だ。不倶戴天の仇とつけ狙ひ、どうかお前の父の命を取つて親の仇を報いたいのだが、あまり警戒が厳しきたため近寄る事が出来ず、遂には海賊となり、船長と化け濟まして、お前達父子がこの湖を渡る時を待つてゐたのだ。しかしながら惡運の強い其方の父アリスは、吾が船に未だ一度も乗り込んだ事がないので仇討の望みも達せず、怏々として日夜煩悶してゐたのだ。お前の母といふのはアンナと言つたであらうがな」

「ハイ左様でございました。どうしてまた私の父が貴方様の親の仇でございませうか。詳しい事をお聞かせ下さいませ」

「俺は實のところお前を女房にしたくはない、なぜならば父の仇の娘と一緒に暮すのは良心がとがめ、かつ親の靈に對して濟まないからだ。夫よりもお前の首を取つて父の墓前に供へ、父の修羅の妄執を晴らしさへすれば俺はそれで満足だ。」

しかしながらお前の命を取るに先立つて深い因縁を聞かしておかう。恨んでくれな。實はかうだ、俺の父は極貧しい生活をしてゐたアリスタンといふ賣藥の行商人であつたが、俺の母すなはちお前を生んだ母のアンナは、吾が父の戀女房であつた。お前の父が吾が父の留守宅へやつて来て、色々雑多と手段を廻らし、吾が母を連れ歸つて藏の中へ閉ぢ込めおき、否應いはさず、無理往生に女房となし、その中に生れたのがお前だ。父は女房を取られた残念さに、この湖に身を投げて死んだのだ。いはばお前は胤異いの兄妹だ。然しながら吾が母のアンナはお前の父に愛情を濺いでゐなかつた。お前には母の愛情が注がれるのぢや無い。狂暴なる父の惡血が固つて吾が母の體内に因果の種が宿つたのだ。お前のその美しい

顔を見る毎にお前の父を思ひ出し、どうしても殺さねば承知ならぬのだから、殺す俺も、殺されるお前も因果だ、諦てくれ。俺は父に對する義務がすまないからなあ、哀れと思はないではないが、心を鬼にしてお前の生命を取るのだから」

ダリヤは船長の物語を聞いて大いに驚き、溜息をつきながら、

「アリー様、貴方の御立腹は御尤もでございます。どうか私を殺して下さいませ、さうしてお父上に孝養をおつくし下さいませ。同じ腹から生れた兄に殺されると思へば、私も得心して、成佛いたします。南無阿彌陀佛」

と、兩掌を合せ紅涙滴々として祈願してゐるその不愠さ。さすがのアリーも可憐なる妹の姿を眺めては首切りおとす勇氣もなく、燃へさかる胸の炎を消しかねて、兩手を組み吐息をついてゐる。

「咲き匂ふダリヤの花も木枯の

冷き風に散るぞ悲しき」

「アアお前の姿を見るにつけ、又その決心を聞くにつけ、日頃仇とつけ狙うた俺の心も折れ、刃を下す勇氣もなくなつた。しかしお前と俺とは腹は一つでも靈は一つでない。愛情なき母の体内には愛情のない靈と肉とが宿つてをる。お前はお前の父の片身だ。どうしてもお前を討たねばならぬ、どうか勘忍してくれ。しかしながら今日はどうもお前を討つ勇氣が出て來ない、いつもの密室に暫く監禁して置くから、決して自害などしてはならないぞ、俺の手にかかつて死んでくれ」

「ハイ、どうぞ貴方のお好きになさいませ。私は最早命は惜しみませぬ。父はスガの港に私の歸りを待つてゐませうが、そんな悪魔と聞いては、潔よう貴方のお手にかかつて歸る心も起りませぬ。また貴方のお心を聞いては、潔よう貴方のお手にかかつて死にたうございます。たとへ母の血と靈とが私の体内に宿つて居ないとしても、貴方は私の兄上に違ひありません」

かくする内に夜の帳は下された。アリーはダリヤの手を曳いて密かに密室に導き入れ、堅く錠前をおろしておいた。

ダリヤは密室に繋がれ死を覺悟し、健氣にも辭世の歌を聲も靜かに歌つてゐる。

アア味氣なき人の世や

天地の間に人と生れ出でて

二八の今日の春までも

蝶よ花よと育くまれ

スガの港の名花ぞと

謳はれぬたる吾が身にも

夜嵐の襲ひ来るものか

アア懐しき吾が母上は

アリーが父のいと愛せる戀人なりしと

初めて聞きし身の驚き

また吾が父上の富の力に任せつつ

道ならぬ道を歩ませ給ひ

人妻を手に入れて

戀てふ心の曲者に

囚はれ給ひし悲しさよ

父と父とは敵同士

一人の母の胎内ゆ

生れ出でたる兄妹は

又もや浮世の敵と敵

如何なる宿世の悪業が

吾が身の上に廻り來しぞ

思へば思へば味氣なき

浮世の雲をいかにして

拂はむ由も泣くばかり

繼母の腹より生れたる

吾が兄一人在しませど

何とはなしに睦まじからず

妾は今まで吾が兄の

吾に對する情なさを
怪しみみたりしが

今やアリーの物語
聞くに及びて吾が兄は

吾が父上の先妻が
腹に宿りし珍の子と

悟りし上は是非もなや
最早この世に生きながらへて

何をか樂しまむ
同じ母から生れたる

アリーの君の手にかかり
情なき浮世を後にして

戀しき父と母上の
居ます靈界に進むべし

吾が垂乳根の母上は
先の夫ともろともに

吾等を待たせたまふべし
血潮の因縁はなけれども

母の夫となりましし
アリーの父は吾が義父ぞ

ああ惟神々々
神の光に照らされて

三途の川も劍の山も
安く越えさせ給へかし

六道の辻天の八衢の
關所も無事に過りて

戀しき父母の坐します
天津御國に至らせ給へ

ひとへに祈り奉る

ひとへに念じ奉る

と祈願を籠むる時しもあれ、密かに錠前をコトリコトリと捻じあけて、覆面頭巾のまま忍び入る一人の男ありけり。

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 加藤明子録)

第九章 ダリヤの香(一七一一)

ダリヤは船底の密室に監禁され、この船がスガの港へ着くまでには、アリーが暴虐の手にかかつて死ぬるものと決心してゐた。そして健氣にも辭世の歌などを詠んで、死期の至るを待つてゐた。そこへコツコツと忍び足に錠前をねぢあけて這入つて來たのは、自分が小舟に乗つて離れ島へ遊びに行つた歸りがけ、かつさらはれたコークスであつた。コークスは小聲になつて、

「コレ、ダリヤさま、お前さまはこの船が遅くとも、明日の日の暮にはスガの港へ着くのだから、今夜中に殺されますよ。どうです、私が小舟を卸してお前さまを乗せ、離れ島へ漕ぎつけて助けて上げやうと思つてゐるのだから、物も相談だが、私の女房になつて下さるでせうなア」
と糞蛙が泣きそこねたやうな面から、臭い臭いドブ酒の息を吹きかけながら口説きかけた。ダリヤは柳眉を逆立て、蜂を拂ふやうな素振りをして、
「エー、汚ららしい。今さら親切ごかしに妾を助け出し、それを恩に着せて、女房になつてくれなどと、ようマアそんな厚かましい事が言へましたなア。妾がこんな破目に陥つたのも、皆お前さまのなす業ぢやないか。いはばお前さまは妾の敵だ。妾の命をおとすのも、お前さまの爲ぢやないか。なにほど命が惜しいといつても、そんな悪黨な卑劣な泥棒根性のお前さま等に靡くものがありますか。エ、汚ららしい、とつとつと、サア彼方へ行つて下さい。胸がムカムカして來ましたよ。一體お前さまの名は何といふのだい。冥途の土産に聞かせておきたいからなア」
「コークス、俺はな、アリー親分の片腕と聞こえたるコークスといふ哥兄さまだ。」

何といつても命が資本だから、そんな悪い了簡を出さずに、俺の言ふことを聞いた方が可からうぜ。なにほど名花だつて、梢から散りおつれば三文の價値もない。お前さまの容貌は天下に稀なる美貌だ。丹花の唇、柳の眉、日月の眼、縦から見ても横から見ても惚れぼれするスタイルぢやないか。この名花をムザムザと散らすのは國家のために大なる損害だ。否天下の美人を可惜地上に失ふといふものだ。俺は天下のために、お前の今晚散る事を惜しむのだ。どうだ、物も相談だが、私と一緒に逃げ出す氣はないか。そして私と夫婦になつて睦まじう暮したら何うだ。い。何程この顔はヒヨッコでも、メツカチでも、いふにいはれぬ味が、どつかには含んでゐますよ。あの鰯をみなさい。干つからびた皺苦茶だらけ、みつともない姿をしてゐるが、「しがん」でみるとずるぶん甘い味がしますよ。何とも言へぬ風味が含まれてゐる。それを一寸遠火に焼くと、なほさら味がよくなる。どうだい、このコークスの意に従ふ氣はないかな。お前さまも命の瀬戸際に立つてゐるのだから、ちつとばかり男が悪うても辛抱するのだな。何といつても辛抱は金だから、悪い事は言はない。お前の爲だ。一つは俺の爲だ。いいか、ちつとは

道理だうりが分わかつたかい□

ダリヤ□ホホホホ、いかにもコークスといふだけで、黒くろい顔かほだこと。お前まへさまは舟ふねの燃料ねんれうになるのが天職てんしよくだよ。天成てんせいの美人びじんダリヤ姫ひめに向むかつて、戀こひの鮒ふなのと、しなだれかかるのは身分みぶん不相應ふさうおうといふもの。いいかげんに斷念だんねんしたが可よからうぞや。あたイケ好すかない、ケチな野郎やらうだな□

「オイオイ、ダリヤ姫ひめ。さう芋蟲いもむしのようにピンピンはねるものぢやない。人ひとは愛情あいきがなくては、木石ぼくせきも同様どうやうだ。折角せつかく人間にんげんに生うまれて、木石ぼくせきに等ひとしい冷血漢れいけつかんになつちや、もはや人間にんげんの資格しかくはありませぬよ。お前まへさまも人間にんげんらしい。女をんならしい返答へんたふをしたら何どうだい□

「ホホホホ、人間にんげんに對たいしては人間にんげんらしい事ことをいひ、獸けだものに對たいしては獸けだものらしい事ことをいふのが天地てんちの道理だうりでせう。それが相應さうおうの理りによる惟神かむながらのお道みちですよ。お前まへさま、それでも普通ふつうの人間にんげんだと思おもつてゐるのかい□

「オイ、あまつちよ。失敬しつげいな事ことをいふな。今首いまくびのとぶ分際ぶんざいでゐながら、何なんといふ御託ごうたくを吐ほくのだ。人間にんげんを超越てうえつして、三間さんげん四間しげん權現ごんげんさまの生うれ代かりだ。あまり見違みちが

ひをすると、お爲にならないぞ。この鐵棒が一つ、お前の横ツ面へお見舞ひ申すが最後、キヤツと一聲この世の別れだ。好きでもない冥土へ死出の旅と出かけにやならぬぞ。オイそんな馬鹿な考へをすてて、俺の言ふ通り、そツと此處を脱け出さうぢやないか。そして、俺の女房になる成らんは後の事だ。ぐづぐづしとるとお前の命が失くなつちや、さつきも言ふ通り地上の損害だからな」

「ホホホホ、大きにお世話さま。妾はアリーさまのお手にかかつて殺されるのを無上の光榮としてみますよ。同じ殺されるにしても、お前さまのような、人間だか狸だか鼯鼠だか正體の分らぬ妖怪野郎に、たとへ殺されなくつても、ゴテゴテ言はれるのが苦しい。況んや夫婦にならうの、助けてやらうのと、何といふ高慢をつくのだい。サアサア早くお歸りお歸り。こんな所を船長に見付けられたが最後、お前さまの笠の臺が宙空に飛びますよ」

「實のところはお前さまと一緒に殺されたら得心だ。やがて船長が、お前さまを殺しに来るだらうから、どうか、お前さま一緒に死んで下さらないか。せめても、それを心の慰安として、どこまでも冥土のお伴をする積りだから」

「工、頭が痛い、厭な事をいふ野郎だな。サアサア早く出て下さい。シートツ
シートツ。一昨日来ひ一昨日来ひ。ぐづくしてゐなさんと線香を立てますよ」
「まる切り、人を青大将か蜘蛛のように思つてゐるのだな。箒を逆さまに立てて
頬冠りをさしたつて、いつかないつかな、このコークスは動かないのだ。お前さ
まも可いかげん我を折つて、ウンと一口言はツしやい。ウンといふ一聲がお前さ
まの運の定め時だ」

「誰がお前さま等に向かつて、ウンだのスんだのいふ馬鹿がありますか。チツと
お前さまの顔と相談しなさい。いな知恵と相談なさつたが可からう。何程お前さ
まが手折らうと思つたつて、高嶺に咲いた松の花だほどに、スツパリと諦めて、
釜たきなつとやりなさい。お前さまの顔は猿によく似てゐる。猿猴が水にうつつ
た月を掴まうとするような非望を止めて、船長殿に忠實にお仕へなさい。そした
らまた正月になつたら、おくびなりの餅の一切れや二切れは食はしてもらはうと
ママですよ、ホホホ」

「コークスは到底言論ではダメだ、直接行動に限ると決心したもののか、猛虎の勢

ひを出して、矢庭にダリヤを其場に捻ぢ伏せ、オチコ、ウツトコ、ハテナを決行せんとした。ダリヤは一生懸命の聲を絞つて「アレー助けてくれ助けてくれ」と身をもだえながら、生命かぎりにも叫んだ。船長のアリーは、をりから監禁室の前を通り、怪しき聲がすると思つてドアに手をかくれば、何者かが已に入つてると見え、かぎもかけずにパツと開いた。みれば右の有様である。アリーは懐劍を閃かして後からコークスの背部を骨も通れとつきさした。コークスはアツと悲鳴をあげ、空を掴んでその場に黒血を吐いて倒れてしまった。

アリー「ダリヤさま、危ふい事でございましたな」

ダリヤ「ハイ、誰かと思へば船長さまでございましたか。よう来て下さいました。あなたの折角のお楽しみを、此奴が横領せんとし、亂暴に及んだところ、をりよく来て下さいまして、まづあなたの爲には好都合でございましたね。私は貴方のお手にかかつて死なねばならぬ身の上でございますから、あなたが、私を罫り殺しにして、お楽しみなさるのを、私も楽しみにしてまつてみたのでございますよ」

「ダリヤさま、私も心機一轉しました。どうぞ卑怯者と笑つて下さいませぬ。デッ

キの上でも上つて、星影でも見て樂しみませう」

「これはまた御卑怯な、なぜ一旦決心した事を掌を返すごとくにお變へなさつたのですか。妾は不賛成です。サア、どうぞ、始めの御意見の通り、スツパリと殺して下さいませ。妾も一旦死を決した以上は、初心を曲げるのは心恥づかしう存じます。あなたが妾を殺さないのならば、妾の方から自刃して果てます」

といふより早く、アリーの懐劍をもぎ取り、吾が喉につきあてむとする一刹那、アリーは驚いて、その手に飛付き、短刀をもぎとつた。其のはずみに、アリーは自分の親指を一本おとししまつた。ダリヤは驚いてその指を拾ひあげ、アリーの手にひつつけ、自分の下帯を解いて、クルクルと繃帯した。鮮血淋漓として銅張りの船底を染めた。

ドアの開いた口から、さも流暢な歌の聲が聞こえて來た。アリー、ダリヤの二人は耳をすまして、ゆかしげにその歌を聞いてゐる。

ハルの湖水の小波よする

スガの港の片ほとり

薬くすりを四方よもにひさぎつつ

彼方あなたこなたとかけめぐり

妹いもうとの所在ありかを尋ねむと

神かみに願ねがひをかけまくも

畏かしこき恵めぐみの御露おんつゆに

浴よくせむものとハルの湖うみ

彼方あなた此方こなたとかけめぐり

何いづれの船ふねを調しらべても

戀こひしきいとしき吾わが妹いもうとの

影かげだに見みえぬ悲かなしさに

天てんに哭こくし地ちに歎なげき

波なみ切丸きりまるの甲板かんばんに

涙なみだを絞しぼる折をりもあれ

三あな五な教ひけうの神司かむつかさ

梅公うめこう別の神德しんとくに

今いまは包つつまれ吾わが母ははや

行方ゆくへも知しれぬ妹いもうとの

ただ冥福めいふくを祈いのりつつ

家いへに歸かへれば改あらためて

三あな五な教ひけうの大おほ神かみを

齋いつきまつりて遠近をちこちの

世よ人びと救すくはむ吾わが覺悟かくご

うべなひ給たまへ惟神かむながら

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

畏かしこみ敬うやまひねぎまつる

大日おほひは照てるとも曇くもるとも

月つきはみつとも虧かくるとも

救すくひの神かみに身みを任まかせ

救ひの船に乗せられて 浮世を渡る身にしあれば

如何なる惱みの來たるとも 恐るる事のあるべきや

アアさりながら妹は ウラルの神の御教を

朝な夕なに諾なひて 身の幸はひを祈りしが

いかなる魔神の計らひか 島の遊びの歸り路に

心も荒き海賊の 群におそはれ其の行方

命のほども計られず 悲しき破目と成果てぬ

日頃信ずるウラル教の 神を祈りて妹の

なやみを救ひ助けむと 家のなりはひ打ちすてて

彼方此方とさまよへる 吾が心根を知らせたい

何處の人の憐れみを うけて命を保つやら

但しはあの世に落ちゆきしか 心許なき吾が思ひ

恵ませ給へ大御神 救はせ給へ三五の

神素盞鳴の大神の 御前にすがり奉る

と歌ひながら、チクリチクリと此方に向かつて近より來たる。ダリヤ姫はどこやらに聞覚えのある聲だなア……とアリーの負傷を介抱しながら、耳を傾けてみたが、いよいよ兄のイルクと確信し、監禁室の中から、細い聲を出して、

『モシ、あなたはお兄いさまぢやございませぬか。妾はダリヤでございませぬが』

この聲にイルクは狂喜しながら、ドアのすきから室内を覗き込み、アツと言つたきり少時は聲さへ發し得なかつた。

ダリヤ『お兄いさま、最前のお歌を聞きますれば、不束な妹をすて給はず、家業を他所にして、妾の所在を捜してゐて下さつたさうですが、そんな親切なお心とは知らず、今まで腹違ひの兄さまのやうに思ひ、おろそかに致してゐました妾の罪を許して下さい。そんな清い美しいお心を知らず、ひがみ根性を出して、お恨み申し、いつも憂はらしに島へ遊覧に行つたその歸りに、冥罰が當つて海賊に捉へられ、かやうな所に押込められ、ここに殺されてるコークスといふ悪性男に操を破られむとしてるところを、この船長さまに救はれたところでございます。どうぞ兄さまから船長様へ、よろしくお禮を言つて下さいませ』

イルク「アアさうであつたか、怖いところだつたな。イヤ船長さま、どうも妹が大いお世話になりました。何からお禮を申してよいやら、あまり有難くつて、お禮の言葉も存じませぬ」

アリー「イヤ決して、私はダリヤを助けるような良い心はもつてゐなかつたのですが、何だか不思議なもので、つい助ける氣になつたのですよ。あなたのお父さまは、私の仇敵、何とかして仇を打ちたいと思ひ、たうとう海賊になつて敵討ちの時機を狙つてゐたのです。しかるところ手下のコークスが貴方の妹を甘く生捕つて来てくれたので、せめてはこの娘を殺し、亡父の靈魂を聊か慰めたいと思ひ、ダリヤさまを殺す計畫をきめたのですが、あまり立派なお志とその落着いた舉動に感服し、今は全く恨みも何もサラリと晴れて、却つてダリヤさまのお味方をするようになったのです。そのみならず、この通り、拇指を切り落とし、困つてゐたところ、ダリヤさまの介抱でやうやくウヅキも止まり、かへつてお禮は私の方から申し上げねばならないのです」

と自分の母のアンナが、イルクの父に無理往生に操を破らせられ、泣きの涙で女

房になつたことや、また自分の父がこれを恨んでハルの湖に身を投げて死んだことなどを、涙と共に物語つた。イルクは始終の話を聞いて、深い吐息をつきながら默然として二人の顔を見つめてゐた。これよりアリーは梅公の懇篤なる神の教を受け、悪心を翻し、海賊をサラリと止め、この湖水を渡航する船客の守り神となつて、その美名を永く世に謳はれた。

翌日の夕暮ごろ、波切丸は無事にスガの港へ横着けとなりけり。

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 松村眞澄録)

第一〇章 スガの長者(一七一一)

港の家々の點燈は湖水に映り、あたかも不夜城のごとくにみえた。天空冴え渡り、星光きらめき亘つて、えも言はれぬ清新の空氣が漂うた。數百人の乗客は先を争うて棧橋を渡り、おのおの家路に歸る者、宿を求めて行く者、一時は非常な

雑鬧を極めた。梅公一行は今や船をおりんとする時、船長のアリーはあわただしく梅公司の前に跪き、熱い涙を流しながら、

「宣傳使様、思はぬ御縁によりまして、天國の福音を聞かして頂き、また日頃の妄執もサラリと晴れました。これよりは父の仇を報ずる代りに、往來の人を吾が子のごとくに愛護し、善一筋に立ち返ります。どうか私たちの身の上に、平和と喜びの幸あらむ事をお守り下さいませ。この船が無ければ、私は何處までもお伴が願ひたいのでございますが、今日の事情許しませぬから、残念ながらお別れ申します。どうぞ途中無事に神業成就して、齋苑の館へ凱旋遊ばすやう、私も朝夕お祈り致してをります。次にダリヤさま、イルクさま、私は今まであなたの家庭を仇敵として附け狙つてをりましたが、最早今日となつては三五の神風に吹き拂はれ、心中一點の塵も止めない清淨無垢の靈身に立ち返つたやうな精神がいたします。恨み、妬みも憤怒の念もございませぬから、どうぞ御安心下さいませ。そしてダリヤさまは私と同じ母の胎内より生れた、いはば私の妹も同様ですから、どうか今後は親しく御交際を願ひたうございます。お父さまにも宜しくおつしや

つて下さいませ」

イルク「何事も因縁事でございませう。私も今の貴方のお言葉を聞いて安心いたしました。實のところは、今まで貴方が私の父を附狙つてゐられるといふ事を、方々の人々から内聞致しまして、内々心配してゐたところでございますが、最早そのお言葉を聞く上は、私も此世の中が廣くなつたやうな心持ちがいたします。ダリヤに對して貴方は兄上さま、また私もダリヤに對しては兄でございませうから、どうか三人兄妹となつて、仲よう神様の恵みに抱かれて、世の中を渡らうぢやございませぬか」

アリ「ハイ有難うございます。こんな嬉しい事は、生れてから一度も味はつた事はございませぬ。どうか親子兄妹仲よう暮らして下さいませ。時にダリヤさま、私は月に一回づつこの港へ参りますから、またどうぞ遊びに来て下さい」

ダリ「ハイ、有難うございます。貴方もこの港へお着きになつたならば、キツと私の宅をお訪ね下さいませ。私は本當の兄さまのように存じてをりますから」

アリー 有難し皇大神の御恵みに
日頃の胸の雲霧はれぬる

ダリヤ 一度は恐はしと思ひ一度は
戀しと思ひし人に別るる
戀雲も吾が兄上と聞きしより
拭ふがごとく晴れにけるかな

アリー 胤違ひ吾が妹と知りながら
戀のきづなに縛られにける
アアされど神の教の畏ければ
道ならぬ道行くすべもなし

梅公うめこう 大空おほぞらの星ほし冴さえわたり兩人りやうにんが

きよき心こころを照てりあかしぬる

ヨリコ姫ひめ いざさらばアリーの君きみに別わかれなむ

安やすくましませ湖うみの浪路なみちを

アリー ヨリコ姫ひめ珍うづの言靈ことたまおだやかに

吾わが魂たましひを打うちぬきにける

花香はなか姫ひめ 惟かむ神な嚴がらの道みち芝しばふみしより

いとさまさまの色いろをみる哉かな

かく互ひに別れの歌を歌ひながら、軒燈輝くスガの港の市中をイルクが館を指して、宣傳歌を歌ひながら進み行く。

スガの港の百萬長者と聞こえたるアリスの館は廣大なる土塀をめぐらし、數十棟の麗しき邸宅や倉庫が建ち並び、天を封じて鬱蒼たる庭木が彼方此方に立ち並び、自然の森をなしてゐた。表門には二人の門番が、若主人や姫君の歸宅なきに心を痛め、酒を呑みながら小聲に囁いてゐる。

甲「オイ、アル、嬢様は今日で半月ばかりになるのに、まだお歸りにならないが、一體どうなさつたのだらう。離れ島へ御遊覽の歸り路に海賊にさらはれ遊ばしたきり、何の音沙汰もないのだから、親旦那も此頃の御心配さうな顔といつたら、見るもお氣の毒のやうだ。それに若旦那はまた十日前から、お嬢さまの行方を探して來ると言つて行かれたきり、これも何の音沙汰もないぢやないか。まるで木乃伊取りが木乃伊になつたやうなものだなア」

アル「何といつても、目付役が無能だからね。まして海賊に捉はれたなんて言はうものなら、眞青な顔をして慄うてゐるのだから、たまつたものだないワ。鼠取

らぬ猫は飼うとく必要はないのだけれどなア」

カル「本當に汝のいふ通りだよ。去年の春だつたが、この珍館へ泥棒が忍び込んだ時、俺が一目散に目付役へ飛込んで、目付役に、今泥棒が這入つてゐますから、今すぐに來てしばつて下さいと言つたら、目付役の奴、眞青な面しやがつて、地震の孫のやうにビリビリとふるうてばかりゐやがつて、早速に出て來やうとしやがらぬ。そこに七八人の部下の目付がコクリコクリと夜舟をこいでゐたが、俺が泥棒が入つたといふ聲を聞いて、ビツクリ目をさまし、梟のよな目をさらし、泥棒の人相はどうだ、何人連れか、年はいくつくらゐだ、どこから入つたか、着物の縞柄はどうだ、男か女か、老人か子供か、跛か眼つかちかなど聞かいてもよいことを聞きやがつて、グツグツ時間をのばし、よいかげん泥棒が歸つたころ、ブリキをちやらつかせてやつて來やうといふ算段だ。案の定、歸つて來ると、泥棒がグツスリ仕事をして歸つて了つた跡だつた。本當に盲目付の状態だ。到底吾々はこんな泥棒の蔓延する世の中に、安心して暮すこた出來ないワ、目付といふ者は間に合はぬものだね」

アル「それもさうだらうかい。わづかな月給をもらつて、夜も晝もこき使はれ、命がけの仕事をせいと言はれちや、誰だつて尻込みするよ。目付になる奴ア、何奴も此奴も社會の落伍者ばかりだからな。チツとばかり氣骨のある者なら、誰がそんなつまらぬ役を勤めるものかい、小學校の教員には學が足らずしてなれず、商賣せうにも資本はなし、働くのは厭なり、つまり墮落書生上がりが食はむが悲しさに奉職してゐるのだから、チツタ、大目に見てやらねばなるまいよ」

カル「しかし、目付は月給が安いから、まづ大目にみるとしたところで、目付頭めつけがしらの奴、エラさうに大將面をさげてをりながら、泥棒と聞いて、腰を抜かさむばかりに驚くおどろのだから恐れ入るぢやないか。今時の役者に口クな奴がありさうなことはないけれど、人民保護の任にある目付役がこんなザマでは、天下はますます紛亂ふんらんするばかりだ。吞舟の魚は法網を破つて逃れ、小魚やモロコは皆ふん縛られて獄中に呻吟してゐる世の中だから、到底お規定をたよりに、吾々は安閑と暮すわけには行かぬ。自守團でも組織して自ら守るより途はないだないか」

などと目付役の悪口をついてゐる。そこへイルク、ダリヤの兄妹は宣傳使に送

られて悠々と歸つて來た。アル、カルの兩人は夢かとはかり狂喜しながら、アル「これはこれは、若旦那様、お嬢さま、待ちかねましてございます」カル「マアママア、無事でよう歸つて下さいました。これで私達も鞆丸のしわが伸びました。親旦那様のお顔のしわも今日からのんびりとする事でございませう。ヤ、澤山なお連さまでございませう」イルク「さぞお父さまが待つてゐられただらうな。サア早く案内してくれ。イヤ、お父さまに二人が無事に歸つたと申し上げてくれ。その間に足でも洗つてゐるか」

「ハイ畏まりました」とカルを門に残しおき、アルはアリスの居間に急ぎかけ込んだ。主人のアリスは奥の一閒にウラル彦の神を念じ終り、煙草をくゆらしながら、首を傾け、獨り言をいつてゐる。

「アア私ほど型の悪い者が世にあらうか。親代々から澤山な財産は譲られて、生活上の困難は少しも感じないが、肝腎の女房はイルクを生んだまま、産後の肥立ち悪く、冥土黄泉の客となり、三年が間空閨を守つて妻の菩提を弔つてゐた。思

ひまはせば吾が家へ古くより出入する賣藥行商人の女房が自分の亡くなつた妻にその容貌そつくりなので、忽ち煩惱の犬に逐はれ、道ならぬこととは知りながら、女房の側へ主人の不在を考へて、幾度となく言いよつてみたが、どうしても頑として應じてくれぬ。戀の炎は吾が身をこがさんばかりに燃え立つて、到底こばり切れないので、無理と知りつつ彼の女房アンナを手だてを以て、吾が館へ引張り込み、倉の中へ閉ぢこめておいて、無理往生に女房となし、遂に妹のダリヤを生んだが、又もやアンナは先妻と同様産後の肥立ちが悪く、先妻の命日に亡くなつて了つた。そして彼の夫は女房をとられたのが残念さに、ハルの湖水に身を投げて死んで了つた、思へば思へば自分の運の悪いのも天の爲す業であらう。杖とも力とも柱とも頼む二人の愛兒は、又もや行方不明となり、ただ一人巨萬の富を抱へて、この世に残つてゐても、何一つの楽しみもなく、それだといつて、死ぬにも死なれず、現世において犯した罪の報によつて、死後は必ず地獄のドン底に落とされるだらう。それを思へば淋しながらも、一日でも此世に永らへてをりたいやうな氣もする。アアどうしたら、この苦患から逃れる事ができるだらう。ウ

ラル彦の神様を念しながら、心の底を神様に見透かされるやうな気がして、何だか恐ろしいやうだ。神様の前へ出るのさへもおづおづして来る。アア淋しいことだ。もはや二人の吾が子は、無事に歸つて来る氣遣ひはあるまい。アアどうしたら可からうかなア
と首をうな垂れて、悔み涙にくれてみた。そこへ門番のアルが慌ただしく、ニコとして現はれ來たり、

「大旦那様、お喜びなさいませ。お二人様が無事お歸りになりました」

アリス「ナニ、二人が歸つたか。そしてどちらも機嫌ようしてゐるか」

アル「ハイ、シヤンシヤンしてゐられますよ。何だか四人ばかりお伴れがあるやうでございます。詳しいことは存じませぬが、若旦那様もお嬢様も、あの方々に助けられてお歸りになつたのぢやなからうかと思ひます。今お足を洗つてゐられますから、やがてここへお出でになりませう」

アリス「それは何より嬉しい事だ。私はこれからウラルの神様へお禮を申し上げるから、お前たちは番頭や下女にさう言つてくれ。早く夕飯の用意をせよ」

アル「ハイ、畏まりました。左様ならば旦那様」
と言ひながら、勝手元をさして急ぎ行く。アリスは神殿に向かひ感謝の祝詞を奏上してゐる。

「天地萬有の大司宰神たるウラル彦の大神の御前に、スガの里の薬屋の主人、アリス謹み敬ひ、感謝の辭を捧げます。日に夜に罪惡を重ね來たりし、惡魔に等しき吾々が身魂をも見すて給はず、最愛なる吾が倅、吾が娘を安全無事に、吾が家に歸させ給ひし、その廣き厚き御恩徳を、有難く感謝いたします。今日まで、吾が身は貪瞋癡の三毒にあてられ、五逆十惡の巷に迷ひ、人の貧苦困窮を意に介せず、利己一片の利に走り、大神の御子たる數多の人民を苦しめまつり、加ふるに人の妻女を奪ひ、惡逆無道の限りを盡して參りました。極重惡人の私をも見すて給はず、御恵み下さいましたその廣大無邊の御仁慈に對し、感謝にたへませぬ。アア神様、私は今日より前非を悔い改め、祖先より傳はりし一切の財産をあなたに奉り、スガ山の山元に清淨の地を選び、莊嚴なる社殿を營み、わが罪惡の萬分一をつぐなひ、來世の冥福を與へられむことを祈り奉ります。どうか吾が願ひを

平らけく安らけく、相うべなひ下さいまして、子孫永久に立ち榮え、大神の御恩
徳に永久に浴し得るやう、御守護あらむことを、ひとへに願ひ奉ります。惟神靈
幸倍ませ」

と悔悟の涙をこぼしながら、感謝と哀願の祈願をこめてゐる。そこへ兄のイルク
を先頭にダリヤ姫、梅公、ヨリコ姫、花香姫、シーゴの六人連れ、悠々として
這入つて来た。

アリス「ヤ、そなたは倅か、……娘か、ようマア無事で歸つて来た。父はここ半
月の間、夜の目もロクに寝ず、神様におすがり申してゐた。そのおかげで、今日
はお前たちの無事な顔を見ることを得たのだ。モウ私はこれつきり、この世を去
つても心残りはない。……何れの方かは知りませぬが、よくマア吾が子を送つて
来て下さいました。謹んでお禮を申し上げます」

梅公「初めてお目にかかります、私は三五教の宣傳使のお伴に仕へる梅公と申す
者でございませぬが、波切丸の船中において、イルクさまと昵懇になり、一夜の宿
を御無心にあがりました。どうか宜しう願ひ致します」

アリス「それは能うこそお出で下さいました。御存じの通り、茅屋でござい
が、家は廣うございますから、幾人さまたりともお泊り下さいませ」

ダリヤ「お父様、この神司様に妾は助けて頂いたのですよ。この方の御神徳によ
つて、妾は危ふいところを助けられたやうなものですから、どうぞお禮を申して
下さい。それから、この綺麗なお方は、宣傳使様のお伴で、ヨリコ姫さま花香姫
さまといふお方でございます。また白髪のお方はシーゴ様といふ俄か道心様で
ございますが、本當に心意氣のよい方ですから、無事に吾が家へ歸られた喜びを
兼ね、家の祈禱をして頂かうと思つて、お伴したのでございます」

アリス「それはそれは、何れも方様、ようこそお越し下さいました。サアどうぞ、
くつろいで下さいませ。御遠慮は少しもいりませぬから」

梅公「ハイ有難うございます。お言葉に従ひ、性來の氣儘者、自由にさして頂き
ます。サア皆さま、御主人のお許しが出たのだから、體の疲れを癒するため横に
おなりなさい」

ダリヤ「お父さま、この方々は本當の活神様ですから、粗忽があつては可けませ

ぬ。どうぞ私にお世話を任せて下さいませぬか」

アリス「よしよし、私もお前達の歸つたのを見て、にはかに體がガツカリと草勞れて来たやうだ。皆さまに失禮だけれど、離室へ行つてゆつくり休まして頂くから、手落ちのないやう、御無禮のないやう、おもてなしをしておくれや」

と言ひながら、エビのやうに曲つた腰を右の掌で二つ三つ打ちながら、

「皆様、左様なら、失禮いたします」

と一言を残し、離室の座敷に身をかくした。この時南方の空に向かつて鬧の聲が聞こえて来た。梅公はヨリコ姫と共に庭先に立ち出で、音する方を眺むれば、大空は大變な雲焼がしてゐる。これはバルガン城へ大足別將軍の軍隊が攻め入つて、市街を焼き拂うた大火焰が、空の色を染めてみたのである。

(大正一三・一二・二 新一二・二七 於祥雲閣 松村眞澄録)

第三篇 多羅煩獄

第一章 暗狐苦（一七一—一七三）

デカタン高原の西南方に當つてタラハン國といふ、人口二十萬を有する地味の肥えた産物の豊かな國土がある。國王はカラピン王といひ、國の中心地點なるタラハン市に宏大なる城廓を構へ、ウラル教を信じて十數代を繼續した。その時の國王の名をカラピン王といひ王妃をモンドル姫といふ。二人の中には太子スダルマン、および王女バナナの二子を擧げてゐた。

王妃のモンドル姫は銀毛八尾の惡狐の靈に憑依され、殘忍性を帶び、常に妊婦の腹を裂き、胎兒を抉り出して、丸焚きとなし舌鼓を打つてゐた。國民怨嗟の聲は國內に充ち溢れ、何時騷動の起るやも知れざる形勢となつて來た。しかしながらカラピン王は王妃の容色に戀着し、王妃の言ならば、如何なる無理難題も二つ

返事で承認するといふ惚けかたである。

左守の司のシャカンナは民心日に月に國家を離るるを憂ひ、かつ何時革命の狼火のあがるや知れざる形勢を憂慮し、常に死を決して王および王妃に直諫した。されども王は少しも左守の言を用ひず、遂には左守の登城するを見るや、奥殿深く身を忍んで面會をさけた。右守の司ガンヂーは心よからぬ癡者にて常に王妃を煽動し、左守を退け、自分が、とつて代つて左守の職につき、タラハン國の主權を吾が手に握らむ事を希求してゐた。右守のガンヂーが内面的應援によつて、王妃の惡逆無道の行爲はますます殘虐の度を加へ、民心ますます離反して所どころに百姓一揆が勃發して來た。

或時モンドル姫は、寵臣の右守ガンヂーおよびその妻アンチーと共に十數人の侍女を伴ひ、カルモン山の風景を探るべく遊覽を試みた。何處ともなく白羽の矢が飛んで來てモンドル姫の額に命中し、姫は悲鳴を擧げて谷底に轉倒し、つひに絶命して了つた。この事四方に喧傳するや、國民はひそかに大杯をあげて國家の前途の光明を祝するといふ勢ひであつた。

カラピン王は王妃に對する愛着の念去り難く、つひには狂亂のごとくなり、近臣を手討になし、王妃のごとく又もや妊婦を裂き胎兒を丸焚きにして舌鼓を打つやうになつて來た。左守の司のシヤカンナは、王家および國家の一大事と死を決して、妻のハリスタ姫と共に王宮深く進み入り、王に改心を迫り、且つ國民の怨嗟の聲喧しく、いつ擾亂の勃發するやも知れぬ事を説明した。最愛の王妃を失ひ、心の荒びきつたるカラピン王は、到底忠誠なる左守の諫言を耳にするに至らなかつた。忽ち大刀を引き抜いて形相凄じく左守に向かつていふ、

「モンドル姫の横死は必ず汝が手下の處爲ならむ。王妃の仇だ、觀念せよ。手打ちにして呉れむ」

と阿修羅王のごとく左守に斬りつけむとした。左守の妻ハリスタ姫は王と左守の間あひだに立ち塞ふさがつて、

「恐れながら王様に申し上げます。忠臣をお斬りになるのは御自分の片腕をお斬り遊ばすも同様でございます。國家の柱石なくして、どうしてタラハン國が保てませうか。まづまづ心靜かにお考へ下さいませ、もし左守の司を、どうしても殺

さねばならぬのならば、どうか私を身代りに立てて下さい」

と涙を兩眼に滴らしながら陳辨した。王は怒髪天を衝いていふ、

「エー、さかしき女の差出口、聞く耳もたぬ。殺してくれなら殺してやる。汝の

みならず、シャカンナも共に刀の錆だ。観念せよ」

と言ひながら、ハリスタ姫の左の肩から右の脇へ袈裟掛けに、切れ味のよい銘刀

にてスパリとその場に斬り倒した。次いで左守を打殺さむと阿修羅王のごとくに

追掛ける。左守は一生懸命に裏門より雲を霞と逃げ出し、當年六才になつたスバー

ル嬢を背に負ひ、何處ともなく身を隠した。

右守のガンチーは左守となり、妻アンチーの仲に生れた一人息子のアリナと共

に得意な日月を送つてゐた。さうして右守家の家令サクレンスを抜擢して右守に

任じた。

新左守のガンチーは左守の地位を得て國政改革を標榜し、前左守家傳來の巨萬

の富を没収し、國內の貧民に慈善を施し、吾が聲名のあがらむ事にのみ焦慮し、

漸くタラハン國は小康を得た。カラピン王は一切の政務を左守のガンチーに一任

し、自分は茶の湯、俳諧などに心を傾け、風流三昧を事としてゐた。

カラピン王の太子スダルマンは十八才の春を迎へ、王女バンナは十六才の春を迎へた。太子のスダルマンは宮中深く閉ぢ籠もり、何となく精神憂鬱として樂しまず、父の言葉は言ふも更なり、左守右守、その他重臣に對しても、拜謁を乞ふ度毎に面白からぬ面を現はし、ただ一口の言葉も發せず鬱々として書齋に籠つてゐた。カラピン王をはじめ左守右守の重臣連の憂慮は一方でなかつた。日夜神佛を念じ、又は面白き樂器を弾きならして太子を慰め、憂鬱病を治さむと、相談の結果、國內の美人を召集し太子の御殿に侍らしめた。百餘名の嬋妍窈窕たる美人は燦爛と咲き亂れたる櫻花のごとく、蝶の如くその美はしさ、たとふるに物なきが如くであつた。されど太子はこれらの美人に對し一瞥もくれず、ますます奥殿に閉ぢ籠り深く憂鬱に陥るのみであつた。ただ太子の氣に入るのは左守の倅アリナ一人のみである。それゆゑアリナは常に太子に召されて話相手となり、時々城内を逍遙し、太子の心を慰めてゐた。

太子の最も心を慰むるものはアリナと共に繪を描くことであつた。太子もアリ

ナも日々繪筆を弄び、人物などを描く時はほとんど實物に等しきまで上達した。

ある時太子はアリナに向かひ、

「オイ、アリナ、どうだ今日はお前と何處かへ行つて寫生でもやらうぢやないか。狭い城内では、もはや寫生の種もつきてしまつたから」

とツイにない外出の意を、ほのめかしたので、アリナは……この機逸すべからず、御意のかはらぬ内、太子のお伴をなし、太子のお好きな山水の寫生でも遊ばしたら、日ごろの憂鬱症が癒るかも知れぬ。王家に對し、國家に對し、これぐらゐ結構な事はない……と決心し、兩手を支へて満面に笑を湛へながら、

「太子様、願うてもなき御催しでございます。どうか私もお伴さしていただければ無上の光榮でございます。山青く水清く飛沫をとばす谷川の景色などは、胸に萬斛の涼味を味はつたやうな氣がいたしますよ。さすれば父の左守に申し傳へましてお伴の用意を致させませう。なにほど微行と申しても一國の太子様、二三十人の護衛は威嚴を保つ上に必要でございませうから」

太子は頭を左右に振りながら、さも不機嫌な顔にて、

「この城中じやうちゆうにおいてお前まへ一人ひとりより、餘よの氣きに入るいものはない。その外ほかにただ一人いちにんたりとも召使めしつかひをつれる事ことは嫌いやだ。そんな大層たいそうな事ことをするなら、もう郊外かうぐわいの散步さんぽは止めにする。餘よの病氣びやうきは、かやうな窮屈きうくつな殿中生活でんちゆうせいくわつが嫌いやになつて、その爲ため起おこつたのだ。普通ふつう人民じんみんのごとく、極手輕ごくてがるにお前まへと二人ふたり散歩さんぽしてみたののだ」

「左様さやう仰おほせられますれば是非ぜひはございませぬ。しかしながら太子様たいしさまをひそかに郊外かうぐわいにお連れ申まをしたとあつては、王様わうさまをはじめ吾わが父ちちの怒いかりは、いかばかりか分わかりませぬが、私わたしは太子様たいしさまのために、たとへ親おやに勘當かんたうを受けてもかまひませぬ。半時はんときでも太子様たいしさまのお心こころが安やすまればそれで満足まんぞくでございませぬ。しからは明日あす拂曉ふつげう裏門うらもんより竊ひそかに脱出だつしゆつし、半日はんいちの御清遊ごせいいうにお伴ともをいたしませう」

「ア、それで満足まんぞくした。餘よの病氣びやうきも全快ぜんくわいするだらう。貴族生活きぞくせいくわつに飽あき果はてた餘よは、庶民しよみんの山野さんやに働はたらく實況じつきやうも見みたいし、自然しぜんの風物ふうぶつに對たいし、天惠てんけいを味あぢはひたい。それではアリナ、きつと頼たのむぞ」

「ハイ、畏かしこまつてございます。それでは一切いっさいの用意よういをいたしておきます」
太子たいしは地獄ぢごくの餓鬼がきが天國てんごくに救すくはれたやうな心持こころもちになつて、翌日あくるひの未明よあけを一時千いちじせんし

秋の思ひで待つてゐた。

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 北村隆光録)

第一二章 太子微行(一七—四)

スダルマン太子は左守の一子アリナと共に、窮屈な殿内生活を逃れて心の駒の進むまま膝栗毛に鞭うち、タラハン城の東北に當る樹木鬱蒼たる城山を目指して進み入った。今まで見たことも、聞いたこともない麗はしき羽翼を擴げた百鳥、木の間にチュンチュンと囀り、デカタン高原名物の風は今日はことさら穩かに吹き渡り自然の音楽を奏し、山野の草木は惟神的舞踏を演じ、谷川の流れば激湍飛沫の絶景を現じ、太子の目には一つとして奇ならざるなく、珍ならざるはなかつた。

太子「オイ、アリナ、お前のお蔭で俺も窮屈な殿内をやつとの事で脱走し、造化

の技巧をこらした天然の風光に親しく接し、山野の草木や禽獸を友として、氣樂に逍遙する心持は餘が生れてから未だ初めてだ。見れば見るほど、考へれば考へるほど、天然といふものはなんとした結構なものだらう。人間の造つた美術や繪畫とは違つて、言ふにいはれぬ風韻が籠つてゐるではないか。餘は不幸にして王族に生れ、十八年の今日まで狹苦しい殿中生活に苦しめられ、かかる廣大なる原野に天地を友として、悠然として觀光する餘裕がなかつた。アア平民の境遇が羨ましい。人生貴族に生るるほど不幸不運のものはないぢやないか。餘は何の天罰でかやうな窮屈な身の上を生れて來たのだらう。そしてお前は左守の倅で、貴族の家に生れたといつても餘に比ぶればよほどの自由がある。餘は王族といふ牢獄に投ぜられ、かかる無限の天地の恩恵に浴することの出來ないのは實に殘念だ。代れるものならお前と代つてもらひたい、アアアア」

と溜息をつき感慨無量の體であつた。

アリナ「若君様、さう思召すのも御尤もでございませうが、なにほど苦しくつても、そこを辛抱して頂かねばなりません。殿下は一國の親ともなり、師ともなり、

主ともお成り遊ばして國民を愛撫し、指導し、監督なさらねばならない天よりの御職掌でございますから、御境遇には同情いたしますが、どうぞ左様な事を仰せられずに、父王様の跡をお継ぎ遊ばし天下に君臨して頂かねばなりません。私はどこまでも殿下のためには身命を賭して働きます。又なるべく御窮屈でないやうに取計らひますでございます」

「ウン、それもさうだな。餘は残念に思ふわい」

「殿下如何でございますませう、この絶景を殿下の妙筆で描寫なさいましては。殿中に居られます時とは、よほど變つた立派なものが出来るでせう。そしてお心が安まるでございますから」

「いや、餘はもう繪筆を捨てた。殿中ばかりに居つて園内の景色を今まで得意になつて寫生してゐたが、かう山野に出て造化の藝術を目撃しては、もう筆を揮ふ氣にはなれない。なにほど丹青を凝らしても萬分一の眞景をも描寫することは出来ぬぢやないか。これだけ雄大な山川草木が目の前に横たはつてゐては、どこから筆を下ろしてよいやら、その端緒さへ認むるに苦しむぢやないか。ただ一本の

樹木を描寫するにも餘程の丹精を凝らさねばならぬ。際限もなき山野草木、渺茫として天に續く大高原、どうしてこれが人間の筆に描き出されるものか。王者だとか貴族だとか、高位高官だとか、國民に對し威張つてみたところで、神の力、自然の風光に比ぶればほとんど物の數でもない。兒戲に等しいものだ。天地萬有は、餘に對しては唯一の經文で無上の教だ。これを見ても人間たるものの腑甲斐なさに呆れ返らざるを得ぬではないか』

「左様でございますな。殿下は觀察眼が非常に優れてゐられます。私は幸ひ小臣の倅、自由自在に山野を逍遙し得るの便宜がございますので、時々自然の風光に接し、日月の光を浴びて、自由の天地に遊ぶ事が出来ますためか、造化の藝術に見慣れてしまひ、さまで雄大だとも、絶妙だとも考へませなんだ。一木一草の片に至るまで心を留めて眺めた時には、如何にも不思議千萬の現象でございます」

「どうぢやアリナ、この山を向かふへ越えて些しく珍らしい風景を眺望して來うぢやないか」

「ハイ、お伴を致しませう。しかしながら餘り遠方へお出ましになると歸りが遅

くなり、頑迷なる役人どもに見つけられては、警戒がますます厳になり、殿下とかう氣樂に自由に散歩する事が出来ないやうになるかも知れませぬ。さうすればお互ひの迷惑でございますから、今日は殿下の仰せの場所まで急ぎ足に参り、また急いで殿中に歸りませう」

「ヨシヨシ、お前の意見にも従はなくちやなるまい。そんなら急いで城山を北に越え、觀光を恣にしやうぢやないか。サア行かう」

と早くも太子は先に立つて歩を進めた。アリナは寫生に要する一切の道具を背に負ひながら、木の間を潜つて餘り高からぬ城山の頂上にあえぎあえぎ登つていった。太子は山の頂に立つて四方を見渡しながら、

「オイ、アリナ、タラハンの市街はタラハンの首府といつて、随分廣い廣いと誰も彼も褒めてゐるが、わづか三萬の人口。また廣大なる王城も、かう山の上から瞰下して見れば、實に宇宙の斷片に過ぎないぢやないか。かかる小さい物の數にも足らぬ王城に、餘は十八年も窮屈の生活をやつてみた事を思ひ出して、心恥づかしくなつて來た。この雄大なる天に續いた大廣野の中にチラチラ見える人家は、

まるでハルの湖水に船が浮かんであるやうぢやないか。山野の草木はソロソロ芽ぐみ出し、緑、紅、黄、白などの花は至る所に咲き満ち、白紙を散らしたやうに所どころに池や沼が日光に照つてゐる。この風光は實に天國淨土の移寫のやうだ。名も知らぬ珍しい鳥はこの通り前後左右に飛び交ひ、微妙な聲を放つて天下の春を唄つてゐる。餘も人間と生れて心ゆくまで天然の恩恵に浴したく思ふ。籠の鳥の境遇にある餘にとつては、この天地は實に唯一の慰安所だ。命の洗濯場だ。ア何時までも此所にかうして遊んでみたいやうだ。たとへ老臣が何と小言を言はうともかまはぬぢやないか。グツグツいつたら太子の位を捨て、山に入り仙人となつて、お前と二人簡易の生活をやつてもよいぢやないか。餘は再び以前のやうな貴族生活はやりたくない」

「長らく窮屈な生活に苦しみ遊ばした殿下としては、御無理もございませぬ。しかしながら世の中に満足といふ事は到底無いものでございますから、どうぞ心を取り直して一先づ殿中にお歸り下さいませ。あまり遅くなるとまた老臣どもが騒ぎ立てますから」

「お前は餘の言ふ事なら命までも捨てますと常に誓つてゐるぢやないか。老臣どもこしよとの小言こごとがそれほどお前は怖ろしいのか。やつぱり人間にんげん竝みにちひ小さい私欲しよくに目めが眩くらんでゐるのだらう。歸りたくばお前まへ勝手にかつて歸つたがよい。餘はこの山頂さんちやうにおいて今夜こんやの月つきを賞しょうし、寶石ほうせきのごとく輝かがやく星ほしの空そらを心こころゆくまで眺ながめて歸かへるつもりだ。十八年じふはちねんの今日こんにちまで未まだ一回いつくわいも見みたこともない満天まんてんの星光せいくわう、圓満えんまん具足ぐそくなる三五さんごの月つき、その月つきの玉たまより滴したたる白露しらつゆを身みに浴あびて、人間にんげんの眞味しんみを味あぢはつて見みたいのだ。汝なんぢはこれより急いそぎ殿中でんちゆうに歸かへつてくれ。餘はもう一つ向むかふの山やまを踏查たふさして見みるつもりだ。左様さやうなら」

と言いひながらスタスタと尾上をのへを傳つたうて北きたへ北きたへと進すすみ往ゆかむとす。アリナは途方とほうにくれながら歸かへらねばならず、それだといつて太子たいしを山やまに残のこして歸かへるのは尚なほ悪わるし、仕方しかたなく太子たいしの足跡あしあとを踏ふんで北きたへ北きたへと進すすみ往ゆくこととなりける。

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 加藤明子録)

第一三章 山中の火光（一七一—一七五）

太子は物めづらしげに四方の廣原を瞰下しながら、尾上の風に吹かれつつ、心の向かふままドンドンと進み行く。日は西山にズツポリと沈んで、ソロソロ暗の帳が下りて來た。百鳥は老木の梢に宿を求めてチユンチユンと鈴のやうな聲で囀つてゐる。をりから昇る月光はことさら美しく、一點の雲翳もなき大空を、隈なく照らしてゐる。ここはタラハン國にて有名なるトリデ山といふ。太子はトリデ山の頂上に突立つた大岩石の上に安坐しながら、空の景色を眺めて、その雄大なる自然の姿に憧憬してゐる。

太子「如意寶珠玉をかざして大空を

昇る月こそ憧れの國

寶石を撒きちらしたる大空は

神の力の現はれなるらむ

尾上をのへをば渡る松風まつかぜ音も清きよく

なにか神祕しんぴを語るべらなり

瞰みおろ下せば四方よもの原野げんやは月光つきかけの

露つゆを浴あびつつ妙たへに光ひかれる

今いま吾われはトリデの山やまの山やまの上へに

千代ちよの命いのちの清水しみづ汲くむなり

月つきの露つゆ吾わが身魂みたまをば露つゆほして

甦よみがへりたる心地こころせしかな

アリナ 若君わかぎみの御後みあとに従したがひ來きて見みれば

トリデの山やまは殊ことに麗うつくし

若君わかぎみのたたせたまへるこの巖いはほ

千代ちよに動うごかぬ名なをば残のこさむ

吾が父はさぞ今ごろは若君の
所在たづねて騒ぎをるらむ
大君のいづの御心思ひやり
父を思ひて涙にしたる

太子 天地の生ける姿を眺めては

死せる館へ歸りたくなし

吾が宿に立ち歸りなば父君の

隔ての垣は高くなるべし

花香ひ木の實は豊に實なる

この神山に住みたくぞ思ふ

太子は夜半にもかかはらず又もや立つて月の光を頼りに谷に下り、
あるひは峰

を越え、何處を當ともなく進み行く。アリナは是非なく小聲で呟きながら、太子の姿を見失はじと五六歩の間隔を保つて従ひ行く。十五夜の月は早くも高山にかくれて大きな山影が襲うて来た。二人は數里の山野をパンも持たずに果物に喉を濡はしながら、當所もなくやつて来たので身體繩のごとく疲れ、密樹の下に横たはつたまま熟睡してしまつた。二人の自然に目の醒めたころは翌日の午後の八つ時であつた。太子は目をこすりながら、

「オイ、アリナ、一體此處は何といふ所だ。あまり疲れたと見えて前後も知らず寝忘れ、もはや翌日の八つ時らしいぢやないか。お父上や左守、右守はさぞ餘の姿の見えないのに驚いて騒ぎ立ててゐることだらう。一先づ歸つてやらうぢやないか」

「ハイ、畏まりました。一時も早く歸らねばなりませんまい。さうして殿中へ歸れば、きつと大君様や吾が父なぞの怒りに觸れる事でございませうが、責任は私が一切負ひますから、どうぞお歸り下さいませ」

「なに、責任をお前に負はしては餘が濟まない。何といつても餘は一國の太子だ。

父上には餘から好きやうにお詫びをしておく。そしてお前の身の上にお咎めの來ないやう命にかけても辨解してやるから安心せよ」

「殿下に御心配をかけては濟みませぬ。みな私が悪いのでございますから、サア参りませう」

と今度はアリナが案内役となつて歸路についた。どう道を踏み迷うたものか、往けども往けども歸り道が分らない。山は幾千百ともなく彼方此方に聳へ、谷底を見れば蒼味だつた水が緩やかに流れてゐる。

アリナ「殿下、大變な所へ参りました。私もこの邊の山路は初めてでございますので、何方へ歩んだら歸れるやら、見當が取れませぬ。誠に濟まない事をいたしました」

太子「なに、心配するな。道が分らねば山住居をすりやそれで好いぢやないか。よほど空腹にはなつたが、餘とお前と二人の食料ぐらゐは木の實を取つて食つてゐても續くだらう、何事も惟神に任すがよからうぞ」

「ハイ、しかし斯様な山奥のしかも深い谷間に迷ひ込みましては方角も碌に分り

ませぬ。とも角、この杖を立てて見て、杖のこけた方に進むことに致しませうか」

「ウン、それも一策だらう。なに心配することが要るものか。山は青く谷水は清く、鳥は歌ひ新緑は茂り、珍しき花は彼方あなたに艶を競い芳香を薫じ、陽氣は温かく、こんな愉快の事はないぢやないか。餘は一層、十日も二十日も山の中に迷うてみたいわ、アハハハハ」

「何と殿下はお氣樂でございますな。私のやうな小心者はもはや耐へ切れなくなつて参りました」

「ハハハハハ。ずゐぶん弱音を吹く男だな。あの草木を見よ。こんな嶮しい山に荒い風に揉まれながら、泰然自若として非時花を開き實を結び、天然を樂しんでゐるぢやないか。鳥は氣樂に春を歌ひ、山猿はあのとほり梢に集まつて嬉し氣に遊び戯れてゐる。たとへ小なりと雖も吾々は人間ぢやないか。どこに居つても生活のできない道理はない。神の恩恵の懷中に抱かれ、自然と親しく交はり、天地を父母として、誰人に遠慮もなく氣兼ねもなく、かうしてゐる吾々は實に幸福な境遇に置かれてゐるぢやないか。何を悔やむのだ。その心配さうな顔は何事ぞ。」

ちつと氣を取り直し元氣をつけて勇んだらどうだ。萬物の靈長天地の花と誇つてゐる人間の身として、山河草木禽獸に對し恥づかしくは思はないか」

「殿下の大膽不敵なるお言葉には、小心者のアリナも驚倒するより外はございませぬ。何とした殿下は大人格者でございませう。今まで殿中雲深き所にお育ち遊ばし、隙間の風にも當てられぬ高貴の御生活、蒲柳の御體質、荒風に一度お當り遊ばしても忽ち病氣にお悩み遊ばすかと、内々心配いたしてをりましたに、只今の殿下のお元氣、勇壯活潑なる御精神には、アリナも舌を巻きました。「王侯に種なし」といふ諺は殿下によつて全然裏切られてしまひました。三五教の御教にも「誠の種を吟味いたすは今度の事ぞよ。種さへよければ、どんな立派な御用でも出来るぞよ。今度は元の種を世に現はして神政成就の御用に使ふぞよ」と出てゐますが、如何にもその通りだと思ひます。殿下は決してただ人ではありません。末にはきつと印度七千餘國の王者となられるでせう。アア私は何の幸福でかやうな立派な殿下のお側付に選ばれたのでせうか」

「アハハハハハ、オイ、アリナ、仕様もない事を言うてくれるな。餘は印度の王

者などは眼中にないのだ。それよりも宇宙の断片一介の人間となつて普く天下を遍歴し、自由自在に天地の恩恵に親しみ、人間らしい生活を送つてみたいのだ。天から生きた精霊を與へられたる人間として、人形のやうに簾を垂れ有象無象に祭り込まれ、尊敬され、禮拜されて、それが何嬉しい。何の名譽になるか。虚偽虚飾をもつて充たされたる現代の人間のやり方には餘は飽き果ててゐる。決して再び殿中に歸るやうな馬鹿な眞似はすまい。草を組んで蓑となし、木の葉を編んで笠となし、これからお前と無銭旅行と出かけたらどうだ。そこまでお前の誠意があるか、それを聞かしてもらいたいものだ。お前もそれだけの苦勞はようせないといふであらう』

『どんな苦勞でも殿下とならば致しますが、雲上の御身の上をもつて、物好きにも乞食の眞似をして無銭旅行などは御酔興にも程があります。決して悪い事は申し上げませぬ。どうか冷靜にお考へ下さいませ。タラハン國の人情や、大王様の御心中や臣下の胸中もすこしは顧慮下さいまして、一まづ御歸城を願ひます』

『餘は決して歸城しないとは言はないよ。しかしながら歸らうと思へば思ふほど、

山深く迷ひ込み歸り途が分らぬぢやないか。それだから餘は、これも全く天の命と信じ、無錢旅行の覺悟を定めたのだ。アハハハハハ、どこまでも氣の弱い男だなア

「いや私も殿下の雄々しきお志に勵まされ、一切萬事を天地神明に任せました。無事に殿中に歸り得るのも、また山深く迷ひ込み、虎狼の餌食となるのも天命と心得ます。サア杖のこけた方に進んでみませう」

と言ひながら、携へ來たりし杖を眞直ぐに立てパツと手を放した。杖はアリナが立つてゐる左の方へパタリとこけた。

アリナ「殿下、この通りでございます。左の方へ参りませう。これも神様のお知らせでございますから」

太子「よし、杖の倒けた方を杖とも力とも頼んでモウ一息跋涉して見よう。ヤア面白い面白い」

と言ひながら、太子は先に立つて山の中腹を左へ左へと忙がはしげに走り往く。往けども往けども山また山の方角も分らばこそ、その日もズツポリと暮れてしま

つた。主従二人は木の葉を折つて敷物となし、空腹をかかへながら夜の明けるを待つてゐた。前方の谷間よりライオンの聲、峰の木霊を響かして物凄く聞こえて来る。アリナはこの物凄き獅子の聲に戦慄し、唇を紫色に染め、蒼白色の顔を月光に曝し慄ひ戦いてゐる。

アリナ「モモもし、デデ殿下、タタ大變な事になつて参りました。ココ今夜ドドどうやら喰はれてしまふかもシシ知れませぬ。これといふのも全く私が悪いのでございます。デデ殿下の御身の上に難儀のかかるやうな事があつては、大王様や、數多の御家來衆や、また國民に對してもモモ申し譯がございませぬ。ドドどうか私の大罪をお許し下さいませ」

と早くも泣いてゐる。スダルマン太子は平然として些しも騒がず、
「アハハハハ、オイ、アリナ、その態はなんだ。獅子がそれほど怖いのか。あいつは獸類ぢやないか。神の生宮ともいふべき人間が、獅子や虎や狼ぐらゐに怖れ戦くとは何のことだ。獅子の奴、餘の姿を見て反對に戦き怖れ悲鳴を擧げてゐるのだよ。」

天地の神の生宮出でましを

眺めて獅子の吼ゆるなるらむ

獅子熊も虎狼もなにかあらむ

神の御子たる人の身なれば

天地の深き恵みを稟けながら

何を恐るか獣の聲に

アリナ 若君と共にありなば獅子熊の

健びも怖しと思はざりけり

さりながら獅子の咆哮聞くごとに

身は自ら打ち慄ふなり

猛獣の聲は四方八方より百雷のごとく聞こえ來たる。

左手の谷底を見れば珍し

や、一炷の火光が木の間を透かして瞬いてゐた。太子は目敏くもこれを見て、アリナの背を二つ三つ平手で叩きながら、

「オイ、弱蟲の隊長、アリナの先生、安心せよ。あの火光を見よ。決して妖怪の火でもあるまい。あれは確かに陽光だ。どうやら人間が住まゐるをしてゐるらしい。

あの火光を目當に人家を尋ね飲食にありつかうぢやないか」

アリナは太子の言葉に頭を上げ指さす方を瞰下せば、如何にも力強い火の光が瞬いてゐる。にはかに元氣恢復し、聲も勇ましく、

「ヤ、いかにも殿下の仰せの通り火光が見えます。全く天の御恵みでございませう。一時も早くあの火を目當に下りませう。サア私が蜘蛛の巣開きをいたしますから、どうか後について来て下さいませ」

「ウンよし、お前も俄かに強くなつたやうだ。俺もそれで心強くなつた」と言ひながら、灌木茂る木の間を分けて下り行く。

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 加藤明子録)

第一四章 默念氣（一七一六）

タラハン城市を去る正北十里の地點に、タニグク山といふ高山が聳えてゐる。南西北の三方は嶮峻なる高山に包まれ、わづかに東の一方に細い入口があつて、淙々たる谷水はこの東口より流出するやうになつてゐる。タニグク山の山麓には天然の大岩窟が穿たれてゐる。カラピン王を諫めて吾が妻を殺され、自分もまた刃の錆とならむとせし危機一髪の難を遁れ、太子スダルマンの妃とまで内定してゐた當時六才の娘スバル姫を背に負ひ、都を後にこの岩窟に潜んで、遠近の無頼漢を集め、自ら山賊の張本となり、右守の司たりしガンヂーならびに彼が部下のサクレンスの奸者を拂ひ、君側を清めむと、日夜肺肝を碎いてゐた彼は、カラピン王に仕へてゐた左守のシャカナナであつた。古より獅子の棲處と稱へられ、誰一人この山奥に足を入る者がなかつた。シャカナナは年と共に澤山の部下が殖えて來た。そしてその部下を夜ひそかにタラハンの城下をはじめ各地に派遣し、富者の家を狙つて財物を奪ひ、ガンヂー討伐の準備を整へてゐた。六才の時伴う

て来た娘のスバルは今年漸く十五才の春を迎へた。シヤカンナは岩窟の奥の間に大胡坐をかき脇息にもたれながら、數多の乾兒どもの報告を聞いてゐた。

シヤカンナ「オイ、バルギー、この頃は根つからお前の組は働きが足らぬぢやないか。チツと確りしてくれないと、折角蓄へた軍需品までが無くなつてしまひ、何時になつたら目的を達するやら殆んど見當がつかぬぢやないか」

バルギー「ハイ、仰せではございますが、このごろはバラモン軍が横行闊歩いたしますので、思はしい仕事が出来ませず、チツと物のありさうな家は皆バラモン軍にしてやられ、わづかに二十や三十の手下を連れて、あの大軍隊を向かふにまはし戦ふわけにもゆきませず、残念ながら軍隊の退却するまで時機を考へてゐるのでございます。少しばかり、この頃は食ひ込みになるやうでございますが、少しお待ち下さいませすれば、きつと大きな活動をしてお目にかけます。私も精々部下を督勵してをりますなれど、何といつても夜ばかりの仕事で、思ふやうに拂りませぬ。この十里の山路を忍び變装して、バルガン市に出でまた夜の間に歸つて來なくちやならないのでございますから、肝腎の働く間は、ホンの半時か四半時

ばかりでございますから、乾兒どもも大變に困つてをります」

「エー仕方がないなア。マアともかく、精々働くやうにいつてくれ。そしてガンチーの屋敷の様子は何うぢや、判然分つたか」

「ハイ、このごろはバラモン軍が襲來するとかいつて、堀を高くし、不寢番の兵士が七八十人ばかり、裏表の門を警護してをりますので、近よる事は出來ませぬ」
「さうか、それも仕方がない。もう暫く計畫を延ばさうかな」

「どうか、さう願へますれば結構でございます」

「今日はわが女房が城中において、大王の手にかかり、命をすてた命日だから、コルトンに言ひつけ、いい修験者を、どつかで求めて來て、回向をしてもらひたいと思ひ、二三日前から派遣したのだが、今日歸つて來ぬやうな事では、到底間に合はない。困つた事だワイ。しかしながらコルトンは義の固い奴だから、屹度どつかで修験者を探して來るだらう。それについては、馴走の用意をしておけ。それから今日は二百の乾兒に腹一杯馳走を食はせ、酒を鱈腹振舞つてやるが可からうぞ」

「ハイ、今朝來部下を督勵し、馳走の準備やお祭の用意はチャンと整つてをります。どうぞその點だけは御安心下さいませ。さりながらコルトンが歸つて來ないとすれば、折角の馳走も無駄になる道理でございます。もし歸つて來なかつたら、どうぞ致しませうか」

「そんな心配は要らぬ。もし彼が歸つて來なかつたならば、やむを得ず俺が靈前において經文を唱へ、十年忌を済ます考へだ。賣僧坊主の讀經よりも、夫の俺が直接の讀經が却つて故人のためには可いかも知れぬ。日の内は彼も歸るのを憚るだらう。いづれ夜の事だらう」

「今晚の四つ時まで待つ事にいたしませう。それで歸らねば、もはや斷念遊ばして、御大自ら比丘のお勤めをなさいませ。及ばずながら此のバルギーも子供の時ときはウラル教の小僧を勤めてをりました經驗がございますから、經文の素知り走りぐらゐは覺えてをりますから……」

「俺は今日は何だか體が疲れたやうだ。コルトンが歸つて來るまで休息するから、お前は部下の奴によく氣をつけ、監督を怠らないやうにしてくれ」

と言ひのこし、わが寢室なる岩窟を指して身を隠した。

黄昏過ぐるころコルトンは、威風堂々たる一人の修験者や彼の妻か娘か知らね

ども、天女のやうな十七八の美人を伴ひ、二三の部下と共に、肩をそびやかし凱

旋將軍のやうな意氣込みで、悠悠と歸つて來た。バルギーはコルトンの姿を見る

より、あわてて出迎ひ、

「ヤ、兄弟、お手柄お手柄。何とマア立派な比丘をつれて來たものだなア。親分

さまが大變なお待兼ねだ。用意萬端チンと整つてゐるのだ。亡き奥様もさぞお喜

び遊ばすだらう。かういふ事はお前にかぎるワイ」

コルトン「ヤア、サウ褒めてくれちゃ、物が言へなくなる。しかしながら彼方こ

ちらとかけまはり、名僧知識を尋ね廻つたところ、このごろはバラモン軍の襲來

で、比丘も修験者もどつかへ影をかくし、容易に見當らなかつたのだ。そして寺

を有つてゐる坊主を頼んぢや、このかくれ家が世の中へ發覺する虞れがあるもの

だから、風來者の神力の強い、徳の高い比丘をと思つたものだから、今日で三日

搜索にかかり、やうやく今朝、こんな立派な修験者いな天帝の化身様に出會し、

事情を申し上げたところ、快く承諾して下さつたものだから、お伴して来たのだよ」

バルギー「あ、それは好都合だつた。マ、奥へ行つて休んでくれ。……これはこれは天帝の化身様、はじめてお目にかかります。私は當館の番頭を致す者でバルギーと申します。何分かやうな山中でございますから、充分の御待遇も出来ませず、不都合ばかりでございませぬけれど、そこは何とぞ寛大なるお心に見直し、聞直し下さいまして、亡き奥様の御回向を願ひたうございます。失禮ながら御姓名は何と申されますか。主人へ報告の都合もございませぬから承りたいものでございませぬ」

修験者はさも鷹揚にそり身になり、
「ヤ、そなたは當家の番頭バルギー殿でござつたかのう。コルトン殿に其方の才子たる事はよく聞いてゐる。しかしながら當家は普通の家ではあるまい。コルトン殿の巧き口に乗せられ、この山奥へ連れ込まれ、四邊の様子を見れば、どうやら山賊の住家とみえる。そなたは親玉に仕へてゐる小頭であらうがな」

「ハイ、恐れ入ります。いかにも貴方の御明察には感服仕りました。もはや今となつては隠しても駄目でございます。吾々は山賊の小頭を致してをります。大親分はシャカンナと申し、大變な豪傑でございます。失禮ながら、重ねてお名をお聞き申したうございますが……」

「アハハハハ、吾が名を聞いて何と致すか。人間ならば名もある、苗字もある。拙僧こそは天を父となし地を母といたし、天帝の精氣凝つて、茲に人體を現はし、衆生濟度を致す者、たつて吾が名を言はば天帝の化身とでも名づけておかうかい、アツハハハハ」

「いかにも、縦から見ても横から見ても、威嚴の備はつた御神格、天帝の御化身様でございます。アア、奥様は何たる幸福な方だらう。そして其處にゐらつしやる御婦人は奥様でございますか、あるひはお娘子でございますか」

「アハハハハ、妻もなければ娘もない、この御方は天極紫微宮より、萬民濟度のため、このたび御降臨遊ばした棚機姫様でございますぞや」

「いかにも、さう承りますれば、地の上に躋の緒切つた御人とは見えませぬ。い

ふに言はれぬ御氣品の高い、お綺麗なお姿、私は一目拜んで目がくらむやうでございます。サア、どうか、主人が待兼ねてをりますから、奥へお通り下さいませ」
「しからは案内めされ。主人に會うて、とくと天地の道理を聞かしてやらう」
バルギーは……天地の道理を泥棒の親分に聞かされちや大變だ。愛善を以て旨とする神様の化身と、人を脅かし金銭物品を捕る大親分とはそりが合ふまい。コルトンも氣の利かぬ、何故こんな神様の化身などを引ぱつて來やがたらう……と口の中で呟きながら、シャカナナの巢ごもつてゐる立派な岩窟の中へ案内した。

バルギー「旦那様、只今コルトンが修驗者否モツトモツトモツト、尊い尊い偉いお方様をお伴いたして歸つて參りました。此方は人間ぢやないさうです。天帝の御化身、またモ一人の御方は棚機姫様ぢやといふことでございます。どうぞ不都合のないやう、御無禮のないやう、御注意を下さいませ」
シャカナナ「なに、コルトンが、神の化身をつれて來たといふのか、ヤ、それは重疊重疊。まづその神の化身とやらに會うてみやう」

バルただいま「只今ここへお伴ともして参まゐりました。どうか起おきて下ください。失禮しつれいでございますぞ」

シヤカンナはガハとはね起き、居ゐずまゐを直なほし天帝てんていの化身けしんと稱しょうする男をとこの顔かほを熟じゆ視くしながら、ニヤリと打笑うちわらひ、

シヤ「イヨー、能よく化ばけたものだなア。賣僧まいすもそれだけ立派りっぱな衣服いふくをつけ、尊大そんたい

ぶつてをれば、天帝てんていの化身けしんとも、素人しろうとの目めには見みえるだらう。しかし俺おれの目めでは

山子坊主やまこぼうずとより見みえないワ、アハハハハ。オイ、狸坊主たぬきぼうず、汝きさまは一體いつたい何處どこの者ものだい」

修しゆ「これは怪けしからぬ。天來てんらいの救世主きうせいしゆ、天帝てんていの化身けしんたる拙僧せつそうに向むかつて、狸坊主たぬきぼうず

とはあまりの暴言ぼうげんではないか。左様さやうな挨拶あいさつを承うけたまはるべく、はるばるかやうな山奥やまおくへ

は参まゐり申まをさぬ。お氣きに入いらぬとあれば、拙僧せつそうはこのまま歸かへるでござらう」

「アハハハハ、オイ坊主ぼうず、さう怒おこるものぢやないよ。糞尿ふんねうの身みを錦にしきに包つつみ、夜叉やしや

の心こころを菩薩ぼさつの假衣かりぎぬに装まもうて、天下てんか萬民ばんみんを困惑こんわくせしめむとする大野心だいやしんを有いうする者ものが、

此方このほうの一言いちごんに恐おそれ、早逃はやにげ仕度じたくを致いたすとは何なんの事ことだ。オイ坊主ぼうず、汝なんぢは虚勢きよせいを張はつ

て強つよさうに偉えらさうに構かまへてゐるが、心こころの中うちはビクビクものだらう。甘い鳥うまが見みつ

かつたと思つて、コルトンの野郎にマンマと騙し込まれ、来て見れば意外な硬骨爺、さぞ驚いたであらう」

「ますます以て怪しからぬお言葉、拙者は愛善の徳に住し、信眞の光に充ち、智慧證覺の輝き亘る天帝の化身に間違ひござらぬぞや。年をとられて、そなたは眼力がうすくなり、拙僧の神格容貌並びに威光が分らぬのでござらう。チツとばかり手洗を使つて來なさい。寝とぼけ眼で神人を見やうとは、身分不相應でござらうぞ」

「アハハハハ、てもさても面白い狸坊主だ。オイ賣僧、その格好は何だ、肩を四角にしよつて、チツと削りおとしてやらうか。棚機姫様の天降りだとか何とか申して、良家の娘をチヨロまかして來たのだらう。どうだ、俺の眼力が、これでも衰へてをると申すか。いいかげんに我を折り、正體を現はせ」

「アハハハハ、そこまで看破されちゃ、モウ仕方がない。オイ爺、しつかり聞け、俺こそはトルマン國の有名なオーラ山に立てこもり、天帝の化身、天來の救世主と名乗つてゐた玄眞坊の成れの果だ。悪い事にかけては、決して人後に落ちない

積りだ。悪鬼も羅刹も、大蛇も狼も、俺の聲を聞いたら跣で逃げ出すといふ、天下無雙の英雄豪傑だぞ。オイ爺、汝は山賊の張本とはいひながら、何か善からぬ目的を抱へて此の山砦に立籠もり、天下を狙つてゐる曲者であらうがな。いな國盗人であらうがな。爺の計畫は實に天下の壯圖だ。しかしながら惜しい事には、爺には棟梁の眞價がない。いな立派な參謀がない。瘦馬の蕨のやうな代物ばかり、幾ら集めたところで、何の役にも立つものか。こんなヒヨロヒヨロ部下を集めて、そんな大望が成就すると思つてゐるのか、てもさても迂愚の骨頂だな、アハハハ。爺の心根がおいとしいワイ、イツヒヒヒヒ」

「ヤア、こいつア面白い糞坊主だ、話せるワイ。オイ狸、腕まくりでもして、胡坐をかけ。そんな業々しいコケおどしの法服を纏うてゐると、何だか俺も心から打ちとけられない氣がするワ。鬼と蛇との會合だ。今夜はゆつくり語り明かし、幸ひに肝膽相照らすを得ば、どうだ一つ、天下取りの大バクチを打つてみやうぢやないか」

玄眞「ヤア、そいつアしやれてる。ワリとは氣の利いた爺だ。しかし俺を狸坊主

といったが、狸たぬきの稱號しやうがうだけは正まさに返上へんじやうする、受取うけとつてくれ。序ついでに賣僧坊主まいすばうずの尊稱そんしやうも返上へんじやうしておかう、糞坊主くそばうずなどいはれるのは沙汰さたのかぎりだ、無禮ぶれいの極きよくだ。コラ爺おやぢ、これからきめておかないと本當ほんたうの話はなしが出来できないワ。そして爺おやぢの女房にようぼうの十年忌じふねんきだといつて、俺おれをコルトンが引張ひっぱつて來きよつたのだが、お經きやうなんか邪魔臭じゃまくさいやめたら何どうだい。心こころに豺狼さいらうの欲よくを逞たくましうし、鬼おにの劍けんを含ふくんで毒氣どくきを吐はいたところほとけで佛ほとけは喜よろこぶまいぞ

シヤ『ウン、汝きみの言いふ通とほりだ。女房にようぼうの回向ゑかうをしてやつたところで、有難ありがたいと嬉うれしいともいふぢやないし、また汝そなたのやうな賣僧坊主まいすばうずの讀經どきやうを聞きいたところなんで何なんの役やくにも立たつまい。英雄えいゆうと英雄えいゆうが、女房にようぼうの十年忌じふねんきの命日めいにちに會合くわいがふしたのは、女房にようぼうの靈れいが殘のこつてをればさぞ喜よろこぶだらう。これが何なによりの回向ゑかうだ。幸さいはひ今日けふは澤山たくさんの馳走ちそうが拵こしらへてある。坊主鉢巻ばうずはちまきでもして、大おほいに鯨飲馬食げいんばしょくでもやつたらどうだ』

『そら面白おもしろからう、大おほいに吾わが意いを得えてゐる。しかしながら今俺いまおれを賣僧坊主まいすばうずといつたね、どうか其それだけは御免ごめんを蒙かうむりたいものだよ』

『狸坊主たぬきばうず、糞坊主くそばうずの稱號しやうがうは返還へんくわんを受けたが、まだ賣僧坊主まいすばうずの返上へんじやうはなかつたやう

だね。賣僧坊主が厭なら山子坊主といはうか、一層、鞆坊主は何うだ、アツハハ
ハハハハ」

「エー、どこまでも俺を馬鹿にするのか、天帝の化身様を何と心得てゐるのだい
「融の化身か貂の化身か猿の化身か知らぬけれど、ずゐぶん偉い馬力だな。メー
トルもそこまで上げたら天下無敵だらうよ、ウツフフフ」

「オイ爺、お前と俺との仲だから、狸といはうが、汝と言はうが差支へないやう
なものだが、ここで一つ大芝居を打たうと思へば、俺をヤツパリ天帝の化身にし
ておかねば、甘く大望が成功しないよ。その稱號から一つ定めておかうぢやない
か」

「實にシヤカンナ勢ひだのう。よしよし、それでは汝は天帝の化身、玄眞坊だけ
ら頭字と尻の字を取つて、天眞坊様と言つたら何うだ、あまり天眞爛漫な身魂で
もないけれどな。世の中を欺くには格好の名稱だらう」

「ヤ、さすがは山賊の親分だけあつて、いい所へ氣がつくワイ。天眞なる哉天眞
なる哉、只今から天眞坊さまだぞ、いいか」

「そんなら天真坊様、何とぞ何とぞ、天下經綸の爲にやつがれが謀師となり、機略縦横の神策を教へて下さい。そして現界は言ふも更なり、死後の世界までも吾が身の幸福ならむ事を御守護下さいませ。ひとへに懇願し奉ります。歸命頂禮、謹請再拜」

「コリヤコリヤ爺、さう俄かに改まつちや、俺も何だか、ウーン……馬鹿にされてるような氣がしてならないワ。しかし丁寧な言葉を使はれると、からかはれるとは知りながら、あまり氣分の悪くないものだ。言靈は神也、とは實によく言つたものだな、アハハハハ」

「天真坊様、御意に召しましたかな。ヤ、やつがれも無上の光榮でございます。壯健なる御尊顔を拜し、やつがれ身にとり欣喜雀躍の至りに堪へませぬ、アツハハハハ」

「オイ、そのアツハハハハだけをのけてくれないか」

「ハイ承知いたしました。アツハハハハ、ヤ、このアツハハハハは撤回いたしました、アツハハハハ。エー、どこまでもアツハハハハの奴、追撃しやがる。コリヤ決し

て、このシャカナが言つたのぢやない。悪しからず御勘辨を願ひたい。イツヒヒヒ、エー、またイツヒヒヒの奴、尾行し出したな、イツヒヒヒヒ」
(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 松村眞澄録)

第一五章 貂心暴(一七七一七)

一方バルギーは澤山の部下に酒肴および美食を與へ、「今日は奥様の十年祭だから、遠慮會釋もなく呑め喰へ」と命令しおき、コルトンと共にシャカナの居間に細長い干瓢頭をニユツと突き出した。

バルギー「エー親方様、室外にて承れば、今晚は最早讀經はお廢しになるとのこと、……英雄と英雄との會合が何よりの御回向になる……と仰せられたのを承り、部下に用意の酒肴を與へておきました。大變な御機嫌でございますな」
シャカナ「ウーン、今日はどこともなく天氣も好し、氣分の好い日だ。コルト

ン、汝きさまの骨折ほねをりで、俺おれの片腕かたうでを拾ひろつて來きてくれたやうなものだ。ヤ、感謝かんしゃする。

マア一杯いっぱいやれ□

コルトン□「エー、親方おやかたさま様、合點がってんのいかぬ事ことおつしやいますな。何時いつも貴方あなたはコルトンは右みぎの腕うで、バルギーは左ひだりの腕うでとおつしやいましたが、この修驗しゅげん者が片腕かたうでとならば、一體いったいどうなるのでございます。三本さんぼんの腕かひなは根ねつから必要ひつえうないやうに考かんがへます□

シヤ□「ウーン、それで可いいのだ。コルトン、バルギー二人ふたりを合あして左ひだりの腕うでとする、そしてこの天眞坊てんしんぼう殿どのを右みぎの腕うでとするのだ。これから、さう心得こころえたが可よからうぞ□

コルトン□「ハイ、仕方しかたがありません。のうバルギー、それで辛抱しんぼうせうかな□

バル□「ウーン、到頭たうとう二つ一いちだ。ずゐぶん相場さうばが下落げらくしたものでぢやないか。早晚さうばんこんな事ことが突發とつぱつすると思おもうてゐたのだ。汝きさまが仕様しやうもない修驗しゅげん者じゃを引張ひっぱつてくるものだから、こんな破目はめになつたのだ。エー、澤山たくさんの乾兒こぶんに對たいし、俺おれは今日けふから半人はんじん前まへになつたなどと、どうしていはれるものか。狼おほかみのやうな連中れんちゆうを、親分おやぶんの片腕かたうでといひ、威喝ゐかつして、やうやく治めをさてきたのだのに、半片腕はんかたうでとなつちや部下ぶかの統制とつせいも

出来まい。あーあ仕方がないなア[□]

玄^{げん}「ワツハハハハハ、オイ、コルトン、バルギー、何といふ情けない面をするんだいエエン。よく考へてみる、天帝の化身、天來の救世主と、たとへ半分にもせよ、肩を竝べるといふことは汝達にとつては、無上の光榮ぢやないか。何だその不足さうな面は……まるきり梟鳥が夜食に外れたといはうか、せつかく苦心して盗んで來た松魚節を犬に取られた猫のやうに、つまらぬ面付きして半泣きになつてるぢやないか。チツとしつかりせぬかい。そんな腰拔を友達に持ったと思へば、俺も泣きたくなつて來るワイ。ウツフフフ、情けない顔だのう。それでも元の通りになるだらうか。耆婆扁鵲でも頼んで來ねば、快復は到底覺束ないだらう。俺の診察するところに依れば、豫後不良だ。瀕死の重病だ、アハハハハ[□]」

「シャ」オイ、お前達、兄弟喧嘩はみつともないぞ。ともかく俺に免じて仲良うしてくれ。少々の不平や不満は隱忍するが、俺に對する忠義だ。俺の言ふ事なら、何でも聞きますと、いつも言つてるぢやないか。自分の都合の好い事は二つ返詞で早速聞くなり、チツとばかり面白くないといつて、そんな怪體な面をするもの

ぢやない。あまり肝玉きもたまが小さちひうすぎるぢやないか。それよりも玄真殿げんしんどののつらつて来たき棚機姫様たなばたひめさまの柔やはらかいお手々ててでお酌しやくでもしてもらつて、機嫌きげんを直なほしたら可よからうう」

コル「エ、何なんと親方おやかた仰おほせられます。こんな奇麗きれいなお方かたに……酒さけをついでもらつて呑のめ……と仰おつしや有あるのですか、ヤ、有ありがた難たい。さすがは親分おやぶんだ。氣きが利きいてる。のうバルギー、こんな事ことがあるから、親分おやぶんには放はなれられないといふのだ、エへへへ」

バル「オイ、コルトン、みつともないぞ。何なんだ、汝きさまの口くちから光ひかつた絲いとのやうなものものが、下さがつてゐるぢやないか。たぐれ たぐれ」

コル「ナアニ、コリヤ棚機姫様たなばたひめさまが錦にしきの御機みはたをお織おり遊あそばす玉たまの絲いとだ。粘液性ねんえきせいに富とみ、そして光澤くわつたくが鮮あざやかだらう、イツヒヒヒ」

玄げん「オイ、コルトン、バルギー、今日けふから俺おれは天帝てんていの化身けしん、玄真坊げんしんぼうの頭尾とうびを取とつて、天真坊てんしんぼうと改名かimeiしたのだから、今後こんごは天真坊様てんしんぼうさまと呼よんでくれよ。その代かりに、天真爛漫てんしんらんまんたる棚機姫たなばたひめさまの柔やはらかいお手々ててで、お酒さけのお給仕きふじを、今日けふ一席いつせきに限りかぎ許ゆるしてやらう。どうぢや有ありがた難たいか」

コル「さう恩にきせられると、根つから有難くもありません。のうオイ、バルギー、あまり勿體なくて目が潰れると困るから、男らしく平に御免を蒙らうぢやないか」

バル「俺や、何といつても有難いわ。杯に一滴でも可いから注いでもらひたいな。キツとこんな女神様に酒をついでもらふと、その徳にあやかつて出世するよ。そしてこんな美しい女房が持てるかも知れないからな」

コル「ヘン仰有いますワイ。反古の紙撚で編みあげた羅漢のやうな面しやがつて、美人の女房も午莠もあつたものかい。チツと汝の面と相談したら可からうぞ、ウツフフフ」

女「もし、天帝の御化身様、あなたは妾がスガの山に参拜いたしました時、天から降つたと仰有いまして、……お前の母は決して死んでゐない。生きてをるから會はしてやらう……と仰有つたぢやございませぬか。それを誠と信じ、此處までお伴をして参りましたのに……泥棒の酒の酌をせよ……とはお情けないお言葉でございませぬか。そして貴方は最前から聞いてをれば、この世を許る悪魔の玄

眞坊さまとやら、オーラ山に立籠り數多の人間をゴマ化してござつた太いお方のやうです。私はモウ愛想が盡きましたからモウ御免を蒙つて獨りで歸ります。どうぞこれまでの御縁と思ひ諦め下さいませ。あなたの素性が判つた以上は、半時だつて側にをれませぬ。そして皆様に申し上げておきますが、只今、玄眞坊様に…… これまでの御縁と思ひ諦めて下さい…… と言つたのは、決して怪しい關係のある意味ではございませぬ。スガの山から此處まで連れて來られたことを言ふのでございますからね。一樹の影の雨宿り、一河の流れを汲むさへも他生の縁、といひませう。どうか、誤解のないやうに御賢察を願ひます、ホホホホ。アタ阿呆らしい、妾は何といふ馬鹿だらう。こんな賣僧坊主に誘惑されて、自分で自分に愛想がつきて來た。左様なら。皆さま、ゆつくり御酒でもおあがりなさい。とツツと立つて歸らうとする。玄眞坊は毛だらけの猿臂を伸ばし、グツと力を入れて女の首筋を掴み、その場に捻伏せながら、川瀬の亂杭のやうな齒を見せ、大口を開いて、

「アハハハハ、てもさても可い頓馬だなア。この玄眞坊様の舌三寸に操られ、こ

んな岩窟までおびき出されたのは、其方の不覺だ。モウかうなる以上は、なにほど歸らうといつても歸すものか。お前を此處へ連れて來たのは深い企みのある事だ。因果を定めて服従した方が其方の身の爲だらう。てもさても可愛ものだなア」

女「エー、汚らはしい、惡魔の口から可愛い者だなどと、そんな同情的な惡言はやめて下さい。妾は憚りながら、スガの港の百萬長者アリスの娘、ダリヤ姫でございますよ。吾が家へ歸れば何不自由なく安心にゆけるものを、何を苦しんでこんな不便な土地へ参り、イケ好かない賣僧坊主のお前に従ふやうな馬鹿な事は致しませぬから、思ひ切つて、男らしう私を歸らして下さい」

玄「さう片意地を張るものぢやない。人間は浮き沈み七度といつて、いろいろの波風に當らねば人生の眞の幸福は味はへないものだ。なにほど百萬長者の娘でも、一日に一斗の米を食ふわけにもいかず、着物の十枚も二十枚も着るわけにはゆこ

うまい。お前の宅にをつつても此處にをつつても、食ふだけのことは食はしてやる。決して不自由はさせぬ。どうだ、出家に肌を觸るれば、子孫七代繁榮するといふぢやないか。その上、七代前の先祖までが地獄の苦を逃れ極樂淨土へ登るといふ

功德くどくがある。よく祖先そせんや子孫しそんの幸福かうふくを思おもつて、俺おれの言いひ條でうにつくが、アリス家けの爲ためだらうよ。どうだ、合點がつてんがいつたか。目めから鼻はなへ突つき抜ぬけるやうな賢かしこいお前まへの事ことだから、キツと俺おれの言いふ事ことが分わかつただらうなア」

ダリヤ「エー汚けがらしい、ようそんな事ことをおつしやいますな。貴方あなたは山賊さんぞくの親分おやぶんと結託けつたくし、オーラ山さんの焼直やきなほしをやるお考かんがへでせう。そんな危あぶない事ことはおよしなさいませ。今度こんどはお命いのちが亡なくなりますよ」

玄げん「アハハハハ、お前まへのために命いのちの亡なくなるのは本望ほんまうだ。一層いっそうのこと、お前まへのその優やさしい手てで殺ころして欲ほしい。コレ、ダリヤ、これだけ思おもひ込こんだ男をとこ、さう無下むげに振ふり拂はらふものぢやない。男冥加をとこめうがに盡つきるぞよ」

ダリ「エエ何なんなつとおつしやいませ、私わたしは知しりませぬ。この上貴方うへあなたに對たいし言葉ことばをかはしませぬ」

玄げん「エ、さてもさても澁太しぶとい女あまだなア」

コル「アハハハハ、天帝てんていの御化身ごけしんさまも女をんなにかけたら脆もろいものだな。オイ、バルギー、こんなデレ助すけと兄弟分きやうだいぶんになるとは、あまり有難ありがたすぎるぢやないか。親分おやぶんも

親分だ。どこに見込があるのかな」

バル「久米の仙人でさへも、女の白い腿をみて通力を失ひ、天からおちたといふぢやないか。なにほど天帝の御化身だつて、こんな美しいシヤンの面を見りや、墮落するのは當然だよ、ウフフフ」

シヤ「オイ、コルトン、バルギー、酒を注いでくれ。何だか天真様のチンチン喧譁で、座が白けたやうだ。一杯呑んで大いに踊つてくれないか」

コル「ハイ、已に已に胸が踊つてをります。そしてこの天帝の化身さまは、棚機姫さまに餘程「おどつて」をりますね。いな劣つてゐるぢやありませんか」

シヤ「オイ、いらぬ事をいふな。天真坊様の御機嫌を損ねちや大變だぞ」
玄「オイ、シヤカンナ殿、こんな小童武者は相手にしなさるな。男が下るから……」

コル「ヘン男が下るのは玄眞さまぢやないか。俺達の前で、タカが女の一疋や半疋に肱鐵をかまされ、赤恥をかかされ、シヤアつく洒蛙々々然として蛙の面に水、馬耳東風よろしく、といふ鐵面皮だからなア。男のさがること恥づかしい事も、

お判りならないのだらう」

バル「そらさうだとも、恥といふことを知らぬ者に恥づかしいといふ觀念があるものか、人間もここまで徹底すれば、結局、面白いだらう、ウツフフフ」

ダリヤは因果を定めたか、平然として機嫌を直し、シャカンナや玄眞坊に愛嬌をふりまきながら、酌をしてゐる。玄眞坊は心の中にて、

「ヤア占めた、ヤツパリ俺は色男だ。ダリヤの奴、人中だと思つて、ワザとにんな事を吐してゐやがつたのだな。ウンよしよし、ダリヤがその心なら、俺もこれから特別大切にやらう。愛はすべて相對的だから、なにほど此方が愛してやらうと思つても、先方がその愛を受けないとどうする事も出来ない。ヤア願望成就だ」

と思はず知らず小聲で口走つた。ダリヤはこれを聞いて、「ホホホ」と小さく笑ひ、せつせと四人の男に酒注ぎをやつてゐる。玄眞坊は得意然として歌ひ出した。

世の中よなかに 酒さけより大事だいじの物ものはない

酒さけより大事だいじの物ものがある それは何なによと尋たづぬれば

花はなの顔か容ん月げつの眉まゆ 天女てんによのやうなダリヤ姫ひめ

天あまの矛ぬほこ銚こを回くわいてん轉し ウマンマこれの山奥やまおくに

おびき出だしたる吾わが手柄てがら 鬼神きじんもさぞや驚おどろかむ

呑のめよ騒さわげよ一寸いっすん先さきや暗やみよ 暗やみのあと後あとには月つきがで出でる

月つきより花はなより雪ゆきよりも 一層いっそうきれいなこのシヤンは

玄真げんしんさまの宿やどの妻つま 思おもへば思おもへば有あり難がたい

これこれを思おもへば人間にんげんは 完全くわんぜん無む缺けつの大知だいち識しき

甘うまく活くわつ用ようせにやならぬ 知ち恵えと言葉ことばの餘よ徳とくにて

棚機たなばた姫ひめにもまがふなる 姿すがたの優やさしいダリヤさま

タニグク山やまの山麓さんろくに 岩窟いはやを構かまへしシヤカンナの

珍うづの御殿ごてんに現あらはれて 鈴すずのやうなる聲こゑしぼり

愛嬌あいけうたつぷりふり蒔まいて お酌しやくをなさる手際てぎはよさ

姫ひめのたたむき眺ながむれば

象牙細工ざうげさいくのやうな艶つや

爪つめの色いろをば調しらぶれば

瑪瑙めなうのやうな光ひかりかた

こんな美人びじんがまたと世よに

二人ふたりとあらうかあらうまい

ホんに吾わが身みは何なんとして

こんな幸福かうふくが見舞みまふのか

昔むかしの昔むかしの神代かみよから

善ぜんをば助け悪人あくにんを

戒いましめ來きたりし餘德よとくだらう

こんなナイスと添そふからは

ヤツパリ俺おれの魂たましひも

萬更まんざらすてたものでない

昔むかしの神代かみよは天國てんごくの

尊たふとき神かみの御身魂おんみたま

澆季げうきまつぼふ末法まつぽふの世よを憂うれひ

神かみの命令みことを畏かしこみて

この地ちの上うへに降臨かうりんし

衆生しゆじやうさいど濟度さいどを勵はげむべく

命めいをうけたる御魂みたまだらう

ああ惟神かむながらかむながら々々

吾われは神かみなり彼かれも神かみ

神かみと神かみとの睦むつび合あひ

よき日ひよき時とき相あひえらび

シャカンナさまの仲介なかうどで

天あめの御柱みはしらめぐり合あひ

山川さんせん草木さうもく生うみ竝ならべ

尊たふとき神かみの子こ大空おほぞらの

星ほしの數かずほど産うみおとし

いよいよ誠まことの救すくひ主ぬし

生いき神かみ様とあがめられ

この世よに永とほ久はの命いのちをば

保たもちて世よ人びとを救すくひゆく

誠まことの神かみとなつてみやう

シヤカンナさまの企くはだてを

これから夫ふうふ婦ふが相あひたす助たすけ

悪あく人にん輩ばらを平たいらげて

タラハン國こくの災わざはひを

科しな戸どの風かぜに吹ふ拂はらひ

天あつば晴はれ眞まことの生いき神かみと

天てん地ちと共ともに芳はうめい名なを

千ち代よ萬よろづ代よに照てらすべし

ああ惟かむ神な々ながら々かむ

嬉うれしい事ことになつて來きた

これも梵ぼん天てん自じ在ざい天てん

ウラルの神かみや八や百ひゃく萬まん

神かみ々がみ様さまの御おん惠めぐみ

ホほンに嬉うれしい頼たのもしい

ダリヤの姫ひめの玉たまの手てに

首くびをまかれてスヤスヤと

白しら川かは夜よ舟ぶねの旅たびをなし

たちまち天てん國こく淨じやう土つちの空そらへ

一いち夜やの中うちに參まりませう

コルトン バルギー兩人りやうにんよ

こんな所ところを見みせられて

さぞやさぞさぞお心が
もめるであらうが辛抱せよ

やがてお前も時來れば
目鼻のついた女房を

俺が世話してやるほどに
末の末をば楽しんで

キツと悋氣をしてくれな
ダリヤは俺の女房だ

夢にも秋波を送るなよ
ああ惟神々々

皇大神の御前に
天真坊が眞心を

捧げまつつて兩人が
ダリヤの色香に迷はぬやう

お守り下さる其の由を
ひとへに願ひ奉る

ひとへに願ひ奉る

シヤ「アハハハハ、イヤもう偉いところをみせつけられ、この爺も二十年ばかり

氣が若くなつて來た。天真坊殿のお得意、思ふべしだな、アハハハハ」

玄「エへへへへ、なア、ダリヤ、イヒヒヒヒ」

ダリ「……………」

コル「ヘン、馬鹿にしてゐやがる。俺だつて、さう輕蔑したものでぢやないワ。お
つつけ、立派な女房をどつかで掠奪して来て、天真坊さまの御目の前にブラつか
して見せてやるワイ。のうバルギー、さうなとしなくちや、俺達の面が丸潰れだ
からな」
バル「フン、フン」

ダリ「ハルの湖酒の嵐の吹きあれて

醜しこの荒波あらなみ立たちさわぐかな」

シャ「うるはしきダリヤの花は山風に
吹かれて遂に打ち靡なびきける」

玄^{げん} 月^{つき}も日^ひもよりて仕^{つか}ふる吾^{われ}なれば

ダリヤの姫^{ひめ}の慕^{した}ふも宜^{むべ}よ。エへへへへ

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 松村眞澄録)

第一六章 酒^{しゅえん}艶^{えん}の月^{つき}(一七一八)

玄^{げん}眞^{しん}坊^{ぼう}はダリヤ姫^{ひめ}が、にはかにやさしくなり、どうやら自^じ分^{ぶん}にゾツコン惚^ほれて來^きたやうな氣^き分^{ぶん}がしたのでますます得^{とく}意^いとなり、顔^{かほ}の相^{さう}好^{がう}を崩^{くづ}し、身^み知^しらずに左^{ひだり}の手^てから川^{かは}端^{はた}の亂^{らん}杭^{くひ}のやうな齒^はの口^{くち}へ杯^{さかづき}を運^{はこ}んでゐる。

玄^{げん}眞^{しん}「オイ、ダリヤ、さう夫^をばかりに酒^{さけ}をつぐものぢやない。エー、チツと人^{ひと}さまの手^て前^{まへ}もあらうぞや。どうだ、チツと親^{おや}方^{かた}にも注^つがないか」

ダリヤ「ホホホホ、あのマア憎^{にく}たらしいこと仰^{おつ}有^しいますわいのう。何^{なん}ば親^{おや}方^{かた}が

大切だとして、一生身を任した夫を後にする事が出来ますか。妾もチツと酒に酔うてみますから、御無禮な事を申すか知れませぬが、そこは、はしたない女と思召してお許し下さいませや

玄「ウンウンヨシヨシ、お前の白いお手々で爛徳利を握った姿といったら天下無類だよ。エへへへへ。酔うて能うて、うまうて能うて、氣分が冴えて能うて、腹にたまらいで能うて、ヨイヨイヨイの宵の口から、夜の明けるまで、しつぽりと夫婦が酒汲み交はし、浩然の氣を養ふのは、またとない天下の愉快だ。月か雪か花かともいふべき美人のお前に好かれる俺は、何といふ果報者だらう。これこれシヤカンナ殿、羨るうはござらぬか、エー。今夜にかぎり吾が妻の辨才天をして、貴下のお酒の相手を命じますから、いささか拙僧の好意を買つて下さるでせうな。ゲー、アフフフアーア。何とよくまはる酒だらう。まだ一二合より飲んでみない積りだのに」

シヤカンナ「アハハハハ、拙者も大變酩酊してござる。花に嘘つくダリヤ姫様の顔を拜みながら、芳醇な酒をひつかける心持といったら、春の花見よりも秋の月

見、紅葉見、地上一面の銀世界を現じた雪見の宴よりも、なにほど爽快だか知れませぬわい」

玄「いかにも、左様でござらう。これも拙者の貴下に對する好意の賜物でござるぞ。感謝せなくちや、バババ罰が當りますよ」

シャ「イヤ、モウお目出たいところを澤山に拜見いたし、シャカンナも満足いたしました。この光景を眺めて、靈前から亡き女房の靈が喜んでることとせう。南無幽靈頓生菩提……うまい酒を飲む阿彌陀佛だ。噛む阿彌陀佛だ。アツハハハハ」

ダリ「オツホホホホ、親方さまといひ、吾が夫天真坊様といひ、ずるぶん面白

いお方ですこと。妾こんなお方大好きよ。妾どうしてまた氣の軽い、人の好い立派な男さまに添ふ事が出来るのでせう。さうしてシャカンナさまのやうに腮髭の生えた勇ましい、猛々しいお顔立ち、あたいは天地の幸福を一身に集めたやうな嬉しい氣分がいたします。オホホホホ」

シャ「ハハハハ、どうも感心だ。ダリヤ姫さまは交際家だな。外交官にでもしたら、きつと凄腕を現はすだらう。惜しい事には女性だから仕方がないわ」

ダリ「ホホホホ、あのマア親方様の仰有る事わいのう。女だつて外交官になれな
い事はございませぬよ。今日の世の中は女が活躍せなくちや、夫が世に出る事は
出来ないぢやありませんか。今日の小名だとか大名だとかいふ役人さま達は皆奥
さまの外交が巧いから、あそこまでの地位を得たのですよ。女が裏口からソツと
這入つて上役の奥さまに一寸、やさしい事を言ひ、阿諛を振りまき、反物の一つ
でも贈つておくと、直ぐさま、その夫は一月も経たぬ中に役が上がるのですもの。
なにほど男さまが力があるといつても、知恵があるといつても、妻に外交の腕が
なくては駄目ですよ。ネー天真坊様、あなた、どう思ひますか」
玄「ウツフフフ、お前の言ふ通りだ。見かけによらぬ、お前は立派な女だな。
器量ばかりかと思へば仲々の知恵もあり腕もあるやうだ。なほなほ、俺はお前が
慕はしく戀ひしくなつて來たよ。「此の夫にして此の妻あり」とは、よく言つた
ものだ。さすがは天真坊様のお嬢になるだけあつて、何かに氣が利いてゐるわい、
えらいものだな。俺はもう、スツカリお前に惚れたよ。本當によく惚れたよ、工
へへへへ」

「ホホホホ、あのマア天真坊様のおつしやることわいな、まるつきり井戸掘の検査のやうだわ。掘れた掘れた、よう掘れたとおつしやいましたね。これでは何とか賞與金をいただかなくちやなりませんまい」
「いや、ますます惚れた。きつと賞與金を渡してやらう、ウンと張込んでやらうぜ」

「いくら下さいますか。うそ八百圓は御免を蒙りますよ」

「ウン、もつとやる、千圓やるつもりだ」

「エー今日やらう、明日やらう、もう暫くしてからやらう、と遷延また遷延、どこまでもズルズルベツタリ引伸ばして人をつらくる考へでせう。そんな縁起の悪い言靈は御免蒙りませう」

「てもさても、小むつかしいお嬢だな。そんなら、いくら與つたら好いのだ」

「お嬢お嬢と、よう仰有いますな、あまりみつともないぢやありませんか。俵夫、馬丁の女房ぢやあるまいし、天帝の化身天真坊様の奥方ぢやございませんか。もし賞與金を下さるのなら、この奥方に對して、あなたの誠意のあるだけを放り出

して下さい」

「ヤー困つたな、誠意のあるだけと出られちや一寸面喰はざるを得ない。俺の誠意は百億圓でもやりたいのだが、さうは懐が許さない。奥様の初めての御要求だから、力一杯與へたいが、何分經濟界の行詰りでおれの懐もチツとばかり秋風が吹いてゐる。どうか三百圓ぐらゐで今日の所は耐へてもらひたいものだな」

「ホホホホ、天帝の化身天真坊様の奥方が、タツタ三百圓の枕金とは安いものぢやございませぬか。あまり殺生だわ、ネー、シヤカンナの親分様」

シヤ「ハハハハ、そこは夫婦の仲だ。どつと張込んで、負けておきなさい。實際女房に金を出すやうなデレ助は、今日の世の中にはありませんよ。諸物價の極端に騰貴した今日でも、最も安いものは女房ですよ。藁の上から蝶よ花よと育て上げ、中等以上の家庭になれば小學校から女學校、女子大學と澤山な金を投じた上、箆笥だ、長持だ、イヤ三重だ、何だ彼だと、家の棟が歪むほど、拵へして、不調法の女だけど宜しく」といつて、只呉れる世の中だから、何が安いといつても嫁の相場ぐらゐ安いものはない。それだから、ダリヤさま三百圓もらつたら、お

前さまは天下第一の手柄者だ。天真坊が、ぞつこん、首つたけ惚れてゐるのだから大枚三百圓を、おつ放り出さうといふのだよ。アーア、酔うた酔うた。何だか宙に浮いてるやうだ。こんな時に女房があつたら、私も氣樂に膝枕でもして寝るのだけどな。まさか天真坊様の奥方の膝枕を借るわけにもゆかず、エーエ羨ましい事だわい」

ダリ「ホホホホ、いい加減に弄かつておいて下さい。しかし親方さまのお話によりまして、妾は本當に世界一の幸福女だと覺りました。何とマア天真坊様とい方は結構なお方でせう。それを承るとますます可愛うなつて來ましたよ、ネー天真坊様。「古くなつたから、もう要らぬ」などと云つて、破れた靴を棄てるやうな無情な事を爲さつちや、嫌ですよ。……お椀百まで、箸や九十九まで、ともに朱塗の剥げるまで……仲よう添うて下さるでせうね。そして妾なんか、持たないやうにして下さいね。あたい、氣を揉みますからね」

玄「ウンウンヨシヨシ、そんな心配は御無用だ。お前は、まだ俺の誠意が分らぬと見えて先の先まで心配するのだな。可愛いお前を棄てて、どうして外の女に心

を移すことが出来やうか。オイ、ダリヤ、シャカンナさまには濟まないが一つ膝を借してくれないか」

ダリ「サアサア夫が女房の膝にお眠り遊ばすのが、なに遠慮が要りませう。「膝を借してくれ」などとお頼み遊ばす、その水臭いお言葉が、妾、かへつて憎らしいわ」

シャ「ヤア、どうも堪らぬ堪らぬ。天真坊殿、怪しからぬぢやござらぬか」

玄「ヤ、之は失禮でござる。しかしながらは拙者の自由権利を行使するのに、別に遠慮も要りませまい、御免下さいませ、失禮」

と言ひながらダリヤの膝に、胡麻入りの頭を安置した。

ダリ「ホホホホ、酒臭いこと。そしてお頭の毛の香、妾、鼻が歪むやうだわ。オヤ、マア觀世音菩薩が御出現遊ばしてござるわ、ホホホホ」

玄「オイ、ダリヤ、觀世音菩薩は子供が好きで頭に澤山の童子をのせてござるだらう。俺はその觀世音を澤山に頭に頂いてゐるのだから、大抵俺の神徳も解つただらうのう」

「ア、それで天帝の御化身様といふ事が判然いたしましたわ。もし天真坊様、あなたのお頭は、ちやうど胡麻煎りのやうですね」

玄「オイオイ無茶をいふない。胡麻煎りなら持つ處がありさうなものだ。柄がないぢやないか」

「何事も改良の流行る時節ですから、あなたの胡麻煎り頭は柄はありませんが、その代用として鍋のやうに二つの耳がついてゐますよ。この耳をかう、二つ下げて胡麻を煎つたら、素敵でせうね。観音さまの胡麻煎りが出来るでせう、ホホホホ」

コル「これこれダリヤ姫さまとやら、こんな席で、さう意茶ついてもらつちや、われわれどくしんもの吾々獨身者はやりきれぬぢやないですか。チツとは徳義といふ事を考へてもらはなくちや堪まりませぬよ」

ダリ「ホホホホ、何とマア妙なことを承るものですか。山賊の仲間にも徳義などといふ言葉が流行つてゐますか」

コル「無論です。泥棒でなくとも今日の人間を御覽なさい。上から下まで、徳義

だとか、仁義だとか、慈善だとか、博愛だとか、いろいろの雅號を竝べて、愚人の目を晦ませ、耳を痺らせ、ソツと裏の方から甘い汁を吸うてるぢやありませんか。徳義といふ事は泥棒にとつては唯一の武器ですよ、アハハハハ」

「なるほど、さう承れば、いかにも御尤も、なかなか泥棒學も修養が要りますな」

「さうですとも、泥棒が泥棒の看板をうつて、どうして仕事が出来ませう。すぐ目付に捕まつてしまひますよ。表面は善を飾りつつソツと惡事をやるのが當世ですからね」

「ヤア、これは大變な知識を得ました。サアお氣に召しますまいが……一杯注ぎませう。妾の杯でも受けて下さるでせうね」

「ヘイヘイ、受ける段ぢやございませぬ。三杯九杯、百杯でも千杯でも頂きますわ、エヘヘヘヘ」

「これこれコルトンさま、さう杯を近く持つて來ちや旦那さまの顔にかかつたら大變ですよ。もつと、そちらに引きなさいよ。その代り妾の方から力一杯手を伸ばして注ぎますよ」

「イヤ有難う。オットトトト零れます零れます、もう澤山でございます。しかし、これ一杯で澤山といふのぢやありませんよ。また、後をお願いいたしますよ、エへへへ。オイ、バルギー、どうだい、色男といふものは、こんなものだよ。岩窟の女帝様のお手づからお酒を頂戴したのだからな、イヒヒヒヒ。貴様もチツとあやかったら、どうだい。蜷奴、何を熏ぼつてゐやがるのだい」

バル「ヤア、俺や下戸だ。ホンのお交際に席に列なつてるだけだ。酒なんか飲みたくはないわ」

玄眞坊は酔ひ潰れてグタリと前後も知らず眠つてしまつた。ダリヤ姫はソツと膝を外し、木の枕を胡麻煎り頭に支へておき、細い涼しい聲でコルトンに一杯注ぎながら、

ダリ「酒を飲む人心から可愛い
酔うて管捲きやなほ可愛い

サアサアコルトンさま、男らしうお過ごしなさいませ。この通り天真さまもお眠みになりました。どうやら親方さまも眠まれたやうです。妾がこれから貴方を酔ひ潰して上げますわ。バルギーさまはお下戸なり、二人の親分さまはお眠みになつたし、もう、妾とコルトンさまとの天下だわ」

コル「エへへへへ、イヤ有難う、これも酒飲むお蔭だ。龍宮の乙姫さまが運上をとりに来るやうな美しいお姫さまと杯を汲み交すとは、まるで夢のやうだ。ヤアお姫さま、私も男です。いくら下さつても後には退きませぬ。私の飲みぶりを見て下さい」

ダリ「何とマア立派な飲みぶりだこと、本當に男らしいわ。妾こんな方と夫婦になりたいのだけどな。天真坊さまと内約したものだから、もう抜き差しならぬやうになつてしまつたわ」

とわざと小聲にいふ。コルトンは本當に姫が自分に惚れたと思ひ、ますます圖に乗つて豪傑振りを見せ、姫の心を自分の方へ傾けねばおかぬと、あまり好きでもない酒を調子にのつて無性やたらに飲み干した。

ダリ「オホホホ、何と美事なこと。なんぼ召上つても、チツともお酔ひなさらぬのね。そこが男子の値打ですよ。チツとばかりの酒を飲んで倒れるやうなことぢや、まさかの時の役に立ちませぬからね」

コル「それは、さうですとも。一斗杓の隅飲みをやつても、ビクともせぬといふ、有名な酒豪ですからな」

こんな調子にコルトンはダリヤに盛り潰され、目を白黒にして我慢をつづけてゐたが、堪へきれずして其の場に他愛もなく倒れてしまった。バラツク式の小屋には澤山の乾兒どもが菰を敷いて、喧々囂々と囀りながら、へべレケに酔うて、泣く、笑ふ、鐵拳をとばすなどの亂癡氣騒ぎを極端に發揮してゐる。

ダリヤ姫は三人の酔ひ潰れたのを見すまし、バルギーの首に白い腕を捲きつけながら小聲になつて、

「もし、バルギー様、本當に濟まない事を致しましたな。あなたはチツともお酒を召し上らないので本當に行儀が崩れないで、床しうございますわ。妾、あなた

のやうなお方が本當に好きなのよ。あれ御覽なさい。三人とも、酒に酔うて口か

ら泡を吹いたり、涎をくつたり、本當に見られた態ぢやございませぬね。もしバルギーさま、あなたを憎いと思ひますか」

バルギーは意外の感に打たれながら、嬉しさうに涎をくり、兩の手で慌てて手繰つてゐる。そして小聲になつて、

「姫様、いい加減に玩弄にしておいて下さい。俺でも男の端くれですからな。あなたはお酒に酔うてゐらつしやるのでせう」

「ダリ」妾だつて、人間ですもの、お酒を飲めば、チツとは酔ひますよ。しかしながら三人さまのやうに本性を失ふところまで酔つてはゐませぬ。妾の言ふことを、あなたは疑つてゐるのですか、エー憎らしい」

と言ひながらバルギーの頬をギョツと抓つた。

バル「アイタタタ、決して姫様、疑ひませぬよ、眞劍に承ります。どうぞ、その手を放して下さい。顔が歪んでしまひますわ」

「ダリ」本當に妾の言ふことを信じますか」

「全部信じますよ、安心して下さい」

「そんなら、妾の、これだけ思つてる心を汲みとつて下さるでせうね。どうか妾を連れて逃げ出して下さいませぬか。妾の宅はスガの里の百萬長者でございますから、こんな泥棒なんかしてゐるより、よほど氣が利いてゐますよ。そして妾の夫になつて下さいませぬ」

「へへへへへ、願うてもないお頼み、イヤ委細承知しました。今夜のやうな、いい機會は又とありません。誰も彼も酒に酔ひ潰れてゐますから、あなたと私と手に手をとつて一まづ此處を逃げ出させようよ」

ダリヤは嬉しさに、

「それでは吾が夫様、どこまでも、お伴をさして下さいませぬ」

バルギーは俄かに足装束をこしらへ、ダリヤにも草鞋を與へて逃走の準備をさせた。……神ならぬ身の三人は他愛もなく酔ひ倒れてゐる。ダリヤは筆に墨を染ませ、天真坊の額に「ネンネコ」と記し、シャカナの額に「モー、イヌ」と記し、コルトンの額に「サル、カヘル」と落書きし、「ホホホホ」と一笑ひを後に残り、拔道の勝手を知つたバルギーに案内され、首尾よく此の場を逃げ去つてし

まつた。

月夜の寝呆け鳥が四邊の大木の枝に止まつて、「アホウアホウ」と鳴いてゐる。岩窟の中は雷のごとき鼾の音に、ダンダンと夜は更けてゆく。無心の月は二人の逃げ道をニコニコしながら照らしてゐる。

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 北村隆光録)

第一七章 晨の驚愕(一七一九)

十四日の月は空に白けて星影薄く、カアカアと鳴く鳥の聲に東の空は白み初めた。コルトンはふつと目を醒まし四邊を見れば緋縮緬を白い薄絹で包んだやうなダリヤ姫の影もなく、羅漢面の醜男バルギーの姿も見えない。はて不思議だと訝かしみながら、大親分シヤカンナの寝顔を見れば額に【モイヌ】と片假名で記してある。玄眞坊はと振り返つて額を見ればこれまた【ネンネコ】と女の筆蹟で

記してある。コルトンは直ちに玄眞坊を揺り起し、

「もしもし、天真坊様、奥さまが見えなくなりました。どうぞ起きて下さい。：

親分様、大變です早く起きて下さい。大騒動が起りましたよ」

玄「なに、奥が見えなくなつたといふのか、そりや大變だ。おほかたパサパーナ

にでも行つてゐるのぢやないか、よく調べて来い」

コル「それでも親分様の顔には、モーイ又と女の筆蹟で記してあり、あなたのお

顔にはネンネコと書いてありますよ」

玄「ヤ、いかにもシヤカンナの額には「モーイ又」、お前の額にも「サル」、

「カヘル」と書いてある。俺の顔に「ネンネコ」、ハテな。よく寝て居るまに此

處を「サル」、「イ又」、「カヘル」といふ謎だ。これや、大變だ。あいつを

逃がしては、岩窟の一大事だ。秘密の漏洩するおそれがある。オイ、コルトン、

乾兒どもを督勵して後を追つかけてくれ」

コル「ハイ承知いたしました。大親分さま、あなたどう考へられますか」

シヤ「彼奴に逃げられては俺もちつと面喰はざるを得ない。なぜ貴様監督をして

ゐないのだ。【アタ】卑しい、酒を喰ひやがつて同じやうに寝るといふ事があるものか」

コルトンは頭を掻きながら、さも言ひ悪さうに、

「へい、御存じの通り僕、拙者、此方、私、やつがれは酒の嫌いな下戸でござい

ますが、あの綺麗な天真坊の奥様ダリヤ姫様が、コルトンさまコルトンさまと妙

な目をして笑顔を作り桃色の頬邊に笑を湛へ、白い綺麗な象牙細工のやうな、お

手々で……コルトンさま、さア一杯お過ごしなさい……と仰有つて下さつたもの

ですから、へへへへい、つい……その調子に乗つて男振りを見せてやらうと思

て、つい、ぐいぐいとやりました、いや呑みました。さうしたら前後も知らずに

酔ひ潰れて寝てしまつたのです。どうぞ御勘辨、御了簡、御赦免を、どうぞ一重

に二重によろしく願ひ申し上げます。慎んで歎願いたします」

「シャ」エエ、貴様はまだ酔つてゐるのか、何を言ふのだ。一體姫をどうしたのだ」

「コルトン」エーどうも斯うもありません。どうしたか解るやうなら、決して取り逃し

はいたしません。何でもバルギーと手に手を取つて、遁走して逃げ出したかも知

れませぬよ」

玄「チエ、エエさても氣の利かぬ野郎だな。サア早く乾兒どもを叩き起し、四方に手配りをなし、ダリヤ姫を連れて歸つてくれ」

コル「ヘン、えらさうに言うない。お前と俺とは同役ぢやないか。自分の嬢が逐電して飛び出したというて、さう俺にケンケンと言ふものぢやないわ。嬢が探して欲しけれや、……どうか兄弟搜索して探しに行つてくれないか……と、御依頼して頼まないのだ。俺は、この方は、拙者は、僕はお前の命令の言ひつけは聞いて承る權利義務が無いのだ。俺は、僕は、拙者は大親分の命令の言ひつけを聞いて活動して働くのみだ。大親分の命令の言ひつけさへあれば何時何時でも、尻をからげて出發して出かけるのだ。ヘン、偉さうに言ふない。頓馬野郎奴、嬢取らの腰抜け奴、阿呆、馬鹿、頓癡氣野郎」

シャ「オイ、コルトン、貴様は未だ酔が醒めてゐないと見える。しかしながら、かうしては居られまい。早く部下を叩き起し、搜索だ搜索だ」

コル「もし親分、親方、旦那、大頭目、それほど御心配にや及びますまい。親分

の女房の嬢が逃走して逃げたのぢやあるまいし、嬢の所在を搜索して探すのは、天帝の化神、天來の救世主、天真坊さまの双肩の兩肩にふりかかつてゐる責任でせう』

シャ『チヨツ、仕方のない野郎だな。それだから常から酒を喰ふなど言ふのだ。貴様は酒を呑まないといふから、拔擢して重く用ゐてゐたのに何の態だ。ダリヤ姫の手で額にサル、カヘルといふ字を書かれるまで知らずに寝るといふ事があるか、馬鹿』

コル『馬鹿でも何でもよろしい、あんな美人に優しう言うてもらへば、男子たるもの天下の馬鹿にならざるを得ぬぢやありませんか。それよりも親分、お前さまの額部の額口にモ―イ又とダリヤさまの筆蹟で大書して書いてありますぜ。そんな悪戯をしられても分らぬところまで、なぜ親方も熟睡して睡つてゐるのですか。天真さまだつてさうぢやないか。あんな美人のシヤンの奥、女房の嬢を持ちながら心をゆるし安心して脂下つて惚けてゐるものだから、アタ阿呆らしい、馬鹿らしい、ネンネコなどと落書きされ、まるで顔面の顔は幼稚園の生徒の草紙見た

やうなものだ。ちつと確りなさいませ」

玄「工仕方がない、かうなれや自分もグツグツしてはをれまい。サアこれから御大自ら搜索と出かけやう。シャカンナ殿、どうか部下をお貸し下さい」

コル「それや天真さま、御尤もです。肝腎の奥、女房の嬪が韜晦して姿を隠してゐるのに、さう依然とじつとしてはをれますまい。サア私も手傳ひますからダリヤさまの所在を搜索に出かけませう。あの優しい顔を、僕、俺、私だつて今一度拜顔して拜みたいからな、イヒヒヒヒ」

シャカンナは部下の集まつてゐるバラック建の土間に這入つて見ると、何奴も此奴も落花狼藉、徳利を枕にしてゐるもの、杯を嚙んで喰はへて寝てゐるもの、オチコやポホラを丸出しにしてふん延びてゐるもの、全然子供玩具箱をぶち開けたやうな光景である。シャカンナは大喝一聲、やや怒氣を含みながら、

「これや、何奴も此奴も起きぬか。もう夜が明けてゐるぢやないか。この有様は何だ。お館には大變な事が突發してゐるぞ。早く目を醒まして、起きた起きた」

コルトンは言葉の尾について威猛高になり、肩まで四角にして、まだ昨夜の酒

氣が残つて舌の根が自由に運轉し兼ねる奴を無理に使ひながら、

「これや、何奴も此奴も何をしてゐるのか。いつまで睡眠して睡つてゐるのか。」

この態は何だ。早く起床して起きぬか。困つた野郎だな。もはや曉天の夜明けだ

ぞ。昨夜お出でになつた天真坊の天帝の化身の奥、女房の嬪が逃走して逃げ出し、

行方不明に分らなくなつたのだ。サア早く早く用意用意」

この聲に何奴も此奴も、鼈に尻をいかれたやうな、寝てゐる間に鞆丸を抜かれ

たやうな妙な面付をして、アアアアと焔爐のやうな口を開けて猫のやうな手水を

つかつたり、狼狽へて徳利を抱へ外へ飛び出す奴、着物を逆さまに着て狼狽へる

奴、何とも形容し難い光景であつた。

玄眞坊は二百の部下を借り受け四方八方に手配りながら、ダリヤ姫の行方を捜

索すべく顔に血を漲らして出でて行く。後にはシャカンナと、今年十五才になつ

た娘のスパール姫とコルトンの三人であつた。

シャ「オイ、コルトン、過ぎ去つた事は何ほど小言をいつても詮無い事だが、約

まらぬ事を仕出かしたぢやないか。さうして、バルギーはお前どうなつたと思ふ。

あいつ反逆心はんぎやくしんを起おこしてダリヤを何處どこかへ連れ出だし、自分じぶんが天真坊てんしんぼうの女房にようぼうを横取よこどりりする考かんがへであるまいかノー」

「コル、ヤ、親方様おやかたさま、決して御心配ごしんぱいの御心遣おこころづかひは要いりませぬ。何なにほどナイスの美人びじんのシャンのダリヤ姫ひめだつて、あんな「ヒヨツトコ」面づらには戀慕れんぼして惚ほれる氣遣きづかひはありませぬよ。また假かりに、よしんばバルギーが戀慕れんぼして惚ほれたところで、ダリヤ姫ひめは諾うんと首くびを縦たてに振ふつて承諾しょうたくして靡なびく氣遣きづかひはありませぬ。必かならずきつと要えうするに約つまり即すなはちダリヤ姫ひめに甘うまく誑だまされ、荷物にもつでも持もたされて隨行ずいかうしてお伴ともに行ゆきよつたのですよ。何なんだか彼女あいつの視線しせんの目遣めつかひが可怪をかしいと思おもつてをりました」

「オイ、もう斯かうなつちや此處ここに居をることは出で来きない。まさかの時ときの用意よういとしてあの山奥やまおくに建たておいたあの庵いほりに行いつて匿かくれやうではないか。天真坊てんしんぼうだつてあの女をんなの居ゐないかぎり、此處ここへ歸かへつて來くる氣遣きづかひはない。さうすりや、よしやダリヤが言いはないだつても天真坊てんしんぼうが言いふに定きまつてゐる。さうして澤山たくさんの乾兒こぶんが居ゐても碌ろくな奴やつは一人ひとりも無ない。中なかにも少すこし「まし」なのは貴様きさまとバルギーぐらゐの者ものだが、それれでさへ、こんな「へま」をやるのだから、俺おれの大望たいまうも到底たうてい成功せいこうしない。グツグ

ヅしてゐるとカラピン王の耳に入り、俺の命まで取りに来るかも知れない。サアこのバラツク式の建物に火をつけて焼拂ひ、貴様と俺とこの娘の三人、三里山奥の隠家に行かう」

「ハイ、大變な事になつたものですな。しかし天真坊は天真坊として自由行動の勝手なやり方をするとしたところで、彼奴は放任して打つちやつておけばよろしいが、二百人の部下の手下どもはたちまち路頭に迷ふぢやありませんか。親分は部下の生命の命を守つてやる決心のお心はないのですか」

「もはや今日となつては可哀さうでも仕方がない。第一俺の生命が危ふくなる。サア貴様と俺と娘と三人この館に火をつけて此處を逃げ出さう。さうすれば、たとへカラピン王が澤山の兵を持つて攻めて來ても拍子ぬけがして、「ヤア山賊は何處かへ逃げた」ぐらゐで歸るだらう。乾兒の奴等も歸つて見たところで住家が無ければ、自然に何處かへ散るだらう」

「親分、たとへ家屋の家は焼棄して焼いてしまつたところで、岩窟の岩窟が残つてゐる以上は、また乾兒の奴等が歸つて來て住居して住むかも知れませぬ。岩屋

の岩窟を破壊して叩き破るわけにもゆきません。焼棄して焼くわけにもゆきません。この點は如何してどうしたらよいのでせう」

「後は野となれ山となれだ。サア一時も早く、吾が身が危ない、此處を立ち去らう。オイ、スバール、お父さまは、いつもの隠れ家へ轉宅するから、お前もその用意をせい」

スバール「お父さま、妾いつまでも此處に居りたいのよ。山水の景色が好いからねえ」

シャ「ウン」

コル「これこれお嬢様、千騎一騎のこの場合、そんな緩慢な緩りした事を言ってもらつちや誠に困難して困りますよ。一時も早くこの場を出立して立ち出でる事にしませう。向かふの朝倉谷に往けば、此處よりも幾層倍勝して風景の景色がよろしい。サア参りませう」

スバ「お父さま、どうしても行かなくちやならないの。私もう暫く此處に居りたいのだけどなア。もう十日もすればダリヤの花が咲くのだもの。あの美しいダリ

ヤの花の唇に吸ひついて遊びたいのよ」

「工お嬢さま、何といふ氣樂な事をおつしやるのだ。グツグツしてゐると吾々三人の生命の命が無くなつてしまひますがな」

「何故それ程、お父さまやお前は怖がるの、二百人の乾兒があるぢやないか。何が來たつて是だけ居れば防げるぢやないか。あんな山奥の小さい庵へ行つて住むのは嫌だわ」

「家が小さうて嫌なら、大きな家屋の家を、僕、私、拙者が建築して建てて上げますわな」

「そんなら、一寸まあお父さまと一緒に往つて見ませう。嫌になつたら又ここへ歸つて來ますよ」

「ヤア、しめた。親分さま、もう大丈夫です。お嬢さまの娘さまが行くと仰有いました。どうぞ歡喜して喜んで下さい」

これより手近の必需品を取りまとめ、コルトンは大風呂敷に包んで背に負ひながら、主従三人嶮しき谷川の邊を辿つて、三里山奥の茅屋に隠れる事となつた。

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 加藤明子録)

第四篇 山色連天さんしよくれんてん

第一八章 月下の露げつか つゆ (一七二〇)

シヤカンナはタニグクの山の麓やま ふもとなる岩窟いはやに附屬ふぞくせる建物たてものを全部ぜんぶ焼き拂はらひ、スバー
ル姫ひめとコルトンを従したがへ、朝倉谷あさくらだにへ隠かくれ、世よを忍しのんで一ヶ月いっかげつばかりも淋さびしき月日つきひを
送おくつた。十五夜じふごやの満月まんげつは頭上づじやう高く輝かがやいてゐる。シヤカンナおよびスバー
ル姫ひめは室むろ内に横よこたはり、早くはやも鼾いびきの聲こゑさへ屋外おくわいに聞きこえてゐる。コルトンは氣きが立たつて眠ねむ
られず、谷川たにがはの流れながに月の影かげが映うつつて、面白おもしろく碎くだけて流ながる様さまを見みて興きように入いつて

みた。そこへ上の方の山から、小柴をペキペキ踏み折りながら、うら若い二人の貴公子が降つて来た。

貴公子「エ、ちよつと物をお尋ね申しますが、ここは何といふ處でございますか」
コルトン「ここは山奥だ。そして谷川の畔だ。昔から人の來た事のない場所だから、名前などあるものか。マア、「ココ」と名をつけておけば可いのだ。一體今ごろにウロウロと、この山奥に何してゐるのだ。そしてお前は何といふ名だ。聞かしてくれ」

「ハイ私はアリナと申します。モ一人の方は私の御主人でございますが、つい山野の風光に憧れて、知らず識らずに斯様な處へ迷ひ込み、この山の上で因果腰をきめて野宿をせうと思つてをりましたところ、猛獸の聲は切りに聞こえて来る。コリヤかうしては居られないと谷底を見れば、木の間に幽かな火影がまたたいてゐたので、これは確かに人の住居してゐる家だらう。何はともあれ、あの火を目當に辿りついて、一夜の宿を願ひたいと、主従二人が茨にひつかかり足を傷づけ、あるひは迂り轉げなどしてヤツと此所まで参りました。どうか一夜の宿をお願ひ

申したうございます」

「ここは杣小屋だから、俺の外誰もゐないのだ。そして一夜の宿を宿泊さして泊めてくれと言ったところで、食物の食ふ物もなし、夜具の蒲團もなし、どうする事も出来やしない。こんな穢苦しい家で厄介になるよりも三里ばかり、ここを東へ向かつて行かつしやい。其處には大きな岩窟があるといふ事だ。平に眞平御免蒙りますワ」

「左様ではございませうなれど、今日で三日三夜、碌に食物もとらず、身體繩のごとく疲れ果て、命カラガラ、このあかり目當に參つたのでございます。ここで貴方に斷わられては、大變に御主人が力を落とされます。私だつて、もはや一歩も進む勇氣はございませぬ。どうか杣小屋の中で一夜お泊め下さいませぬか」

「エー、しつこい男だな。厭といったら、どこまでも厭だ。お前のやうな天狗の狗寶を泊めてたまるものか。サアサアとつとと歸宅して歸つて下さい。茅屋なれど即ち要するに、取も直さず、この家屋の家は、俺の拙者の僕の住居の住ひ場所だ」

太子は「ハハハハ」と力なき聲に笑ふ。

コル「オイ天狗の狗賓、何が可笑しうございますか。別に面白い生活の暮しでもなし、杣の木挽のただ一人、獨りで、營々と稼いでをるのですよ。アタイやらしい笑ひをして下さるな。エー、一月前から碌なこた、チツとも出来やしないワ。玄眞坊がやつて来やがつて、それからあんな悲惨なみじめな態になり、ヤツと此處まで遁走して逃げて来て、厭世して隠れてをれば、お山の天狗の狗賓がソロソロかぎつけて、一夜の一夜を、宿泊させて泊めてくれなんて、たまつたものぢやありません。玄眞坊を一夜泊めたばかりで、あんな大騒動の大騒ぎが起つたのだ。モウ客人の人を泊めるのはコリコリだ。どうか、外をお尋ね下さい。私は僕は拙者はこれから就寝して寝ます。左様なら……」

と言ふより早く杣小屋の中に姿をかくし、中から突つ張をかうてしまつた。二人は最早歩行する勇氣もなく、空を仰いで月の面を眺めながら、述懐を歌つてゐる。

太子たいし 『大空おほぞらに三五さんごの月つきは輝かがやけど

心こころの空そらは雲くもに包つつまる

いかにせむ火影ほかげ頼たのみて來きてみれば

げにもすげなきそま杣めの目めはぢき』

アリナ 『アわれは太子たいしの君きみと諸もろとも共に

この山奥やまおくに亡ほろびむとぞする

腹はらはすき足あしはだるみて力ちからなく

月つきの影かげのみ力ちからとぞ思おもふ

この宿やどの主あぬじに心こころあるならば

今宵こよひは安やすく息いきつがむものを』

太子たいし 『アア、アリナ、私も張詰はりつめた勇氣ゆうきが、どこへやら消え失うせ、ガツカリとし

て来た。世の中は何といふ無情なものだらうな」

アリ「ご尤もでございます。今の世の中はおちぶれ者と見れば、足げにして通るといふ極悪世界でございますから、人情うすきこと紙のごとく、到底この家にも、泊めてはくれませんまい。しかしながら最早一步も歩めませぬから、谷川の流れを眺めながら月下に眠りませう」

屋内にはシャカナの聲、

シャ「オイ、コルトン、汝、今外で、何獨り言を言つてみたのだ」

コルトン「へー、別に獨り言言つてみたのぢやございませぬ。天狗の狗寶が二人もやつて來ましてアダをするし、宿泊さして泊めてくれの、何のと言ふものですから、極力力限り拒否して拒んでゐたのです。なかなか執拗なしぶとい、代物でございましたよ」

「それでも、汝、人間の聲で物を言つてみたぢやないか。よもや天狗ぢやあるまい。とも角、泊めてやつたらどうだ」

「メメめつさうな、あんな怪物の化物を屋内の家の中へ入れてたまりますか。恐

怖心が恐ろしがつて、手足が戦慄して慄ひます。どうか、そんな事を言はないやうにして下さい」

「待て待て、俺が一遍調べて来る。汝では譯が分らぬ」

と言ひながら、粗末な柴の戸を押しあけ、屋外に出て見れば、雪を欺く白面の青年が二人、顔面を月に照らされながら早くも横たはつてゐる。

「シャ、いづれの方かは知らぬが、そんな所に寝てゐては、夜露がかかつて、身體の衛生によくない。むさ苦しい茅屋なれど、おかまひなくば、お泊りなさつたら何うです」

この聲に二人は天使の救ひの御聲のごとく打ち喜び、やをら身を起し、丁寧に辭儀をしながら、力なき聲にて、

「アリ、私はタラハン城に住んでゐる若者でございますが、つい山野の風光に慄れ、次から次へと景勝を探る内、道に踏み迷うて今日で三日が間パンも食はず、この山中に迷ひ込み、やうやく幽かな火光を認めて、ここまで辿りつ来ましたのでございませう。當家の若い方にいろとお願ひいたしましたけれど、手厳しく拒絶

されましたので、主従が因果腰をすゑ、お庭先で休まして頂いてをつたところで
「ございます」

「シャ」なに、タラハン市の住人とな。フーン、しかしながらともかく泊つて下さい。
い。お腹がすいてをれば、パンの一片や二片はありますから、それを進ませう。
茶も幸ひあつう沸いてをります」

二人の喜びは例ふるに物なく、その親切を簡単に感謝しながら、主の後に跟いて
極めて小さき茅屋の入口を潜り、ヤツと安心して木であんだ床の上に萱の敷い
てある座敷へ腰を打ちかけ、ホツと一息をついた。

「シャ」オイ、スバル、この二人の方にパンをあげてくれ。そして松明の火を明
くしてあげてくれ。お茶も汲むのだよ」

スバルは「ハイ」と言ひながら、恥づかしげにパンを取り出し、麗しい玉のや
うな掌にのせて、二人の前に突き出した。二人は、「ハイ有難う」といふより早
く、餓鬼のごとくに頬ばつてしまった。スバルは茶を汲んで前におきながら、
柴で編んだ衝立の蔭にかくれてしまった。

シヤ「お前さまは、最前タラハン市の住人だと言つたが、このごろの人氣はどんな物ですか」

アリ「ハイ、どうも不景氣風が吹きまくつて、經濟界はほとんど行詰りです。それに金價が三割も暴騰したものですから、紙幣が下落し、經濟界の混亂といったら、實にみじめなものです。大きな商店がバタバタと次から次へ倒れて行く有様です。そこへバラモン軍が近い内に攻めて來るといふ噂で人心恟々として、上を下への大混雜でございます」

「この方は女のやうな綺麗な、氣品の高い御人だが、やはり、タラハン市のお生れですか」

「ハイ、私の主人でございます」

「お名は何と言ふかな」

「へーエ、この方はアリナさまと申します。そして私の名はバイタと申します」

「ハハア、アリナさまにバイタさま。何と良い名ですと、時にカラピン王様は壯健にしてゐられますか」

「あなたはこんな山奥やまおくに居をつて、カラピン王様わうさまのことを御存ごぞんじでございませうか」
「何なにほど山奥やまおくといつても、此所ここはヤツパリ、カラピン王様わうさまの御領分ごりやうぶんだ。その領分りやうぶんに住すんである人間にんげんとして、王様わうさまの御名おんなを知らいでなるものか、八八八八」
「何なんと、王わうの威勢あせいといふものは偉えらいものでございませう。こんな所ところまで御威勢ごあせいが届とどいてゐるとは夢ゆめにも存ぞんじませなんだ。今晚こんばん此處ここで御厄介ごやくかいになるのも、カラピン王様わうさまの御餘光ごよくわうに浴よくしたやうなものでございませうな」
「さうですとも、「普天ふてんの下率土もとそつどの濱ひん、皆王身王土みなわうしんわうどにあらざるなし」と言いふぢやありませぬか」

「王様わうさまの御布令ごふれいが、かやうな山奥やまおくまで、とどいてゐるのでございませうか」
「ナア二、王様わうさまの御布令ごふれいが届とどかなくつても、王様わうさまある事ことを心こころにとめてをりさへすればそれで天下てんかは太平たいへいだ。かやうな猛獸まうじゅうの吠ほえ猛たける山奥やまおくに淋さびしい生活せいくわつをしてをつても、心強こころひやううその日ひを送おくつて行くのは、タラハン城じやうに王様わうさまがゐられるといふ事ことを力ちからにしてゐるから住すんで行ゆけるのですよ。時ときに左守さもりのガンヂー殿どのや、右守うもりのサクレンス殿どのは達者たつしやにしてゐられますか」

「よくマア詳しいことを御承知でございますな。私は實のところ、左守の倅でございます」

シャカンナは打ち驚いたやうな面して、聲を震はせながら、

「ナアニ、お前があ左守の倅であつたか。フーム、心汚き左守にも似ず、お前の容貌といひ、聲の色といひ、實に見上げたものだ。ちやうど鳶が鷹を生んだやうなものだなア。そしてお前の御主人といった以上は、このお方はカラピン王の太子様におはさぬか。どこともなしに氣品の高い、お姿だから……」

「イヤ、もうかうなれば、何もかも申し上げます。お察しの通りでございます。

そして貴方は何方でございますか」

「十年前には、カラピン王様の左守と仕へてゐた、私はシャカンナだ。王妃の君が悪靈に誑惑され、日々残酷な行爲を遊ばされ、國民の怨府となり、すでにクーデターまで起らむとした。その危機を救はむために、女房と共に、死を冒して直諫し奉つたところ、カラピン王様は大變に御立腹遊ばし、大刀を引き抜いて、この左守を切りすてむと遊ばした刹那、わが女房が身代りとなつて、その場に命を

おとし、私は城の裏門より逃げ出し、やうやう六才になつた娘を背に負うて、この山に逃げ込んで、時の至るを待つてゐたのだ。お前の側で、こんなことは言ひたくないが、お前の父のガンヂーは右守となつて仕へてゐたが、殘虐非道の行爲を遊ばす王妃様をおだて上げ、ますます國難を招き、ほとんど收拾すべからざる、國家は破目に陥つたのだ。今は私の後を襲うて左守の司となり、國民に道を布いて、大變な人氣ださうだ。それを聞いて自分も、少しばかり國家のために安心はしてゐるが、何とかしてガンヂーを戒め、モウ一層、善い人間になつて、國政をとらせたいと、そればかりを念じてゐるのだ」

「承れば承るほど、恐れ入つた事ばかり、驚きに堪へませぬ。あなたのお説の通り、私の父はあまり心の好い人だとは存じませぬ。しかしながら大王様の御親任厚きがために、やうやく澤山の役人どもを統一し、國家もあまり大きな騷動もなく、細々と治まつてをります。しかしながら何時事變が突發するか分らないといつて、若君様と私とが始終歎いてゐるのでございます」

「若君様、ムサ苦しい所でございますけれど、どうかおくつろぎ下さいませ。誠

に失禮をいたしました」

太子「イヤ餘は結構だ。どうぞ心配をしてくれな」

シャ「ハイ、有難うございます。時にアリナさま、お前は親にも似ず、誠忠無比の青年だ。どうか、私はこのやうに世捨人になり、もはや國政に參與することは出来ないから、お前は若君様を助けて、立派な政治をやつて下さい」

アリ「いろいろと御親切なお言葉、さぞ私の父は貴方に御迷惑をかけたでございませうが、そのお怒りもなく、私に對しかやうな親切な言葉をおかけ下さいませう、公平無私な貴方の赤心、實に感謝にたへませぬ」

シャ「夜も餘程更けたやうでもあり、若君様もお疲れだらうから、今晚はゆつくり泊つて頂いて、明日ゆるゆるとお話を聞かして頂きませう。サア、若君様、お寢み下さいませ」

太「アアお前が忠臣の譽を今に残してゐる左守のシャカンナであつたか。天は未だタラハン國を捨てさせ玉はぬと見える。どうぞや。お前、モウ一度思ひ直して、今や亡びむとするタラハン國を救うてくれる氣はないか」

シャ「御勿體ない、太子の君のお言葉。かやうな老骨、最早お閒には合ひませぬ。それよりもこのアリナを重く用ひ遊ばして、王家の基礎を固め、國家を泰山の安きにおいて下さいませ。それが、せめて私の老後の頼みでございます」

太「アアともかく、あまりくたぶれたから寝ましてもらはう。シャカンナ、許せよ」

と言ひながら、ゴロリと横になり、早くも雷のごとき鼾をかいてゐる。コルトンはこの話を聞いて吃驚し、床の下にもぐり込んで蜘蛛の巣だらけになつて、一眠りも得せず夜をあかしてしまつた。十個の鼻口より出入する空氣の音は、あなかも鍛冶師の鞞のやうに聞こえてゐた。春の夜は容赦もなく更けてゆく。大空の月は満面に笑を湛へて、この不思議なる主従の數奇きはまる邂逅を清く照らしてゐる。

(大正一三・一二・三 新一二・二八 於祥雲閣 松村眞澄録)

第一九章 繪姿（一七二一）

十八年のお慈悲の牢をやうやく脱出し、寵臣のアリナと共に、心ゆくまで山野の清遊を試み、その嬉しさと愉快さに歸路を忘れ、一切を忘却し、心の駒に打ちまかせて、思はぬ深山の奥へ迷ひこんだタラハン城の太子も、また太子の意を迎へて山野に案内し、方向に迷ひ、歸路を尋ねて連山重疊たる谷川を瞰下す山腹に月光を浴びながら、ライオンの聲に心膽を奪はれ、たちまち恐怖心にかられ、顔色青ざめ、生きたる心地もなく、體内の地震を勃發したる左守の倅アリナも、山麓にやうやく一炷の火光を認めて死線に立つて救ひの神に出會したるがごとく、にはかに勇氣百倍し、太子を導いて小柴を分け、やうやく一つの隠れ家に辿りつき、主人の情けに仍つて、形ばかりの萱葺きの掘込建に一夜の宿泊を許され、いろいろと物語の末、十年以前カラピン王に仕へたる重臣なりし事を悟り、あるひは喜びあるひは驚きつつも、ヤツと心が落着き、綿のごとく勞れ切つたる身を横たへて、ここに露の滴るとき美青年は前後も知らず露の宿りについた。アアこ

の主従二青年は、その夜は如何なる夢路を辿つたであらうか。數奇な運命に見舞はれて、喜怒哀樂の風に翻弄され、天人たちまち地に降り、土中に潛む地蟲は羽翼を生じて、喬木の枝に春を歌ふ人生の七變化。口述者も筆者も讀者も興味をもつて、主従二人が夢の成行を聞かむと欲するところである。

雲上高く翼をうつつ鳳凰も、霞の天海を浮游する丹頂の鶴も、土中に潛む蟲けらも、戀には何の區別もなく、情けの淵に七度八度、浮沈するは世のならひ、花にも月にも譬へ難きタラハン城内の太子と、背は少しく低く、色は少しく赤みを帯びたれど、その容貌は見まがふばかり酷似せる左守の倅アリナが、死力を盡しての珍しきロマンス。大正甲子の霜月の空に、祥雲閣に例のごとく横臥しながら、よく語り、よく寫し、山色雲に連なる黎明の空を眺めつつ、言靈車に萬年筆の機關銃を備へつけながら、出口、松村、北村、加藤の四魂揃うて、丹波名物の霧の海原分けてゆく。

シャカナナは珍しき客、ただ空の月日を友となし、松籟を世の音づれとして、最愛の娘と共に、一切の計畫を放擲し、年來の志望を斷念して、娘を力に深山の

奥に打ちはてむものと覺悟のをりから、三代相恩の主君の寵子が、吾が身に辛く當りし左守の倅と共に夢の庵を訪はれ、かつ喜びかつ驚き、太子に會うた嬉しさに、十年以前の左守ガンヂーが吾が身に對せし冷酷なる振舞ひに出でしを酬むむとせし敵愾心も、忠義のためにスラリと忘れ、思ひもよらぬ珍客と、夜の目も碌に眠り得ず、朝まだき篝火を要する刻限より、スパール姫と共に、まめまめしく朝餉の用意に取りかかり、せめては舊恩の萬分一に報むむと、貧弱なる材料をもつて力限りの馳走を、僕のコルトンにも言ひつけず、自ら調理して獻らむものと、心の限りを盡し、朝餉の調理に全力を盡してゐた。コルトンは今朝に限つて、炊事の業を免ぜられ、木の枝で作つた箒でもつて、茅屋のまはりや庭先を掃き清め、あたかも氏神の祭禮の前日か、大晦日の田舎の庭先のやうに、掃目正しく、破れ草鞋のごとくに隅から隅まで掃きちぎつてゐる。

コルトン「あーあ、何といふ不思議なことが出來たのだらう。一ヶ月以前に玄眞坊とか天真坊とかいふ糞蛸坊主が、女神様のやうな女と共に、タニグク山の岩窟に乗り込んで來て、大酒を喰ひ、酔ひつぶれたその隙に、俺に優しい言葉をかけ、

チツとばかり秋波を送つてくれた美人のナイスのシャンに、イ又だの、サルだの、カヘルだの、ネンネコだのと、仕様もない悪戯をされ、すつぱぬきを喰はされた時の三人の面付が、今も俺の目にや有り有りと残つてゐる。あの桃色縮緬を白い薄絹を通して眺めるやうな美人の顔色、白玉で拵へたやうな細い麗しい肌理のこまかい美人の手から、鹿の巻筆ではないが、棕櫚の毛で造つた手製の筆に、墨をすらせ、俺の額にサル、カヘルと記念の文字を残して歸りよつた。俺はいつまでもこの記念は吾が額に止まれかし、一層のこと肉に食ひ入つて、美人が情けの筆の跡、たとへサルといはれやうが、カヘルと言はれやうが、そんなことに頓着はない。どうぞ何時までも消えずにあれと祈つた甲斐もなく、いつの間にやら、スツカリと足がはへて、サル、カヘルといふつれなき羽目に會はされ、有情男子の俺もいささか罪を造つたが、日を重ねると共に、煩惱の犬はどつかへ逃げ失せ、本心に立ちカヘルやうになつたところだ。それに又また同じ十五夜に、天女にも擬ふやうなる白面郎が、二人も揃うてこの門口へ降つて來た時の驚きといったら、まだ生れてから經驗をつんだ事がない。あまりの吃驚で、天狗の孫ではあるまい

かと、いろいろ言葉をかまへ、歸らしめむと、死力を盡して拒んでみた。それが何ぞや、親分御大の舊主人だとか、タラハン城の太子様だとか、左守の倅だとか、聞くに及んで二度吃驚、三度吃驚、五臟六腑はデングリ返り、何とはなく恐ろしさ勿體なさに、昨夜は床の上に休むのも勿體なくなり、土間に四這ひとなつて、イ又、カヘル境遇に甘んじ、ヤツと一夜を明かし、御大に小言を頂戴するかと案じてゐたが、世の中は杏よりも桃が安いかいつて、幸ひに御大の光る目玉の一睨みも、秋霜烈日のごとき言靈も、どうやら斯うやら赦されたらしい。しかしながら内のお嬢さまも、子供とはいひ、モウ十五の春を迎へてゐらつしやるのだ。そして夕べの話によれば、御大は十年以前まで、カラピン王の左守の司だつたやうだ。さすがお嬢さまも由緒ある家の生れとて、見れば見るほど氣品の高い、そして絶世の美人だ。太子と嬢さまとの中に、何だか妙な経緯が出来はせまいかな、どうも怪しく思はれる。法界恪氣ぢやなけれども、何だか腹立たしいような、可怪しい氣分がして來だしたワイ。俺も今まで、御大の氣に入り、何とかして養子にならうと、お嬢さまの成人を待つてゐたのだが、最早今日となつては、どうや

ら怪しくなつて来た。俺の日頃の忠勤振りも、嬢さまに對する親切も、サツパリ峰の薄雲と消え去りさうだ。百日の説法屁一つの効果も上らないのか、エー残念至極だ。雨の晨風の夕べ、お嬢さまお嬢さまと言つて、その成人を待ち、夕ニグク山の名花を手折らむものと楽しみ暮したこともサツパリ夢となつたか。アア残念や腹立たしや、何ほど俺が伶俐でも、一方は王の太子、しかも舊御主人、その上玉のやうな美青年と來てるから、たうてい俺の敵ではない。地位名望からいつても、最早だめだ。エー、テレくさい、こんな所に何を苦しんで、不便な生活を續ける必要があるか。手に持つ筈さへも自然に手がだるくなつて放れさうだ。エー、小鳥の聲までが、俺を馬鹿にしてるやうに、今朝は聞こえて來る。微風をうけて騒いでゐる木の葉も、今朝は俺の失戀を嘲笑つてゐるやうにみえる。潺湲たる谷川の流れの音も、昨日までは天女の音樂のごとく楽しく聞こえたが、今朝は何だか亡國の哀音に聞こえて來た。希望にみちた俺の平生に比べて、失望落膽の淵におちこんだ今日の俺は、最早天も地も、大親分も、可憐なお嬢さまも、俺を見すてたやうな氣がする。エー馬鹿らしい。今の間に密林に姿を隠し、どつか

の空へ隨德寺をきめ込んでやらう。オオさうぢや さうぢや、エエけつたいの惡い」

と呟きながら、滿腔の不平を箒に轉じ、「エーこん畜生ツ」といひながら、谷川めがけて力をこめて投げやり、黒い尻をひきまくり、二つ三つ打ち叩きながら、體を「く」の字に曲げ、腮を前の方に突き出し、田螺のやうな齒を出して、二三回「イン イン イン」としやくりながら、早くも此の場より姿を隠した。

太陽の高く頭上に輝く頃、太子、アリナの主従はやうやく目を醒ました。

太子「アア爺、お蔭で昨夜は氣樂に寝ましてもらつた。どうやらこれで元氣が回復し、人間心地になつたやうだ。白湯を一杯くれないか」

シャカンナ「若君様、最早お目醒でございますか。どうぞゆつくりとお寢み下さいませ」

太子「や、もうこれで充分だ」

アリナ「昨夜はお蔭で、太子様のお招伴をいたし、氣樂に寝まして頂きました。この御恩はどこまでも忘れませぬ」

シャ「オイ、コルトン、お客様にお湯を汲んで来い。コルトンは何をしてゐる」
幾度呼んでもコルトンの返詞がせぬ。干瓢頭も見せない。そこへスバル姫が
やや小綺麗な衣服を着替へ、髪のを解き上げ、花のやうな麗しい顔に笑を含
んで、

スバル「若君様、お早うございます。御家來のお方様、夜前は寝られましたか。
ご存じの通りの茅屋でございますから、嘸さぞお二人様とも、お寝みにくからう
かと、案じ参らせてをりました。サアどうか澁茶をあがつて下さいませ」
と言ひながら、手元をふるはせ、やや顔をそむけ氣味に、恭しく太子に茶を汲ん
でささげた。太子は……床しき者よ、麗しいものよ……と思ひながら、靜かに手
を伸べて、スバルが差出す茶を受け取り、二三回フーフーと吹きながら、靜か
に呑み干した。

スバル「若君様、モ一つ何うでございますか」
太子「ヤ、かまうてくれな、餘が勝手に頂くから」
シャ「コラコラ、コルトン、何處へ行つたのだ。早く太子様に御挨拶を申し上げ

ぬか
』

スバ 『お父さま、コルトンは一時ばかり前に飛び出しましたよ。最早歸つて来る氣遣ひはございませぬ』

『ナニ、コルトンが逃げたといふのか、なぜお前はその時とめないのだ』

『お父さま、妾、いい虫蜒が逃げたと思つて、とめなかつたのですよ。いつも妙な事をいつたり、厭らしい目付をして妾を見るのですもの。何だかその度ごとに悪魔に襲はれるような氣がいたしまして、何時も胸が戦いてゐたのです。これでモウ親と子との水入らずで、こんな氣樂な事はございませぬ。お父さま、コルトンがゐなくても妾が炊事萬端を致しますから安心して下さい』

『アハハハハ、到頭、コルトンも山中生活に飽いて逃亡したかなア、無理もない。若い奴が何樂しみもなく、こんな髭武者爺と辛抱してゐたのは、實に感心な者だつた。逃げたとあらば追跡の必要もない。かれの自由に任しておいてやらう。アハハハハ』

『お父さま、コルトンは何時も、こんな事を言つてゐましたよ、……こんな山奥

に不自由な生活をしてゐるのは、若い男として本當に約らないのだけれど、私が歸れば忽ちお父さまが困らつしやるだらう。しかしながら一日も、こんな山住居はしたくないのだけれど、スバルさまのその美しい顔を、朝夕見るのが、唯一の慰安だ、命の種だ。それだから淋しい山奥も、淋しいと思はず喜んで親方さまの御用をしてゐるのだ……と、何時も申しましたよ」

「アハハハハ、女の子といふ者は油斷のならぬものだな。美しい花には害蟲がつき易い習ひ、娘を有つた親はなかなか油斷は出来ぬワイ」

「お父さま、そんな御心配は要りませぬ。なにほど初心こい娘だつて、子供上りだつて、あんな男の言ふ事を諾く者がございますか。太子様の……」

「アハハハハ、蔭裏の豆も時節が来れば花が咲くとやら、不思議なものだなア」
「アリ」
「モシ、前左守様、かうして太子様のお伴をして、一夜の雨宿りをさしていただいたのも、深い縁の結ばれた事でございませう。タラハン國の窮状を救ふため、太子様のお伴をして、今一度都へ出で、國家の爲に一肌ぬいで下さるわけには参りますまいか。嬢様も都見物を遊ばしたら、またお目が新しくなつて嘸お喜

びでございませうから」

「イヤ御親切は有難いが、たとへ太子様のお慈悲の言葉に甘え、都へ出たところ、もはや一切の権利は其方の父が掌握してゐる。十年も山住居をして、世の開明の風に後れた骨董品、たうてい國政の衝に當るなどは、思ひもよらぬことだ。かへつて大王様のお心を揉ませるやうなものだから、御親切は有難いが、私はもうこの山奥で、娘と共に朽ちはてる積りだ。断じて都入は致しませぬ」

「それはさうと、かかる名花を山奥に老いさせるのは實に勿體ないぢやありませんか。あなたは老後を楽しんで花鳥風月を友とし、この山奥に簡易生活を樂しみ暮されるところとしたところで、苔の花のスパールさまを、このまま此處で一生を終らせるのは、どう思つても勿體ない。そんな事を仰せられずに、太子様を蔭ながら守るために都へ出て下さい。そして政治がお厭なれば、どつかの家に身を忍び、お嬢さまを守り立て、立派な花になさつたら何うですか」

「何と仰せられても、元來頑固な生れつき、一度厭と申せば何處までも厭でござ

る
太「左守、餘の頼みだから、餘と共にタラハン城へ歸つてくれる氣はないか」
シャ「ハイ、何と仰せられましても、こればかりは平に御免を被りたうござりま
す」

「ウン、さうか、それほど厭がる者を、無理に伴れ歸るのは、却つて無慈悲かも
知れない。そんなら其方の意志に任す。歸つたらこのアリナに珍しい物でも持た
して、お禮に參らすから……永らくお世話になつた。惜しいけれども、歸らねば
なるまい。しかしシャカンナ、その方に一つの頼みがある。聞いては呉れまいか
なア」

「ハイ、如何なる事でも、最前お斷わり申した外の事ならば、力の及ぶかぎり、
御恩報じのために承りませう」

「ヤ、早速の承引、満足々々、外でもないが、スパール嬢の姿が繪に寫したい」
「ナニ、スバールの姿を撮ると仰せられるのですか、金枝玉葉の御身をもつて、
卑しき私どもの娘の姿をお描き遊ばすとは、あまり勿體ないお言葉。之ばかりは

平にお断わり申し上げませう。冥加に盡きますから」

「なに、さう遠慮するには及ばぬ。どうか餘の頼みぢや、繪姿を描かしてくれ」

スバ「お父さま、若君様のお言葉、お否みなさるのは却つて御無禮でございませう。妾は若君様のお筆に描かれたうございますワ」

アリ「ヤ、お嬢さま、天晴れ天晴れ、出かされました。御本人の承諾ある限りは、モウこつちの物だ。サア若君様、日頃の妙筆をお揮ひ遊ばせ。私が墨をすりませ

う」

シヤ「アハハハ、到頭娘も太子様のお眼鏡に叶ひ、繪姿を取つて頂くのか。てもさても幸福な奴だなア」

スバ「ールはいそいそとして、一張羅の美服に着替へ、門に出で、面白い形をした岩の傍にもたれかかつて、太子の描寫に任せた。太子はせつせと筆を運ばせ、ほとんど一時ばかりにして、實物と見まがふやうな立派な繪姿を描き上げた。

太「ヤア、これで國許への土産が出来た。これを床の間にかけて、朝夕樂しまう。ヤ、爺、ちよつと見てくれ、スバールに似てゐるかな」

シャカンは「ハイ」と答へて、屋内から駆け出し、
「ヤ、若君様、最早お描き上げになりましたか。……何とマア立派なお腕前、感
じ入りましたでございます」

太「ハハハハ、スバールに似てゐるかな」

シャ「どちらが實物だか、親の私でさへ見分けがつかないくらい、よく描けてを
ります。太子様は大變な美術家でございますなア」

太「ハハハハハ」

アリ「學問といひ、藝術といひ、文才といひ、博愛慈善の御心といひ、勇壯活潑
な御氣象といひ、またと一人天下に肩を並ぶる者はありませんよ。何から何まで
完全無缺な御人格を備へてゐられます」

シャカンは首を傾けて、繪畫とスバールとを見比べながら、感歎久しうして
舌を巻いてゐる。主従は午後八時、パンを用意し、惜しき別れを告げて、一ま
づこの庵を去ることとなつた。太子は後振り返り振り返り、名残惜氣に父娘の姿を眺
めてゐる。シャカンの父娘はまた太子、アリの後ろ姿を首を伸ばして見送つ

てゐた。シャカナは思はず知らず十間ばかり後を逐うてゐた。二人の姿は山裾の突き出た小丘に隔てられ、遂に互ひの視線は全く離れてしまった。

主従は元氣よく坂路を東へ東へと谷川の流れに沿ひ下つて行くと、途中に日はズツポリと暮れた。やむを得ず、路端の突き出た石に腰打ちかけ、息を休めてみると、何者とも知れず、突然後方より現はれて太子の頭上を目當に、堅い沙羅雙樹の幹で作つた杖をもつて、骨も砕けと打ち下す。太子は惟神的に體をかはした。その途端に的が外れて、曲者は二人の前に杖を握つたまま地を叩いて、ひつくり返り、頭を打つて悲鳴をあげた。よくよく見れば豈計らむや、シャカナの僕コルトンであつた。主従はコルトンを勞はり起し、いろいろと道を説き諭し、將來を戒めて、また夜の路をトボトボと歸途に就いた。

（大正一三・一二・四 新一二・二九 於祥雲閣 松村眞澄録）

タラハン城内カラピン王の御前に左守、右守を初めとし、數多の重臣が藥罐頭に湯氣をたて太子が知らぬ間に殿内より姿を隠し、踪跡をくらました大椿事につき、いろいろと干からびた頭から下らぬ知恵を絞り出して、小田原評定が初まつてゐる。

王「時に左守殿、日頃憂鬱に沈んだ吾が太子は今日で三日になつても、まだ歸つて來ないのは、どうしたものだらう。何か、いい考へはつかないかのう」

左守「ハイ、誠に恐れ入つた次第でございます。殿中監督の任にありながら、この老臣、大王に對し奉り、死をもつて謝するより外に道はございませぬ」

王「其方の倅も、まだ歸つて來ぬか。餘は思ふに、日頃太子の氣に入り、其方が倅とどつかの山奥へ踏み迷うてゐるのではあるまいかのう」

左「不束な倅奴、太子様のお言葉に甘へ、いつも恐れ多くも友人氣取りになつて振れ舞ひます。その不遜な行爲を、臣は常に憂ひ、いろいろと折檻も致し警告も與へてをりますが、二つ目には藥罐頭だの、骨董品だの、床の置物だのと、罵詈訾を逞しふし、太子様の御寵愛を傘に着て親の言ふ事を聞きませぬ。誠に困つ

た不忠不義の癡者でございます。もし今度幸ひに倅が歸りますれば密室に監禁し、よく物の道理を説き聞かせ、それでも聞き入れねば、ただ一人の倅なれども王家のため國家のため、臣が手にかけて倅が命を絶ち、國の災ひを除く覺悟でございませうから」

王「ヤ、そちの倅も新教育とやらを受け、よほど性質が悪くなつて來たやうだ。しかし、吾が太子も太子だ。平民主義だとか、平等主義だとか、國體に合ない噓言を申し、貴族生活が氣に入らぬ等と駄々をこね、日夜不足さうな面貌を現はし、吾が注意を馬耳東風と聞き流し、手におへない人物となつてしまつた。これも全く餘が一時悪靈に魂を魅せられ、天地に容れざる殘虐の罪を犯したその報いで、老後の身をもつて、あるにあらぬ心の苦勞をさせられてゐるのだらう。アアどうなり行くも宿世の因縁だ。もう左守殿、あまり頭を痛めてくれな。餘も太子の事は只今かぎり斷念する」

左「恐れ多き殿下のお言葉、臣下の吾々、何と申してお詫をすれば宜いやら、實

に恐懼の至りでございます

王「右守殿、太子が歸らぬとすれば、何とか善後策を講じなくてはなるまい。其方の意見を聞きたいものだ。かかる一大事の場合、少しも遠慮は要らないから、其方が心の底を忌憚なく打明けてくれよ」

右守「ハイ恐れ入りました。太子様の御出奔以來、家中の面々を四方八方に派し、殿下のお行衛を搜索いたさせましたが、今に何の吉報も得ませぬ。

今日で三日三夜、この右守も心を痛め胸をなやまし、食事も碌にとれませぬ。翻つて國內の事情を顧みれば、到る所に民衆不平の聲、いつ大事が勃發するかも知

れない形勢になつてをります。加ふるにバラモン軍が襲來するとの噂喧すしく、人心恟々として山川草木色を失ひ、將に阿鼻叫喚地獄を現出せむとするの形勢で

ございます。かくの如く國家多事多難の際に太子の君が御出奔遊ばされたことは、我が國家にとつては、瘦兒に蓮根と申さうか、泣面に蜂と申さうか、實に恐れ多

き次第でございます。風前の燈火にも等しきタラハン國の形勢、國家を未倒に救ひ、大廈の崩れむとするを支ふるのは、倒底一木一柱のよくすべきところではご

ざいませぬ。何分にもこの際には上下一致、億兆一心、あらむ限りの誠心を捧げて國難に殉ずる覺悟が吾々はじめ、なくては叶ひませぬ。かかる危急存亡の際に、太子の君を唆かし奉り、殿内より誘き出したる左守殿の倅アリナこそは、天地も赦さぬ大逆無道の惡臣でござる。まづ國家民心を治むるには親疎の情を去り、上下の區別を撤廢し、眞を眞とし、偽を偽とし、惡を惡とし、公平無私的態度をもつて賞罰を明らかにし、天下に善政の模範を示さなくてはなりません。恐れながら、臣は先づ第一着手として、左守の倅アリナの處分をなさねばならないだらうと考へます。ついてはその父たる左守殿はこの際責任を感知し、闕下に罪を謝し、下は國民に對する言ひ譯のため、進んで骸骨をお乞ひなさるが時宜に適したる最善の處爲と考へます。否、國法の教ふるところと確信いたします。殿下、なにとぞ賢明なる御英斷をもつて、官規を振肅し頑迷無恥の官吏を退け、以て國民に殿下の名君たる事を周知せしめたく存じまする。』

王「イヤ、右守の言も一應尤もだが、今日は未だ太子の行衛も分らず、またアリナの所在も分らぬ混沌の際だから、左守の處分は、さう急ぐには及ぶまい。』

右「殿下の仰せではございますが、國家危急存亡の際、さやうな緩慢の御處置は却つて國家を危ふくするものと考へます。なにとぞ御英斷をもつて疾風迅雷的に解決し、快刀亂麻を斷つの快舉に出でられむ事を、右守、謹んで言上仕ります」

王「汝右守のサクレンス、汝は王家を思ひ國家を思ふ、その熱誠は實に餘は嘉賞する。しかしながら我が國家は餘に及んで十五代、王統連綿として何の瑕瑾もなく、國民尊敬の中心となり、たとへ小なりといへどタラハンの國家を維持して來たものだ。しかるに今太子が貴族生活を嫌ひ、殿内を飛び出すやうになつては、もはや王政も專制政治も到底永續することは出来ない。たとへ太子が歸城するにしても、彼は餘が後をついでタラハン國に君臨する事は好まないだらう。一層のこと、王女のバンナを後繼者となし、適當なる養子を入れて、王家を繼承させた

左「殿下の宸襟を惱ませ奉り、臣として、ノメノメ生命を長らへ、殿下の御心配を坐視し奉るに忍びませぬ。右守の言はるる通り、實に臣といひ倅といひ、王家の仇國家の潰滅者でございますれば、申し譯のため今御前において皺ツ腹をかき

切り、萬死の罪を謝し奉ります。右守殿、何卒國家のため忠勤を勵んで下さい。

殿下、左様ならば

といふより早く用意の短刀、鞘を拂つて左の脇腹につき立てむとする一刹那、王女バナ姫は慌ただしく、簾の中より走り出で、

左守ガンヂー早まるな。今死ぬる命を永らへ、王家のため國家のために何故誠を盡さないのか。死んで忠義になると思ふか、言ひ譯が立つと思ふか。血迷ふにも程があるぞや

と鶴の一聲、左守はハツとばかりに両手をつき、白髪頭を床にすりつけながら聲を振はせ涙を絞り、述べる言葉もきれぎれに、

左「ハイ、誠に無作法な狼狽へた様をお目にかけまして申し譯がございませぬ。なにとぞ、御宥恕を願ひ奉ります」

右「アハハハハ、左守殿、御卑怯ではござらぬか。一旦男子が決死の覺悟、たとへ王女様のお言葉なればとて、卑怯末練にも死を惜しみ、生の執着に憧れ給ふか。左様な女々しき魂をもつて、よくも今まで左守の職が勤まりましたな。チツとは

恥はぢを知しりなされれ」

と悪逆無道あくぎやくぶだうの右守うもりのサクレンスは、左守さもりの自殺じさつを懲憑しやうようしてゐる。彼かれは十年じふねん以前いぜんまでは左守さもりのガンヂーが右守うもりとして仕つかへてゐた頃ころ、家令かれいに拔擢ばつてきされ、右守うもりが左守さもりに榮進えいしんすると共にとも、自分じぶんも拔擢ばつてきされて右守うもりの重職ぢゆうしよくに就ついたのである。今日こんにちの地位ちゐを得えたのは、全くまづた現左守げんさもりの幹旋あつせんによるものであつた。しかるに心汚こころきたなき右守うもりは、大恩だいおんあるガンヂーを邪魔物じゃまものあつか扱あつかひになし、今度こんどの失敗しつぱいにつけ込み左守さもりに詰腹つめばらを切きらせ、自分じぶんがとつて左守さもりに代りかは國政こくせいを自由自在じいうじざいに攪かき亂みだし、時節じせつを待つて王女わうぢよバンナ姫ひめに自分じぶんの弟おとうとエールを娶めあはせ、吾わが一族いちぞくをもつて國家こくかを左右さいうし、自分じぶんは外戚ぐわいせきとなつて權勢けんせいを天下てんかに輝かがやかし、日頃ひごろの非望ひぼうを達たつせむと企くはだてたのである。

カラピン王わうは右守うもりのサクレンスに右みぎのごとき野心やしんあるとは夢ゆめにも知しらず、危機きき一髮つぱつの際さい、國家こくかを救すくふは數多あまたの重臣ぢゆうしんの中うち、この右守うもりの外ほかなしと、ますます信任しんにんの度どを厚あつうした。

されども流石さすがに吾わが弟おとうとのエールを王位わうゐに上のほせ、バンナ姫ひめと相竝あひならんで王家わうけを繼つがせ、萬機ばんきの政治せいぢを總統そうとうさせる事ことは口くちには出だし得えなかつた。そこで彼かれは、ワザとに

次のやうな事を御前會議の席で喋々喃々と喋りたて、王をはじめ重臣共の腹を探らうとした。

右「殿下に申し上げます。「今日は國家のため遠慮會釋もなく言上せよ」との御令旨、参考のために、殿下をはじめ一同の重役達にわが意見を吐露いたします。御採用下さらうと、下さるまいと、それは少しも臣の意に介するところではございません。つらつら天下の情勢を考へますのに、世界の王國は次第々々に倒れ、何れも民衆政治、共和政體と代り行く現代の趨勢でございます。加ふるに肝腎要の太子の君は平民主義がお好きでもあり、常に共產主義を唱道されてゐるやうでございます。開國以來、十五代繼續遊ばしたこの王家をして萬代不易の基礎を固め、王家の繁榮は日月と共に永遠無窮に、月の國の一角に光り輝くべく日夜祈願をこらしてゐましたが、最早今日となつては、どうも覺束ないやうな氣分がいたします。殿下を初め奉り、諸君の御意見は如何でございますうかな」

この意外なる言葉に王を初め左守、その他の重臣は水を打つたのごとく默然として、大きな息さへせなかつた。暫くあつてカラピン王は顔面筋肉を緊張させな

がら、

「意外千萬なる右守が言葉、天の命を受けて君臨したる我が王室を廢し、共和政治を布かうなどとは不臣不忠の至りだ。右守、汝も時代の惡風潮に感染し、良心の基礎がぐらつき出したと見える。左様な精神で、どうして我が國家を支へることが出来るか。よく考へて見よ」

この言葉に竝みある老臣等はやや愁眉を開き、一齊に口を揃へて王の宣言に贊意を表した。左守は憤然として立ち上り兩眼に涙を浮べながら、右守の側近く二ジリ寄り短刀の柄に手をかけ、聲を慄はせながら、

「汝右守のサクレンス、徒に佞辨を揮ひ、表に忠臣義士を粧ひ、心に豺狼の爪牙を藏する惡逆無道不忠不義の曲者奴、萬代不易の王政を撤回し共和政體に變革せむとは何の囁言、不臣不忠の至り、もう此の上は左守が死物狂ひ、汝が一命を斷つて國家の禍根を絶滅せむ、覺悟いたせ」

と言ふより早く右守に向かつて飛びつかむとする。王女のバンナは又もや聲をかけ、

「左守、しばらく待て、王様の御前であらうぞ。殿中の刃物三味は國法の嚴禁するところ、血迷うたか、狼狽へたか。左守、冷靜に善惡理非を辨へよ」

左守は聲を勵まして、

「王女様の嚴命なれども、もとより不忠不義なるこの左守、死して萬死の罪を謝し奉る。ついては御法度を破る恐れはございませうが、この右守を殘しておかば王家を亡ぼし國家を亡ぼす大逆者でござれば、右守の命を絶つ考へでございます。何卒この儀はお許し下さいませ」

と又もや斬つてかかる。右守は打ち驚き松の廊下の師直よろしく、

「左守殿、殿中でござる 殿中でござる」

と連呼しながら彼方此方へ逃げまはる。重臣のハルチンは加古川本藏よろしく、左守の後よりグツと強力に任せて抱きかかへ羽抱絞めにしてしまった。左守は、
「エー、放せ、邪魔召さるな。王家の一大事だ。國家の禍根を拂ふのは此時でござる」

とあせれど藻掻けど、強力のハルチンに抱きつかれ、無念の齒噛みしながらバタ

りと短刀を床上に落としした。右守はこの隙に乗じて雲を霞みと卑怯未練にも逃げ出してしまった。

かく騒ぎの最中へ太子の君はアリナと共に悠然として城門を潜つた。今や生命から髪振り亂し、逃げ出して来た右守のサクレンスは狼狽のあまり門口にてアリナの胸にドンとばかりつきあたり、二人は共に門前の階段から、二三間ばかり下の街道へ轉げ落ちた。幸ひにアリナは何の負傷もせなかつたが、右守のサクレンスは脛を折りノタノタと四這ひとなり、生命カラガラ吾が家を指して猫に追はれた鼠よろしく逃げ歸り行く。

(大正一三・一二・四 新一二・二九 於祥雲閣 北村隆光録)

第二章 針灸思想 (一七二三)

左守の倅アリナは、評議の結果一ヶ月の謹慎を命ぜられ、父の館に閉ぢ籠めら

れてゐた。左守司のガンヂーも別に王からの咎めはなけれども、殿中を騒がし右守と刃傷したその責任を負ひ、自ら門を閉ぢ謹慎を守つてゐた。

ガンヂー「オイ倅、貴様は何といふ不埒な事を致したのだ。貴様がいつも太子の君を煽て上げ、共産主義だとか、人類愛善だとか、ハイカラ的新思想を吹き込むものだから、あんな御精神におなり遊ばされ、萬代不易の王統を繼ぐ事をお嫌いなされ、殿内を飛び出し、上は大王殿下を始め奉り、この父や老臣共に心配をかけ、上下を騒がしたその罪はなかなか淺くはないぞ。これから心を改むればよし、今までの料簡であるならば太子のお側付は許されない。さうして吾が家にも置く事は出来ない。ちつとは親の心にもなつて見てくれ。王様の宸襟を惱まし奉り、老臣共に心配をさせ、殿内を騒がしたぢやないか」

アリナ「ハイ、いかにも父上のお言葉の通り、大王様に御心配をかけ、老臣を驚かせ殿内を騒がしましたのは事實でございます。しかし私は同じ殿内を騒がしても、父上のやうな刃傷などの亂暴は致しませぬ。お父さま、私に御意見下さるのならば、先づ貴方のお尻を拭ひ、自分の顔に留まつた蜂を拂ひ、眞面目になつて

御教訓を願ひます。此の親にして此の子あり、親子が一致して、大王殿下の宸襟を惱まし奉り殿内を騒がしたのも、何かの因縁でございませうよ」

「工工、ツベコベと譯も知らずに屁理窟を言ふな。お前と俺とは同じ殿内を騒がしたにしても譯が違ふのだ。天地霄壤、黒白、月鼈の差違があるのだ。かれ右守のサクレンス奴、王家の専制政治を廢し、共和政治を立てやうなどと、大それた國賊的機略を弄し、殿下の宸襟を惱ませ奉つたによつて、俺は命を的に奸賊を誅伐せむと彼れ右守に斬りつけたのだ。貴様のやうに、大切な太子に種々のハイカラ的思想を注入し、太子の精神を惑亂し、遂には國家の一大事を惹起せむとするやうな惡逆無道の行爲とは比べものにならぬのだ。確りと性念を据ゑて父の言葉を聞いたらよからうぞ。大王様は金枝玉葉の御身をもつて、汝一人の爲に有るにあらぬ御苦心遊ばしてござるのだ。その倅の父たるこのガンヂーが、どうしてノメノメと生きてをられやうか。お前がどうしても悔い改めて、太子の御心を翻さぬにおいては、もはやこの父は自害して申し譯を立てねばならぬ羽目となつてゐるのだ。不忠不義の極惡人とは貴様の事だ。どうしてまアこんな極惡人が俺の

胤たねから生うれたものだらうなア」

「アハハハハ、お父とうさま好よく自じ分の今いままでの行かう動どうを顧かみて御ご覽らんなさい。さう、堂だう々と私わたしに向むかつて、御ご意い見けんは出で来きますまい。お父とうさまは私わたしが幼えう年ねんの時ときまでは、右う守もりの司かみと仕つかへてゐらつしやつたのでせう。その時ときに忠ちう誠せい無い比むのシヤカンナといふ左さ守もりの司かみ様さまが國こく政せいを料れう理りしてござつたでせう。亡なくなられた王妃わうひ様さまは惡あく魔まに魅みいられ、日ひに夜よに殘ざん虐ぎやく性せいが募つり、遂つひには無む辜この民たみを虐しひた、憐あはれなる妊にん婦ぶの腹はらを割さいて胎たい兒じを剔えぐり出だし、丸まる煮ににして食しょく膳ぜんに上のせ舌した鼓つづみを打うつてござつたにも拘かはらず、死しを決けつして直ちよく諫かんし奉たてまつ事ことも知しらず、却かへつて王妃わうひに媚こび諂へつらひ、殘ざん忍にん性せいをしてますます増ぞつちやう長ちやうせしめられたぢやございませぬか。國こく民みんの怨えん嗟さの白しら羽はの矢やが王妃わうひの狩かりの遊あそびの砌みぎり、天てんの一方いつぱうより飛とび來きたつて王妃わうひの額ひたひを射いぬきその場ばで絶ぜつ命めいし、國こく民みんは是これを聞きいて却かへつて喜よろこんで密ひそかに祝しゆく賀がく會わいを開ひらいた事ことがあるぢやございませぬか。それほど國こく民みんの怨えん嗟さの的まととなつてゐる王妃わうひを嗾そかした上うへ、大だい王わう様さまにまでいろいゝの惡わるい知ち惠ゑを吹ふき込こみ……天てん誅ちうの白しら羽はの矢やを左さ守もりの部ぶ下かが射いは放なつたものだ……など無む實じつの罪つみを着きせ、大だい王わうの手てをかつて左さ守もりの妻つまハリスタ姫ひめを斬きり殺ころし、なほ飽あき足たら

ず左守の命を取らむとして果さず、遂に自分が取つて代つてしやあしやあ然とし
て左守の職につかれたぢやありませんか。それさへあるに左守家の巨萬の財産を
全部没收し、自分が國民に信用を繋がんがために頭の揉めない、腹の痛まない、
かれの財産を國民に與へ、善の假面を被り、悪行を遂行した極重惡人ぢやござい
ませぬか。お父さまのためにシヤカンナは可憐な娘と共に天下漂浪の旅に出で、
今にその行方さへ知れないといふぢやありませんか。あなたの前にては誰も彼も
阿諛諂佞追従の有らむ限りを盡し、お髯の塵を拂はむとする役人ばかりでござい
ますが、彼等は面従腹背、蔭では、いづれも後ろ向いては舌を出し、言葉を極め
てお父さまの惡逆無道を罵り、かつ憎んでをりますよ。タラハン國が今日のごと
く亂れかかつて來たのも皆、お父さまの責任ですよ。壓制と強壓と專制に便利な
時代不相應の法律を作り、軍隊や警察や監獄の力で、今までお父さまは國民の頭
を抑へつけ、思想を壓迫し、あらむ限りの吾儘勝手を振舞つて來たぢやありませ
ぬか。お父さまの惡徳が子供に報いて遂に累を王家に及ぼし、今日の悲惨の有様
になつたのぢやございませぬか。お父さまこそ私の意見を聞いて翻然と悔い、忠

誠せいの赤心まごころと愛善あいぜんの行おこなひに立たちかへつてもらひたいものです。私わたしはお父とうさまの口くちから御意見ごいけんを聞きくのは、ちやうど地獄ぢごくの鬼おにが擦鉢すりがねを叩たたいて念佛ねんぶつを唱となへてゐるやうで滑稽こっけいでたまりませぬわ。いやむしろ抱腹ほうふく絶倒ぜつたうの至いたりでございます、アハハハハ」
「これや倅せがれ、何なんといふ口巾くちはばの廣ひろい事を申ますか。かりそめにも子ことして父ちちの行爲かうゐを云々うんぬんし、くだらぬ意見いけん口くちを叩たたくといふ事は、天地てんち轉倒てんたうも甚はなはだしいではないか。
「親おやと主人しゅじんは無理むりを言いふものと思おもへ」との格言かくげんを何なんと心得こころえてゐるか。何なんというても親父おやぢぢやないか。善惡ぜんあく正邪せいじやにかかはらず、親おやに反抗はんかうする奴やつは天下てんかの不孝ふかう者ものだ。貴様きさまも最早もはや十八じふはち、ちつとは孝行かうかうといふ事ことを知しれ。いな忠義ちうぎの道みちを辨わかまへねばなるまいぞ」

「お父とうさま、貴方あなたは親おやといふ名なの下もとに私わたしを壓迫あつぱくするのですか。吾わが子こになればどんな無理難題むりなんだいを吹ふきかけても、それで道理だうりが立たつと思おもひますか。そんな古ふるい道徳だうとく主義しゆぎは三百年さんびやくねんも過去くわこの事ことですよ。こんな流義りうぎで國政こくせいに當あたられては、數多あまたの役人やくにんや國民こくみんどもの迷惑めいわくが思おもひやられます。私わたしはお父とうさまの所謂いはゆる、不孝ふかう者もの、不忠ふちう者ものになりたうございます。大孝だいかうは不孝ふかうに似にたり。大忠だいちうは大逆だいきやくに似にたり」と古いにしへの聖人せいじんも言い

つたぢやございませぬか。大義親を滅するとかいふ諺もございます。私は大義明分のためには親を捨てます。何時までもその精神をお變へ下さらぬ以上は、親でも無ければ子でもありません。私の方から貴方に向かつて勘當をいたしますよ」
「これ倅、言はしておけば何處までもつけ上り親を親とも思はぬその暴言、手打ちに致してくれるぞ」

「お父さま、よいかげんに血迷つておきなさいませ。何を狼狽してをられるのです。アリナの身體は最早貴方の自由にはなりません。私の身體は太子様の杖柱とお頼み遊ばす、タラハン城に無くてはならない國寶ですよ。もしお手打ちに遊ばす御所存ならば、大王殿下および太子殿下のお許しを得た上になさいませ。太子殿下の寵臣を、何ほど左守だつて自由にする事は出来ません。それこそ貴方は不忠不義の大逆賊となるでせう」
「不忠不義とは何たる暴言ぞ。貴様こそ萬代不易の王家を覆へさむとする惡逆無道の曲者だ。不忠不義の逆賊だ。共産主義や平民主義を太子殿下に日夜吹き込んだ賣國奴め、黙言おろう」

「お父さま、天帝より賦與された私の言論機關を行使するのは、私の自由の権利でございます。今日の不完全極まる貴方の作つた法律でさへも、言論集會の自由を認めてゐるぢやございませぬか。左様な解らぬ事をおつしやいましたは、耄碌爺といはれても辨解の辭はありますまい。矛盾混沌、自家撞着もここに至つて極まれりといふべしです。あなたは一體個人の人格を無視せむとしてゐられますが、國民としても、個人としてもその個性を十分發達させ、天地の分靈としての働きを十二分に發揮させ、その自由の權を十分行使させねばならぬぢやありませんか。それなのに、あなたは壓迫や威喝をもつて之を妨げむとするのは、時代に疎い癡狂癡呆者といはねばなりませんまい」

「お前は年が若いから政治の樞機に参加した事がないから、左様な小理窟をこねるのだ。しかしながら理論と實際とは大いに違ふものだ。今頃の政治家を見よ、野にある時は時の政府の施設に對し、どうかうのと極力反對を試み、民衆を煽て上げ遂に政府を乗つ取り、さて國政を執つてみると俄然と調子が變つてきて、野にあつて咆哮した主義主張もケロリと捨て、いな放擲せなくてはならぬやうに

なるものだ。それだから世の中は議論と實際とは大いに徑庭のあるものだ。その間の消息も知らずに青二才の分際として、小田の蛙の鳴くやうにゴタゴタいうても納まらないぞ。總て政治の秘訣は壓迫に限るのだ』

『どこまでもお父さまは解らないのですな。理窟はどんなにでもつくものですよ。専制と壓迫を唯一の武器として治めてみたスラブはどうです。チャイナはどうですか。既に已に滅亡したではありませぬか。世界各国競うて共和主義をもつて治國の主義となし、次から次へと王政が亡びてゆく趨勢を見ても、時代の潮流は共和主義に向かつて、急速力を以つて進んでゐるぢやありませんか、個人個人を無視するやうで、どうして國家を治める事が出来ませうか。賢明なる太子殿下は早くもこの點に氣付かれ、王位を去つて庶民となり、個人として、人間らしい生活をやつてみたいと望んでゐらつしやるのですよ。もうお父さま、あなたも好い加減に骸骨をお乞ひなさい。あなたが一日國政を料理されるだけ、それだけ國家は滅亡に向かふのです。國民の多くは……頑迷固陋の左守が、一日も早くこの世を去れば、一日だけ國家の利益だ……と言つてをりますよ』

「お前は個人個人というて盛んに個人主義をまくし立てるが、個人主義が発達すればするほど専制政治が必要ぢやないか。完全なる個人主義が発達し、生活し得る力が出来たところで、ほんの小つぽけな砂のやうなものだ。二十萬の國民が、二十萬粒の砂になつたやうなものだ。個々別々になつた砂は何ほど堅固でも團結力はあるまい。個人としてはよからうが、國家および團體としては實につまらぬものぢや。そこで、カラピン王家といふ大きな革袋が必要なのだ。この革袋に二十萬粒の砂を入れ袋の口を固く縛り、横槌などで強く叩きつけてこそ初めて一つの國家團體が固まるのぢやないか。革包の破れた袋はいはゆる支離滅裂何の力もない。それを貴様は破らうとする極重惡人だ。賢明なる殿下のそれくらゐの道理のお解りにならない筈はないのだが、貴様が常に悪い思想を吹き込むものだから、あのやうな悪い精神におなりなされたのだ。いはば貴様はタラハン國を覆へす惡魔の張本だ。アアもう仕方がない。死ぬにも死なれず、倅は何ほど説き聞かしても頑迷不靈にして時代を解せず、政治を知らず、何とした苦しい立場であらう」

「お父様、煩悶苦惱の今日の境遇、私も同情いたしますが、しかしながら心の持

ちやう一つでございますよ。ちつと郊外の散歩でもして、天地の藝術を御覽なさいませ、さうすれば些とは胸も開けて新しい思想が生れて來るでせう」

左守は青息吐息しながら、

「アアアとやせむ角や線香の煙となつて、タラハンの國家は滅ぶのかなア」

（大正一三・一二・四 新一二・二九 於祥雲閣 加藤明子録）

第二章 憧憬の美（一七二四）

太子は吾が館の奥深く潛みながら、スバル姫の畫姿を床の間に掛け、朝夕眞の美貌に憧憬し、思ひを遠く朝倉谷の賤が伏家に通はせてゐた。寵臣のアリナは三十日の監禁を命ぜられ、話相手もなく、實に淋しき思ひに悩んでゐたが、スバル嬢の畫姿を見ては、煩悶苦惱の炎を消してゐた。

「しかし今日は最早アリナが赦されて自由の身となる當日だ。彼も會ひたいだら

う。自分も早くアリナに會ひたいものだ」

と獨り語ちつつ、憂愁に沈んでゐる。そこへ重臣のハルチンは恐る恐る罷り出で、
「太子殿下には相變らせられず、御壯健なる神顔を拜し奉り、ハルチン身に取り
恐悦至極に存じます」

太子「ヤア、そなたはハルチンか。先日殿内において大椿事突發の際、そなたは
危険を冒して左守を抱きとめ、右守の難を救つたとかいふ事、實に神妙の至りだ。
近く寄つて何か面白い快活な話を聞かしてくれないか」

ハル「ハイ恐れ入り奉ります。微臣は微臣として盡すべき道を盡したまででござ
いますから、お褒めの言葉をいただいては汗顔の至りに堪へませぬ。一度御伺ひ
申し上げたいと存じましたが、あまり恐れ多いと存じまして、今日まで控えてを
りました。殿下には左守の倅アリナを殊の外御寵愛遊ばされ、晝夜の區別なく、
お側に侍らせ玉ひ、誠に結構至極の至りにござりますが、しかしながら一人の家
來ばかりを御信用なさいますと、大變な過ちが出來ますから、そこは賢明なる
殿下の御聖慮をもつて、他の臣下をもどうかお近よせ下さいまするやう、お願い

申し上げまする」

「アハハハハ、澤山な臣下はウヨウヨとしてゐるが、餘の氣に入る人間らしい臣下がないので、やむを得ず淋しいながらも、アリナを近付けてゐるのだ。お前はアリナの人物を何と思つてゐるか。忌憚なく餘の前に感想を吐露しろ」

「ハイ、殿下の御寵臣を彼れ此れ申し上げまするは、臣下の身分として恐懼に堪へませぬ。どうか之ばかりはお赦し願ひたいものでございます」

「ナニ、そんな躊躇が要るものか。お前の思つてるだけの事をいつてみてくれ。餘もアリナの行動に對し、そなたの意見を聞いて、不都合と認められた時は、今後の出入を差しとめるつもりだから」

「ハイ、さすがは御賢明なる太子様、それでこそタラハンの國家は萬代不易、微臣の私も旱天に雨を得たるごとく、喜びに堪へませぬ。然らば申し上げますが、かれアリナは父にも似合はぬ生意氣な男で、何事も文化文化と申して新しがり、國家の基礎が危ふくならうが、王家がどうならうがチツともかまはない不忠不義の惡魔でございます。殿下が何時までも彼がごとき者を近よせ、御信用遊ばして

は、王家のため、國家のため、一大事が突發せないとも限りません。どうか賢明なる聖慮に見直し下さいまして、臣が言葉も少しは御採用下されませ。王家のため、國家のため、已むを得ず死を決して、このハルチンは殿下のお怒りを存じながら直諫に参りました」

太「ウム、さうか、アリナといふ奴、それほどお前の目から悪人と見えるかのう。時代に目醒めた新しき主義を唱へる者が、王家國家を亡ぼすとは、チツと受取れぬではないか。今日の世の中は今までのごとく、強壓的專制的方法をもつて人民を治めることは出来ないよ。時代に順應してそれ相當の政治を行はねば、かへつて國家は危ないだらう」

「殿下の御令旨、ご尤もではございますが、大王殿下の御心配も、重臣一同の徹夜の煩悶も、元を糺せば、かれ青二才が殿下に媚びへつらひ、尊貴の御身をば恐れ多くも、猛獸猛る山野におびき出し奉り、いろいろの苦勞をさせましたからでございます。かかる不忠不義の逆臣を、お側近くおよせなさつては、お爲になりません。どうぞ之ばかりはお考へを願ひたいもので、ございます」

「アア父上といひ、左守、右守といひ、お前といひ、よくもマア亡國の因蟲が夕ラハン城にはびこつたものだのう。イヤ餘は左様な言葉は聞きたくない。それよりもお前は左守、右守の頑迷連に盲從して、國家滅亡のために精々力を盡すがよからうぞ」

「これはまた、殿下のお言葉とも覺えませぬ。國家滅亡のために力を盡せよとは、臣下の心胸をお察し下さらぬのにも、程があるぢやござりませぬか。私は殿下のお言葉を耳にしてお怨み申します」

「ハハハ、お恨み申すのは相身互ひだ。餘は國家を泰山の安きにおき、國民をして平和な幸福な生活を送らしめ、地上に天國の樂園を移さむがため、晝夜肝膽を碎いてゐるのだ。何れの臣下も權勢に阿り、富貴に媚び、自己の名利榮達のために全心を傾注し、王家のため、國家のためと、表面立派に唱へながら、その内心をエツキス光線に照らしてみれば、何れも自己愛の外に何物もない。實にかかる臣下を持つて、政治をとられてゐる夕ラハン國家は、危ふい哉である。餘は一人も知己もなく、師匠もない。日夜寂寥の空氣に身邊を包まれ、失望落膽の淵に漂う

てゐるのだ。諺にも……溺れ死せむとする者は、一莖の藁にも縋る……とかや、
吾が心中を洞察した左守の一子アリナのみを唯一の友となし、力となして、どう
か國家を未倒に救はむと、晝夜焦慮してゐるのだ。アリナを排斥するのは即ち餘
を排斥するも同然だ。餘を苦しめたく思はば、アリナを汝等重役どもが鳩首凝議
して、如何なる壓迫なりと、排斥なりと加へたが可からう」
「殿下には重臣の中において、一人も眞に王家を思ひ國家を愛する者はなく、何
れも自己愛の奴隸のやうに仰せられましたが、それはあまり殺生と申すもの。王
家を思ひ、國家の前途を憂ふればこそ、吾々臣下どもは、夜の目も寝ずに心を痛
めてゐるのではございませぬか。少しは御推量を願はしく存じます」
「お前達の王家國家を思ふといふのは、要するに自己保護の爲だ。何者かの外敵
に我が國を亡ぼされ、王家も共にスラブのやうに亡んだ時は、ただ一人餘が身邊
を保護する者はあるまい。細々ながらも、國の主、王族として君臨してゐるのだ
から、お前達も王家を利用して種々の便宜を得るためだらう。王家の亡ぶのは即
ち汝等の亡ぶのだ。それだから、王家だ、國家だと、忠義面して騒いでゐるのだ。

アハハハハ」

かかるところへ、アリナは三十日の監禁を赦され、意氣揚々として案内もなく、太子の居間へ這入つて来た。太子は見るより、

「ヤ、アリナか、よう来てくれた。三十日の監禁もずるぶん困つただらうね」

アリナは両手をつきながら、

「殿下には何時も變らせられず、御壯健なお顔を拜し、歡喜にたへませぬ。三十日の間監禁され、親しく父と意見の交換をする便宜を得まして、大變好都合でございました。さすが頑迷固陋の父も前非を悔い、やうやく時勢に目が醒め、殿下の御心中を察し參らせ、今後は何事も殿下のなさる事については、容喙しないと誓ひましてございます」

太「アハハハ、さうか、そりやお手柄だつた。マア結構々々、今ここに一人の頑迷屋がやつて来てな、いろいと下らぬ事を言つてくれるので、實ア困つてゐたところだ。しかしながら此ハルチンはお前の父が殿中で騒いだ時、後ろからだきとめて、大事を防いだ殊勳者だから、お前も褒めてやらねばなるまいぞ」

アリ「ヤ、ハルチン様、お久し振りでございます。先日せんじつは父ちちが、大變たいへんな御厄ごやつかい介かいになつたさうです。お蔭かげさままで、大事だいじを未然みぜんに防ふせぎ、右守うもりの司つかさも、惜をしい命いのちを救すくはれたといふもの、右守うもりは貴宅きたくへお禮れいに上あがつたでせうな」

太たい「餘よが山野さんやの遊あそびから歸かへつて來た時とき、右守うもりは血相けつさうを變かへて、表門おもてもんへ飛とび出す際さい、アリナにつき當あたり、階段かいたんから轉ころげ落おち脛すねをくぢいて、はふはふの體ていで歸かへつた時ときは、ずるぶん氣きの毒どくだつた。一度いちど見舞みまひに誰たれかを遣つかはしたいのだけれど、餘よもあまり心こころが塞ふさいでゐたので、つい手遅ておくれしたのだ。オイ、ハルチン、お前まへは右守うもりの司つかさに會あうたら、餘よが宜よろしくいつてゐたと傳つたへてくれ」

ハル「ハイ、仁慈じんじの籠こもつた殿下でんかのお言葉ことば、右守うもりの司つかさも、さぞ喜よろこばれるでございませう。時ときにアリナさま、今承いまけたまはれば、お父上ちちうへは殿下でんかの御心みこころに従したがふ、何事なにごとも干渉かんせうはせないと仰有おつしやつたやうでございしますが、それは實際じつさいでございしますか」

アリ「實際じつさいも實際じつさい、極眞ごくまじめ面目めいに言いつてみましたよ。その代かり、三十日さんじふにちの間あひだ、僕ぼくもずるぶん舌したの根ねがただれるところまで奮闘ふんとうしました。さすがの頑固くわんこ爺おやぢも、たうとう兜かぶとを脱ぬいで、少すこしばかり靈みたまの鏝さびが除とれ、黎明れいめいの曙光しよくわうを認みとめたやうです。親爺おやぢが

第一改心してくれないと、タラハンの國家が持てないですからなア」

ハル「ア、左様でございますか。左守の司様がお考へは日月の光明も同様でございます。然らば私もこれから殿下の御意志に服従いたしますれば、なにとぞ今までの御無禮をお赦し下さいませ」

と權勢に媚びへつらひ、自己の榮達のみを念としてゐるハルチンは、如才のない事を言つてゐる。

太「ハハハ今まで餘を殿下殿下と尊敬してゐたが、今のハルチンの言葉の端から考へてみると、餘に對しては絶對信用をおいてゐなかつたのだなア。それがハルチンの偽らざる告白だらう。否ハルチンのみならず、一般の重臣どもは同じ考へを持つてゐたのだらう。それだから餘は氣に入らなかつたのだ。ハルチンも如才のない男だのう。餘はアリナに相談があるから、また今度會はう、速やかに歸つてくれ」

ハル「ハイ、御意に従ひ罷り下るでございませう。何分にも宜しくお願い申し上げます」

と米搗き蠡斯よろしく、この場を辭して歸り行く。

太「アハハハ、到頭、偽善者が一人、退却しよつた。サアこれから餘とお前と水入らずだ。何か面白い感想はないかな」

アリ「ハイ、別に變つた感想も浮びませぬが、あの頑固爺奴、何といつても目が醒めないのです。頑固黨のハルチンが御前に控へてをりましたので、ワザとにあらんな事言つて氣を引いてみたのでございます。なかなか何うして何うして、頑固爺の頭は駄目でございますよ」

「アハハハ、お前も面白い藝當をうつ男だな。ハルチンが掌を返したやうに贊成した時の可笑しさ。餘も大いに人情の機微について研究をしたよ。時にアリナ、この畫像を見よ。何時もこの掛物から浮出して來て餘にもものを言ふやうだ。お前が監禁中はこの畫像を唯一の伴侶として、煩悶の焰を消してゐたのだ。實に麗しいものぢやないか」

「殿下、それほどスバル嬢がお氣に召しましたか」

「ウン、ズツと氣に入つた。寢ても醒めてもスバル嬢の姿が吾が目にはちらつき、

恥づかしながら、硬骨無情の餘も戀といふ曲者に捉はれたやうだ。何ほど畫姿をみてゐても、殿下とも何とも言つてくれない。何とかしてモ一度實物に會つてみたいものだが、この頃の嚴重な警戒線は到底破る事は出来まい。こればかりが實は煩悶の種だ。察してくれ」

殿下、それほどまで思召しますなら、私が彼れシャカナを説き伏せ、スバル姫をタラハン市まで、迎へて來ませうか」

さうして貰へば有難いが、しかし何うして殿中へ入れることが出来やうぞ」

「たうてい今日の場合、殿中へお呼び寄せになることはチツと困難でございますが、日頃殿中へお出入を致す、生花の宗匠タールチンを、黄金の轡をはめて買収し、彼が離室にスバル嬢様をかくまはせ、隙を窺つて殿中を脱け出だし、時々お會ひ遊ばして、お楽しみなされては如何でございますうか」

「そんならよきに取計らつてくれ。どうにもかうにも、餘は堪へ切れなくなつて來たのだ」

「キツと目的を達して歸ります。どうか凱旋の時をお待ち下さいませ」

(大正一三・一二・四 新一二・二九 於祥雲閣 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・二三 王仁校正)

}\ }\ }\ }\ }\ }\ }\ }

靈界物語 第六七卷 山河草木 午の巻

終り